

令和2年度

兵庫県優秀教職員実践事例集

兵庫県教育委員会

はじめに

昨年来、全世界に大きな影響を及ぼしている新型コロナウイルス感染症は、奇しくもグローバル社会を実感させると共に、これまでの生活、経済活動に大きな影響を及ぼしました。教育活動も例外ではなく、授業のICT化の促進等大きな変化が求められています。先行き不明な「予測困難な時代」を生きる子ども達には、第3期ひょうご教育創造プランの重要テーマである「未来への道を切り拓く力」の育成がますます必要になってきます。

この様な状況の中、昨年度は小学校で、今年度は中学校で新しい学習要領がスタートしました。その総則では、「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童(生徒)に、生きる力を育むことを目指す」と定め、高等学校では、主体的に判断・行動し、新たな価値観を創造できる力の育成、多様な価値観を創造できる力の育成、多様な価値観を持つ人々との共生が求められています。

さて、本県では、平成18年度から教職員の意欲・資質能力を向上させ、教育の活性化を図ることをめざし、日々の学校教育活動において他の模範となる優れた取組を行い、特に顕著な成果をあげている教職員を「兵庫県優秀教職員」として表彰しています。15回目となる令和2年度は、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校合わせて29名の教職員が表彰されました。

本冊子は、今後の学校教育における取組の参考としていただくために、令和2年度に表彰された優秀教職員の優れた取組を「令和2年度兵庫県優秀教職員実践事例集」として取りまとめたものです。第3期ひょうご教育創造プランを踏まえつつ、新学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす教育活動に取り組む際に、多くの教職員の皆さんにご活用いただければ幸いです。

目 次

1 小学校

感染症対策で果たすべき養護教諭の役割とは

～緊急時と通常時の感染症対策から～

伊丹市瑞穂小学校 主幹教諭 篠崎 葉子 2

子どもの主体性に基づいた図書委員会の活動

川西市立清和台小学校 教諭 稲田 拓也 6

達成感や自己有用感を高める体験活動の工夫

～川西市の里山体験事業～

川西市立東谷小学校 教諭 野間 俊介 10

「通常の学級で生かされる力を育てる通級指導を目指して」

三田市立けやき台小学校 教諭 佐野 敬一 14

自他を大切にできる子どもの育成 命の学習の取組

加古川市立鳩里小学校 主幹教諭 塩濱 千晴 18

子どもが願いをもつ算数の授業

加西市立北条東小学校 主幹教諭 國野 大樹 22

学校経営方針を核にした、指導目的を共有する生活指導

加東市立東条西小学校 主幹教諭 中山 庸平 26

国語好きな子を育てる国語科授業の創造

姫路市立高岡小学校 教諭 本家 由美 30

「考えの組み立てや改善が『見える』工夫を取り入れたプログラミング教育」

姫路市立城東小学校 教諭 横田 直人 34

新時代を切り拓く社会科学習の在り方について	
姫路市立城陽小学校 主幹教諭 小川 真也	38

「主体的・対話的で深い学びを実現する算数科授業の創造」	
姫路市立城乾小学校 教諭 田中 涉	42

姫路市学校事務職員協議会活動の取組	
～ 学校業務改善の推進 ～	
姫路市立豊富小中学校(前期課程) 学校副主幹 木村 由賀里	45

自分の思いや考えを伝えるための表現力の育成をめざした国語科教育	
～ 目的や意図に応じて資料の活用を取り入れて～	
たつの市立小宅小学校 教諭 柿本 亜津子	49

情報活用能力の育成に向けたプログラミング教育の推進	
太子町立石海小学校 教諭 入江 賢一	53

「自ら学び続ける児童の育成をめざして」	
丹波市立青垣小学校 主幹教諭 荻野 由香里	57

地域と連携し、主体的に行動する児童を育成する防災カリキュラムの作成	
南あわじ市立福良小学校 主幹教諭 浅井 裕治	61

生活科・総合的な学習を核とした教育活動の取組	
淡路市立志筑小学校 主幹教諭 南 志乃婦	65

2 中学校

「中学校における全校一斉の数学教え合い学習『笹トレ』の試みと授業の確立」	
伊丹市立笹原中学校 教諭 古谷 俊樹	70

「論理的な意志決定をめざす社会科学習法の開発」	
三田市立上野台中学校 主幹教諭 王子 明紀	74

一人一人の生きる力の育成につながる学習指導について	
佐用町立上月中学校 主幹教諭 伊勢 幸弘	79

「学校給食の管理と食に関する指導を一体的に行う取組」	
養父市立養父中学校 栄養教諭 井口 留美	82

3 高等学校

総合学科の在り方とは	
～これまでの課題を見直し、新たな取り組みへ～	
兵庫県立伊丹北高等学校 教諭 寺西 友理	90

ICTを活用した英語指導改善と成果の伝達	
兵庫県立宝塚西高等学校 教諭 上本 善之	94

「自然科学系部活動での実践事例を生かした課題研究指導法の開発とその普及」	
兵庫県立宝塚北高等学校 教諭 木村 智志	98

第67回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会を通して	
兵庫県立社高等学校 教諭 徳平 孝子	102

「福祉教育の発展と充実を目指して」	
兵庫県立龍野北高等学校 教諭 上田 貴美	106

「生徒の成長と安全・安心で居心地の良い場所づくり」	
兵庫県立香住高等学校 教諭 小林 晋輔	110

4 特別支援学校

「社会人として自立していくための就労支援」

一人一人の良さを伸ばし、共生社会で主体的に生きる力を育むキャリア教育

兵庫県立西はりま特別支援学校 主幹教諭 穴戸 成光 115

特別支援学校における地域と連携した防災教育の推進

兵庫県立和田山特別支援学校 主幹教諭 榎 真一 119

所属名、職名はいずれも令和2年度時点のものです。

1 小学校

感染症対策で果たすべき養護教諭の役割とは ～ 緊急時と通常時の感染症対策から～

伊丹市瑞穂小学校
主幹教諭 篠崎 葉子

1：取組の内容・方法および成果と考察

2020年1月、中国武漢から始まった新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）は瞬時に世界中に拡がり、今も日常生活や学校生活に大きな影響をもたらしている。コロナ以外にも2009年には新型インフルエンザ（現在は季節性インフルエンザとなっている）で1週間の休校措置を経験している。その他ノロウイルス感染症など学校生活において注意すべきものは多い。学校における感染症対策で養護教諭はどのような役割を持ち動いたらよいかを、コロナ対策における役割、あいうべ体操を中心に行った季節性インフルエンザの予防活動の二つの実践から考えていきたいと思う。

取組1 コロナ対策における役割（4月の動きを中心に） -

< 校内コロナ対策委員会の立ち上げ（感染症対策委員会） >

新年度の休校明け、新学期に子どもたちを学校に迎えるにあたり、どのような感染症対策をとれば安全・安心して登校できるのか、養護教諭一人で考えていても不安が募るだけだった。学校全体で考えないと対策はとれないと考え、対応の流れを表にまとめてみた。

日時	動き	内容
4月2日	職員研修：感染症対策（ノロウイルス・コロナウイルス）	ノロウイルスの処理方法の研修にコロナ対応を組み入れて行い、コロナ対応の基本の考え方を職員に伝える。（図1）研修の最後に職員に問いかけ、意見を聞いた（図2）ところ、職員から関係職員出席の対策委員会で検討しようという意見が出た。翌日の午前中から開始。
4月3日	校内対策委員会（午前）	関係職員で1日の学校生活に沿って対応を検討。 養護教諭の役割1（後述）
	養護教諭会（午後）	市内養護教諭会で校内対策委員会を立ち上げたことを報告。各校で対策委員会を立ち上げる必要性を伝える。
4月4日	養護教諭会へ情報発信	管理職の許可を得て本校の対策委員会での内容を市内養護教諭にメールにて送付。養護教諭の役割2（後述）

対応の基本の考え方

清潔区域：現在瑞穂小はコロナウイルスの発生がない……ウイルスに汚染されていない。
そのため下足室にてアルコール消毒を行い、学校に持ち込ませない。
下校時は家庭に持ち込みたくない児童はアルコール消毒をして下校する。
アルコール消毒は手指が濡れていると効果がさがる。濃度が薄くなるため。また追加の消毒液の配布は予定されていないのでむやみにアルコール消毒に頼ることは避けたいと考えてる。

図1

コロナウイルス対応で学校生活の中で 気になること 意見ををお願いします。

- 1 教室の移動方法
- 2 授業：例えば音楽の授業での歌・リコーダー・鍵盤ハーモニカをどうするか
- 3：給食当番や清掃方法 ふれあいタイムの遊び方
- 4：下校後の教室の消毒方法（次亜塩素酸ナトリウムでのふき取りなど）
- 5：各教科で配慮すること

図2

< 休校延長後、保健体育課との感染症対策のやり取りの窓口として >

今年度、養護教諭会の代表として感染症対策の疑問点・不安点を取りまとめ、市教育委員会保健体育課担当指導主事とやり取りを行った。保健体育課からの回答を市内メールで発

信することで各養護教諭が困っていることや疑問点などについての対応策を市内養護教諭で共有することができた。このようなやりとりは1回目を4月休校中に行い、2回目を分散登校開始時に行った。保健体育課との対応に窓口を置いたことは情報の錯綜を防ぎ情報の共有がスムーズに行うことにつながった。

<養護教諭の役割1（校内・対策委員会での役割）>

対策委員会での養護教諭の役割として、感染症に対する不安でどのような対応をとったらよいのかわからない職員に専門的な知識で対応すること。不安によって過度になりがちな感染症対策に理性的に対処すること。文部科学省「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～『学校の新しい生活様式』～」（以下、「学校の新しい生活様式」）をよく読んで学校で実現可能な対策を職員と共に考えること。養護教諭一人で考えた感染症対策では十分でないことを知り、学校生活の事は担任に、教科については専科教員に相談するのがよいということ。文科省や伊丹市の対策マニュアルを読んでも実際の学校生活で次々と出てくる対応の疑問や不安を受け止め取りまとめること。などがあると思う。

<養護教諭の役割2（保健体育課と市内養護教諭の間の取りまとめ）>

コロナ対応の危機管理において窓口として対応したことにより、市内の養護教諭の混乱を軽減できたと思う。校内の職員からの疑問を聞くたびに個々の養護教諭が保健体育課に問い合わせることは業務の多忙化と情報の錯綜をまねく。危機管理における情報の窓口の一本化と情報共有の重要性を実感した。

<振り返って考察、そして今も対応は続く>

感染症の研修会が年度始めの2日目に計画されていたのは偶然だった。しかしその研修会の時に職員全体に疑問を投げかけることができ（図2）、その結果、職員から対策委員会を立ち上げようという意見がでた。それまでも個々に職員から対応に関する様々な意見を受けたり考えを聞かれたりしていたが、個人個人に対応しても感染症対策は改善しない。対策委員会の中で職員の疑問や不安そして意見を出し合い対策を検討することが職員間の合意を得るための必要なやり取りだったと思う。

現在も感染状況の変化に伴い更新される文部科学省「学校の新しい生活様式」と「伊丹市立学校園再開ガイドライン」の内容を照らし合わせ、必要な時に対策委員会が開かれる。感染レベルの変化に合わせて最善の対策を検討委員会で考え職員で実施することが、安心・安全な学校生活を守るために重要と考える。

取組2 - あいうべ体操でインフルエンザをやっつける！学級閉鎖ゼロを目指して -

<きっかけはPTAからの相談から>

2016年の夏休みに保健室へPTA執行部の方が保健室に来室する。前年度にインフルエンザによる学級閉鎖を7クラス実施していた。保護者から「出停期間が長くて学校の勉強の遅れが気になる。仕事を休むのも大変。隣の学校は学級閉鎖が少なかった。先生も勉強の進行がそろわないと困ると思う」などの理由から、あいうべ体操を取り入れてみてはという相談だった。学力向上委員会でも2015年度の欠席の多さが話題に上がったと聞いていた。加えて不登校傾向の児童がインフルエンザ出席停止明けからより一層の登校渋りになり出席明けに続けて休んだこと、今は登校できているが不登校に陥りやすい要素（遅刻が多い、月

に数回休むなど)を持っている児童にとり1週間の停止期間は新たな不登校のきっかけになることが私自身気になっていた。相談の結果、学力向上委員会とコラボレーションし、保健委員会活動であいうべ体操に取り組むことになった。

* あいうべ体操とは口呼吸を鼻呼吸に改善していく簡単な口の体操のこと。あいうべ体操を1日3回、1日計30回を目標に行い、舌や口の筋肉をきたえることで口呼吸の改善を促す。



図3

<保健委員会活動の内容・経過>



図4

1年目(2016年度) : あいうべ体操を教えるに保健委員が各教室に行く。 : 児童集会であいうべ体操を行う。
 : 全校にあいうべキャラクターを募集し大賞を決定する。(図4) : 替え歌を作成し録音し休み時間に流す、と次々活動が広がっていった。
 2年目(2017年度) 1年目の活動に加え、 : スローガンを作成し下足室に書いて張り出す。 : あいうべキャラクターを募集し各クラス優秀作品を保健委員で選び表彰する。
 3年目(2018年度) 1年目の活動に加え、 : 保健委員会でクイズを作成し放送委員会に昼休みに放送してもらいクラス対抗クイズを行う。
 4年目(2019年度) : キャラクター募集は低学年対象とする。 : 高学年には健康川柳を募集。 : 低・高学年の優秀作品を選んで表彰するとともに下足室に張り出す。 : 「インフルエンザの報告の木」を作り、下足室に設置。毎日のインフルエンザの欠席者を知らせる。
 : 保健委員であいうべ体操の保健だよりを作成。各クラスへ配布し啓発する。

<4年間のあいうべ体操の成果・考察>

- ・インフルエンザ罹患率が年々低下し、2019年度に学級閉鎖ゼロを実現した。
- ・毎年インフルエンザの流行時期にあいうべ体操を委員会の活動のメインにすることで、児童の中に定着していった。
- ・替え歌は毎年子どもたちで曲を決め作詞、録音。放送委員会に依頼し休み時間ごとに流した。放送委員会に依頼をする時は委員長が放送委員会に協力要請ができるように配慮した。役割を持ち活躍する場があると子どもたちが大きく成長すると感じる。
- ・替え歌を頻回に聞くことで子どもに意識付けされた。担任からも「歌を聞くことでちゃんとしようとして子どもたちが意識している」などの感想があった。簡単なメロディーにのせてメッセージを送ることで覚えやすく効果があると思う。毎年の恒例になり地域の方からも「子どもらしくていい」と感想をいただいた。
- ・委員会で最初にスローガンを決めることで達成

2018年度後期保健委員会 替え歌

メロディー：喜びの歌

- 1：あいうべ体操 しっかりやれば
インフルエンザ・かぜもなくなるよ
休み時間ごと しっかりやれば
みんな毎日 元気に登校
- 2：インフルエンザを予防するには
マスク・手洗い・うがいをするんだ
1日30回を 目標にして
毎日あいうべ しっかりやろう
- 3：インフルエンザになってしまうと
楽しい行事ができなくなるよ
テストもできずに一人で受ける
だからあいうべをしっかりとやろう
- 4：学級閉鎖をなくすためには
あいうべ体操 毎日やろう
1日30回 朝昼晩に
みんなであいうべ 休みをゼロに

するための活動内容を考える良いきっかけになる。「みんなが元気で学校に来るためにはどんな活動をしたらいいのか」と考え、働きかける。それは全校生の自分たちでやろうという気持ちに大きな影響を与えていると思う。

- ・経年で続けると低学年の時から活動を見ているのでやりたいという意見が出るようになった。あえて「毎年同じことを行うと飽きないかな」と問いかけると委員から新しい活動の意見が出てくるようになった。2019年度の「インフルエンザ報告の木」は話し合いの結果、「休みの人数を毎日お知らせしたらみんな意識する」という意見が出て始まった。これは職員からも休みを減らそうと活動する時に、全校の様子がよくわかってよいと意見ももらった。

<あいうべ体操で本当にインフルエンザにかかりにくくなったのか？>

表 1

	2015			2016(あいうべ1年目)			2017(あいうべ2年目)			2018(あいうべ3年目)			2019(あいうべ4年目)		
	罹患人数	人数	罹患率	罹患人数	人数	罹患率	罹患人数	人数	罹患率	罹患人数	人数	罹患率	罹患人数	人数	罹患率
1年	47	122	38.5%	39	102	38.2%	43	102	42.2%	19	97	19.6%	6	84	7.1%
2年	31	98	31.6%	29	119	24.4%	41	104	39.4%	36	102	35.3%	5	95	5.3%
3年	46	106	43.4%	18	95	18.9%	40	121	33.1%	15	101	14.9%	21	97	21.6%
4年	16	106	15.1%	12	105	11.4%	34	99	34.3%	20	121	16.5%	5	104	4.8%
5年	39	107	36.4%	21	101	20.8%	19	106	17.9%	16	101	15.8%	10	115	8.7%
6年	29	122	23.8%	27	110	24.5%	17	104	16.3%	24	100	24.0%	11	96	11.5%
全校	208	661	31%	152	632	24.1%	194	621	31.2%	130	622	20.9%	58	591	9.8%
学級閉鎖数	7クラス			1クラス(6-1)			1クラス(2-3)			2クラス(2-1・3)			0クラス		

*12月～2月まで集計

2019年度は全国的にもインフルエンザの流行は小さかったが、本校の罹患率(表1)や学級閉鎖がなかったことを考え合わせると、効果があったと考えられる。また経年的にデータを見ると同じ子どもの罹患率が学年が上がるにつれて低くなる傾向がある。これもあいうべ体操を毎年委員会で取り組んだ成果だと考える。

2：課題及び今後の取組の方向

養護教諭は学校危機の様々な場面(ケガ・水泳指導時の事故・アレルギー・感染症・災害時など)で関わりを持つ。危機管理の目的は子どもの安心と命を守ることであると考え、これまで様々な場面を想定し計画・準備・シミュレーション訓練を実施してきた。しかしコロナ対策では想定外の事が多かった。今回のコロナ対応で、校内対策委員会での協議及び感染症対策の策定、市内各養護教諭並びに保健体育課との連携及び情報の共有の重要性を学んだ。今後、専門職としての自分自身の考えを再構築する必要があると考えている。まだまだコロナは続くため気を緩めずに職員と協力して対策を取って行きたいと思う。

あいうべ体操の取組は子どもたちに感染症の予防行動を身につけさせるためどのように働きかけるとよいのか考えるきっかけになった。予防行動を「1層：予防行動が身についている」「2層：1と3の中間」「3層：全く取り組まない」の3層に分けて考える。中間層は言われたら行動するが動機づけも弱く、習慣化されていない。この大多数を占める中間層にあいうべ体操は有効だった。毎日の委員会の活動が予防行動のスイッチに刺激として入り行動化できたと考える。

コロナもインフルエンザも予防が可能な感染症である。予防行動をしっかりと身につけることは自分の命や他人の命を守ることにつながることを忘れずに平常時の学校生活に戻った時、保健委員会の子もたちと活動を続けていきたいと思う。

子どもの主体性に基づいた図書委員会の活動

川西市立清和台小学校

教諭 稲田 拓也

1 取組の内容・方法

川西市立川西北小学校(前任校・平成30年当時)では、高学年の子どもが放送やボランティア、図書等いずれかの委員会に属して児童会活動が行われている。それぞれ年6回の委員会活動(特別活動)での話し合いをもとに学校のための活動を行っている。それまでの図書委員会活動は当番活動が中心で、奉仕的な態度を形成する上で重要な活動ではあるものの、初めから設定された仕事をこなすだけでは、学習指導要領第6章特別活動の第3の1の(2)に謳われた「児童による自主的、実践的な活動」には適わないと考え、図書委員自ら問題を解決したり目標に向けて活動を創り出したりする活動が必要だと考えた。

本稿筆者である私は、図書委員会の担当であり、図書委員担当の教員はほかにも2名おり、協議しながら委員会の運営を進めていった。

本稿では、子どもたちが主体的に計画・実行する活動をプロジェクトと呼び、それらを2つのタイプに分類する。ひとつは問題解決プロジェクト(以下、問題解決P)、もうひとつはオリジナル・プロジェクト(以下、オリジナルP)である。

問題解決Pとは、委員たちが活動をする中で図書室内の問題を発見し、解決に向けた話し合いを行い、実行する活動である。例を挙げると、一部の利用者が図書室内で騒ぐ問題、本が破損する問題、休み時間の開錠が遅れる問題等について話し合われた。

オリジナルPとは、図書室をよりよくするためのプロジェクトチームを結成し、自ら計

画・実行に取り組む活動である。オリジナル図書の制作，ビブリオバトル，本さがし大会，利用者へのしおりプレゼント等が行われた。

プロジェクトの準備段階では，図書室内に画用紙やカラーマーカー等を常備し自由に使える環境整備を行った。プロジェクトを完全に子ども任せにするのではなく，ある程度計画の妥当性や作業プロセスの進捗等について教員が助言を加えながら支援を行った。

問題解決P例 ポスターでの呼びかけ

図書室日誌の「気づいたこと」の欄には，子どもたちが日々の活動で感じたさまざまな問題が記述された。委員会の時間には，それらの解決にむけた話し合いを行った。

一例を挙げると，以前から図書室に常備してあった将棋をさしにきた利用者が勝負に盛り上がるあまり大声を出してしまい，読書の妨げになっているという問題があった。

委員会全員による話し合いでは，「図書室での将棋を禁止しよう」という強硬な意見も出たが，「読書スペースとは別に将棋のスペースを設けてはどうか」という双方の要望を認めた意見も出された。図書室内の空間的な都合もあり，将棋スペースを別に設けることはできなかったが，誰もが納得いく結論を導き出すための話し合いがなされたことは素晴らしいと思う。結論としては，「静かにすごそう」という呼びかけのポスターやカードを作成し，図書室内の壁や将棋の箱に貼ること，また，図書委員もできるだけ注意していくことという結論に至った。

オリジナルP例 オリジナル図書

あるグループは、オリジナルPとしてオリジナル図書（小説や漫画等）を次々執筆・発行していった。貸し出しはできないものの図書室の正式な図書として「館内」のシールを貼って本棚にならべ来室者が読めるようにした。多くの利用者が手に取り人気の図書となった。



オリジナル図書

オリジナルP例 ビブリオバトル

あるグループは、ビブリオバトルを企画した。ここでのビブリオバトルとは、複数の発表者が自分の推薦する本を紹介し、観客の「読んでみたい」という基準で挙手しその数を競うものだ。グループ内の2名が発表者となり休み時間に自分の推薦す



ビブリオバトル

る本を図書室で発表し、来室した利用者が観客となってジャッジするという形式をとった。委員たちは、観客が何人来るかも分からない中、多くの人に参加してもらえるようポスターや放送で宣伝を行った。

当日は、数十名の参加者が来室し、楽しい雰囲気の中で開催することができた。発表者以外の委員は、司会やスタッフ等を務め、円滑な運営をサポートした。

2 取組の成果

図書委員の多くは、どの活動にも積極的に取り組んでいた。問題解決Pでは、図書室内での問題を発見し、その解決に向かって話し合い、導き出したアクションを実行に移す

という取り組みができた。オリジナルPでは委員たちが「もっと休み時間に図書室に来てもらおう」という目標から具体的な活動内容を自身でデザインし、計画・実行にむけて取り組めた。これらの取り組みは、学習指導要領第1章総則第2の2の(1)に謳われる「言語能力・情報活用能力・問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力」の育成に寄与した学習だといえる。

数字に表れた成果として、図書室の年間貸し出し冊数の総合計(1年～6年生の貸し出し冊数)が、前年度(平成29年度)と比較すると、8,683冊から9,378冊に約700冊近い増加がみられた。この数値には授業内での図書の貸し出しも含まれているので、一概に本プロジェクトによる影響がすべてであるとはいえないが、一成果として特筆に値する。

3 課題及び今後の取組の方向

今後の課題としては、子どもたちがより主体的に動けるようにするために教員が「どのような場面で、どのような働きかけ(助言、支援、環境整備等)を行うか」ということだ。とりわけオリジナルPにおいては、ある程度の自由を保障しているものの、その反面、自分たちで、何をどのように作っていくかをゼロから考えるという創造性を要した。また、可能性と制約を調整しながら段取りをしていかななくてはならず、コミュニケーション能力も必要となった。活動の計画・運営を生き生きと楽しむグループもあった一方で、話し合いを重ねても、なかなか実行に踏み出せないグループもあった。「どのような場面でどのような働きかけを行うか」という課題について、子どもや教員の持ち味、相互の関係性等個別の状況をふまえた上で一般化していくパラダイムを探っていきたい。

達成感や自己有用感を高める体験活動の工夫
～川西市の里山体験事業～

川西市立東谷小学校
教諭 野間 俊介

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

本校は川西市の北部に位置し、開校は明治6年と、川西市内でも最も歴史のある学校である。それゆえ地域と密接に連携し、地域に支えられ発展してきた。校区のおよそ5分の4がベッドタウンであるが、ところどころに農村風景がみられる。新名神高速道路・川西インターチェンジの開通や川西市中央部の再開発などにもない、校区の環境の変化が見られる。しかしながら、地域の伝統的な文化が色濃く残っている校区でもある。このような本校の校区に「日本一の里山」と呼ばれる黒川地区がある。

黒川地区は、川西市の最北部に位置し、深い歴史がある。その黒川地区が「日本一の里山」と呼ばれるには、いくつかの理由がある。古くはこの周辺の一庫・国崎等の北摂地区全体で炭焼きが行われていた。その歴史が黒川地区でも現在でも続き、茶道で使用される道具炭として最高級品である池田炭（一庫炭）が生産されている。この池田炭は、かつて豊臣秀吉や千利休も愛用したと言われている。

このような歴史的・文化的な特徴をもつ黒川地区だが、その池田炭（一庫炭）の生産のためには、材料としてクヌギが必要である。そこで黒川ではクヌギの枝を得るために、クヌギの幹を1～2メートルのところで伐採し続けてきた。結果、幹が太くなり、新たな枝が形成され、台場と呼ばれる形状となった（台場クヌギ）。



台場クヌギを観察する児童たち

このことで効率よくクヌギの枝を得るとともに、シカによる新芽の食害を防ぐことができる。また、台から出た芽は生育が早く、台の高さの分、他の草木に比べ日照を得やすく生育しやすい。このような昔からの知恵が、今もなお引き継がれており、台場クヌギを中心とした、黒川ならではの景観が形作られている。この景観という面においても、黒川地区では、年をずらしながら、約8年周期で台場クヌギの枝を伐採（輪伐）していることから、伐採年度の異なる樹林がパッチワーク状になっている。このよ

うな黒川ならではのパッチワーク状景観に加え、春にはエドヒガン（桜の一種）が開花することで四季折々の美しさを感じることができる。この黒川の台場クヌギの群落は川西市教育委員会より、市指定文化財（天然記念物）に指定されている。また、台場クヌギには、オオクワガタやカブトムシ、オオムラサキなど様々な昆虫類が集まり、周辺の小川には多くの水生生物が生息し、周辺の池にも多くの種類のトンボが集まることから、多様な生物を観察することができる。

これらのことから、黒川地区が「日本一の里山」と言われている。川西市ではこのよう

な黒川地区の素晴らしさを活かし、黒川地区をフィールドに体験学習活動が行われている。

(2) 川西市における里山体験学習事業について

兵庫県下全小学校において、小学校3年生では環境体験学習、5年生では自然学校と兵庫型体験教育が推進されている。川西市ではこれらに加えて市内全小学校4年生において、「里山体験学習事業」が独自に行われている。ここに1・2年生での生活科における栽培体験やプール等での水生生物観察、6年生での総合的な学習の時間や社会科・理科での学習などを加えることで、小学校6年間の「人・くらし・自然とのふれあいを通した連続的な体験学習」の取り組みとなっている。

里山体験学習事業は、先に述べた「日本一の里山」といわれる川西市北部の黒川地区を舞台に行われる体験学習である。黒川地区での体験活動や地域住民との交流を通して、自然に対する敬意の念や生命のつながり、環境保護の大切さ等を実感するとともに川西の持つ豊かさ(ひと・くらし・歴史・自然等)にふれあうことを目的としている。黒川地区での体験活動の例として、里山でのフィールドワークや植物・水生生物の観察、下草刈り等が挙げられる。また、地域住民とのふれあいとして、里山のくらしに関する講話や炭焼き窯の見学、しめ縄づくりの見学などが挙げられ、これらを組み合わせて、市内各校においてそれぞれ工夫した取り組みが行われている。

(3) 本校の取り組みについて

事前学習

黒川地区の散策にあたって、事前学習として、里山とは何かについて学習した。里山とは人里近くにある生活と密接した空間である。つまり人間が自然と共生しながら活用している森林のことである。たとえばクヌギやアカマツ、カシ、コナラ等の木で薪や炭が作られ、堆肥や草木灰を作るために落ち葉も集められた。ほかにも建材や食料を手に入れてきた。このように、里山は人家のまわりであって、生活になくってはならないものであった。このような里山が今もなお黒川地区で引き継がれているという歴史性・炭焼きを通して見える文化性などを、子どもたちは知った。このような素晴らしい環境が自分たちの校区に身近に存在していることに驚いていた。

また、フィールドワークの際に、より自然に注目しながら興味をもって活動することをねらいに、「自分たちが見つけてみたい動植物」を決めることにした。そのために、『かわにし 里山の自然と生きもの』(川西市教育委員会編)を活用した。この冊子では、黒川の様子や、そこに生息する多様な動植物、さらに地質などが写真付きで詳しく紹介されている。実際に黒川地区で見られるものの中から、自分が見つけたいものを考えるため、インターネットや図鑑から考えるより具体的になり、見つけられる可能性が高まった。また、調べやすいため、学校に戻ってきた子どもたちは「あのトンボの名前は？」と自分たちで調べていた。



フィールドワークの様子

6月の様子

黒川地区へは6月と11月、2回訪れた。6月は里山を感じることに、自分たちの校区を知ることめあてに、能勢電鉄妙見口駅から黒川公民館までの約3キロメートルの道のりを徒歩で移動した。時間がかかるものの、黒川地区の様子を肌で感じることは大きい。移動の際、事前学習で知ったパッチワーク状景観を確かめたり、野草の名前を確認したりしながら、里山のくらしや自然にふれることができた。

現地に着くと、黒川地区の地域ボランティアである、里山体験学習サポーターの方々より黒川の自然と人々との共生の歴史や自然、特色、くらしに関する話を伺った。黒川における四季の変化や、棚田における稲作、小学校時代のお話など、子どもたちは興味深く聞いていた。その後、クラスごとに里山体験学習サポーターの方と一緒に里山散策を行った。散策を通して、棚田や里山に豊富にある森林資源を活用した菊炭づくりやシイタケの栽培、その結果台状に生長した台場クヌギ、活動を通して見つけた野生生物や里山の植物などについて話をしていただいた。話をしていただくことで、子どもたちは自然の豊かさや里山のくらしを知ることができた。

また、「みんなに紹介したいものを撮影しよう」として、班に1台のデジタルカメラを用意し、事後のまとめ学習の資料を撮影した。撮影することで、自然物を持って帰ることがなく、すすんで自分たちで取り組み、また容易に活動を振り返ることが期待できる。

特に子どもたちは台場クヌギや落ちていたトビの羽、ササユリ、サワガニ等に興味をもって観察したり、撮影したりしていた。

午後からは炭焼き窯見学をした。菊炭の作り方や、作り方の工夫、窯の構造などについて詳しく教えていただいた。このような窯が校区にあること、炭作りの工夫などを知り、子どもたちは「今度、家族で来て、菊炭を分けてもらいたい」「東谷に、こんな歴史があったとは知らなかった」と喜んでいった。

フィールドワーク後は、取材してきた内容をもとに、伝えたい内容に合致する写真を選び、レイアウトを工夫しながら壁新聞を作成した。



紹介したいものを撮影する様子

11月の様子

11月の活動は、社会科「ごみのゆくえ」とも関連して取り組んだ。自然環境の大切さを6月に感じ取っていた子どもたちは、ごみの処理や環境への影響などの学習に対して、真剣になって取り組んでいた。そこで、クリーンセンターの見学を行うことで、北摂のごみの処理や、環境負荷に対する取り組みについて実地に学んだ後、あらためて黒川の里山に触れることにした。クリーンセンターでの子どもたちは、係員の説明を一生懸命に聞き取り、メモする姿が見られた。

黒川地区では、初夏の里山の様子と、秋の里山の様子を比較することを目的に、場所を変えずにフィールドワークを行った。子どもたちは「なつかしいな」「ここがお気に入りの場所やねん」「前はここにカエルがいたね」「あ、ここにキノコが生えてる！」と言いつつ

ら、愛着を持って散策していた。また里山体験学習サポーターの方々より、黒川での米の栽培や原木シイタケの栽培、実りの秋を迎えて里にまで下りてくる野生動物の動きなど、秋の様子について具体的な話を伺うことができた。

このフィールドワークを通して、子どもたちは初夏のころ、青々としていた山々が色づいてきたこと、見られる動植物が変わっていること等をとらえることができた。また、このような素晴らしい自然環境を保全していくためにごみの処理について深く考えていく必要があることを感じ取ることができた。

また、そのあと行われた作品展にも里山での学びを関連させることにした。それがダリアの花である。川西市は、山形県川西町とのダリアを通じた交流が行われていることから、黒川地区で「黒川ダリヤ園」を中心にダリアが栽培されている。このことから、「黒川地区の花」ともいえるダリアを作品展で再現することにした。子どもたちも、「黒川の花や！」と言いながら作っていた。



スイレン咲のダリアの作品

2. 取組の成果

- (1) 春と秋の里山を比較しながら散策することで、季節による自然の変化を感じ取ることができた。同じ場所を訪れることで、季節による里山の変化をより一層とらえることができた。「春にはサワガニがたくさんいた」「秋にはトンボが多くいた」「紅葉が始まってきてきれいだったので、秋の里山が好き」「どんぐりをたくさん拾えたのがうれしかった」等の感想が見られた。
- (2) 里山の歴史や暮らし、炭焼きの話を学んだことを通して、自分たちの校区には素晴らしい自然環境や深い歴史があることを知ることができたことは有意義であった。自分たちのふるさとである北摂東谷に愛着を持ち、川西市に対して興味を深めたように感じられる。
- (3) 黒川地区の豊かな自然環境を体験したことで、子どもたちの環境保全に対する意識が高まった。北摂地域におけるごみの処理、環境保全や資源（再利用等）の環境負荷を考えた取り組みに対する学習では意欲をもって取り組んでいた。

3. 課題及び今後の取組の方向

今後は子どもたちが今ある豊かな自然環境を、10年後20年後も守り、この地域を誇りに思えるよう指導していきたい。そのためには、家庭や地域との連携が不可欠である。本校の家庭や地域は学校にたいへん協力的で、本取組では地域ボランティアの協力を得ることができ、子どもたちは地域に愛着を持ちながら主体的に学びに向かっていった。このような「地域に学ぶ」「地域で学ぶ」という姿勢を大切にしていきたい。

また環境体験事業や自然学校推進事業等のつながりを意識した、キャリア教育の視点からの里山体験活動の推進が必須である。このような学年をこえた縦につながった学びのほか、各教科での横断的につながった学びを意識した取組を推進していく必要があるだろう。

「通常の学級で生かされる力を育てる通級指導を目指して」

三田市立けやき台小学校
教諭 佐野 敬一

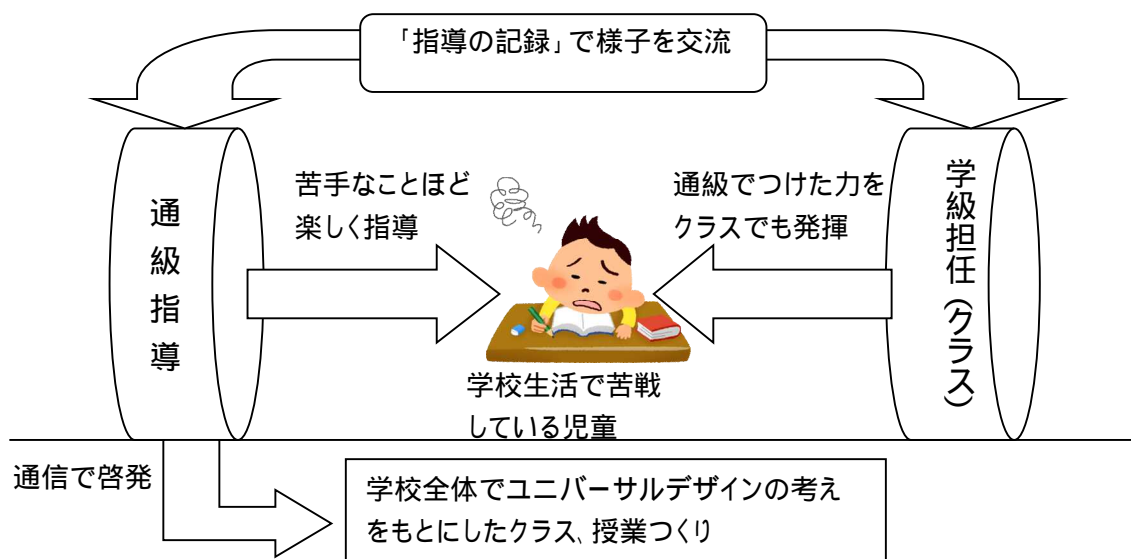
1 取組内容・方法

(1) はじめに

学校生活支援教員として通級指導にあたるようになり 7 年が過ぎた。三田市では現在小学校 5 校、中学校 2 校が通級指導の拠点校となり、7 名の学校生活支援教員が学校生活で苦戦をしている児童・生徒の個別指導にあっている。それでもなお各学校には通級指導を受けることが望ましいと考えられながらも指導を受けることができない児童・生徒が多く存在する。それだけ通常の学級の中で学習や生活で困り感が強く、苦戦をしている児童が多いということが言える。学習でのつまずきから自己肯定感が下がり、生活全般への意欲をなくしていったり、友だちとのトラブルから自分の居場所がみつけれなくなり、自尊感情が下がってしまっている児童・生徒が多い。そういう児童・生徒にとって、困り感の背景にあるものをアセスメントからさぐり、困難さの軽減、克服を目指して自立活動を中心に指導をしている通級指導は大変有効である。教職員の間にも通級指導の有効性が認知され、通級指導へのニーズが高まっていることが感じられる。また保護者から通級指導を受けたいという申し出があるケースも増えてきている。

しかし通級指導だけで学びが完結するのではない。通級指導で付けた力や気づきをクラスで生かせないと意味がない。そのために通級指導がクラスに返るときの「カタパルト」の役目を果たせるよう、担任と連携を取りながら日々の指導にあっている。

また、通級指導での学びがクラスでも生かされるように、通常の学級でのユニバーサルデザインの考えを取り入れたクラス、授業作りも大切である。通級指導とクラスでの取り組み。この両輪があってこそ通級での指導が生きてくるものと考える。



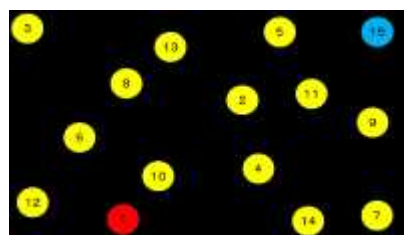
(図1 通級指導と学級担任、対象児童の関わり)

(2) 通級では苦手なことほど楽しく学ぶ

通級指導の中では自立活動を中心にして、子どもの特性からくる困難さを軽減、克服することをねらいとして指導をしている。個別指導の良さを生かした有効な指導ではあるが、子どもにとって一番苦手な、嫌なところに焦点を当てて学習していくことになり、拒否感が出たり、集中が続かなかったりすることもある。そのため、苦手なことほど楽しく学べるように工夫をしている。以下に具体的な事例をあげる。

ナンバータッチで自分自身への挑戦!

眼球運動に弱さのある児童や集中が維持できにくく児童に、パソコンで作成したナンバータッチを実施している。1～5、1～10、1～15、1～20の画面を次々にタッチをしていく課題である。毎回タイムを計測し、エクセルでグラフ化することで振り返りができ、「もっと速くなりたい」という向上心につなげようとしている。他人との比較ではなく、自分との比較であるので、勝ち負けにこだわりのある児童にも抵抗なく取り組める。またグラフ化することで自分の成長を可視化することができ、「4月より、こんなに速くなったよね」と具体的に褒めることもしやすい。



(写真1 ナンバータッチの画面)

カードゲームを使って、語彙を増やす!

自分の言いたいことをうまく言葉に乗せて表現できない、当然知っているであろうと思われる言葉を知らないなど、通級指導を受ける児童には、語彙力に問題がある場合が多い。教科書を使って意味調べをしたり、プリントで学習をしてもなかなか積みあがらないので余計に言葉の勉強が楽しくなくなってくる。そこで、プリントなどを使っての学習もしながら、楽しく言葉の学習ができないかと考え、知育玩具等を探していると、いろいろなゲームが売られていることがわかった。

(写真2 「もじぴったん」)

「もじぴったん」(メガハウス)は、カードを使って2文字以上の言葉を作っていくゲームである。5枚ずつのカードを順に出して言葉を作り、早くカードがなくなった方が勝ちである。5分くらいの短い時間で実施でき、楽しみながら取り組むことができる。



(写真3 「語彙力アップ!ひらがなりバーシ」)



「語彙力アップ!ひらがなりバーシ」(ハナヤマ)は、文字を使ったリバーシである。2文字の言葉を作って、間にはさんだ相手の駒を裏返して自分のものにできる。リバーシで遊ぶ感覚で言葉作りの学習をすることができる。

他者理解が難しい児童にブロックを使って伝えるゲーム

友だちの気持ちや場の状況が理解できずに、友だちとうまくコミュニケーションをとることに苦戦している児童がいる。SSTカードを使って場の状況を学んだり、トラブルが起こった時に、視覚的に

関係を示して相手の本当の意図を伝え、どうすればよかったかを考えさせたりしている。それと並行して、言葉で自分の意図を相手にうまく伝えるためにはどうすればいいかを、レゴブロックを使ってゲーム感覚で学習している。

ブロックを好きなように組み立て、それを衝立の向こうにいる教師に言葉だけで伝えるというものである。ブロックの大きさ、色、場所(左右の違い)など、どうすれば相手がわかるかを相手の立場に立って考えさせることができる。うまく伝わったときには「今の言い方よくわかったよ」など、プラスの評価をするようにしている。

(写真 4 ブロックを使った伝えるゲーム)



(3) 通級指導がクラスへの「カタパルト」になるために

通級指導教室がクラスへの「カタパルト」の役割を果たすためには、個別指導と同じくらいに、担任との連携と、通常の学級のユニバーサルデザインを取り入れたクラス、授業作りが大切である。以下に、通級に通う児童の担任との連携、学校全体への啓発について述べることにする。

「通級指導の記録」を連携のツールとして活用する。

毎回の授業の後には、「通級指導の記録」を作成し、担任と情報共有をしている。ゆっくり担任と話す時間が取りにくいことが多いため、指導記録の中にできるだけ詳しく指導内容とその時の様子、「こんな話をしました」ということを書くようにしている。最後には感想を交えた意見を書くようにし、それに対して担任から返事を書いてもらっている。担任からは記録を読んだ感想だけでなく、学級で変化が見られたことや、今困っていること、トラブルなど様々な情報が寄せられる。それをもとにして次の授業の内容を考えることもよくある。特に時間が取りにくい巡回校では有効な連絡ツールであると考える。

学校全体への啓発ために「コーディネーター通信」の発行

勤務校の職員向けに、月に 2 号程度不定期に「コーディネーター通信」を発行している。A4 裏表に、ユニバーサルデザインについての話だけでなく、特別支援教育に関する様々な話題を いろいろな角度から取り上げ、発信していくようにしている。今年で 3 年目の実践であるが、今年度は勤務校だけでなく、巡回校でも必要と思われる内容の号をコーディネーターに渡し、職員に配布していただくようにしている。以下は今年度取り上げた内容の一部である。

- ・「通級指導って何?」
- ・「継次処理と同時処理」
- ・「自尊感情について」
- ・「放課後デイサービス等について」
- ・「となりのトトロを深読みする!」
- ・「トムとジェリーはなぜ面白い?」
- ・「愛着障害って?」
- ・「匠の技を紹介!」

(図 2 今年度の通信の内容例)

担任の先生方の日頃の実践を「匠の技」として紹介し、特別支援教育の視点で意味付けを行ったり、市の巡回相談で受けた助言のうち、全体に広めたいことを紹介したりもしている。

またなかなか接点を持つことがない SSW の先生にインタビューをし、職員への啓発を図ることも行った。

真面目な内容から、時にはおふざけも交えて、楽しみながら特別支援教育について考えてもらう機会になればと思い発行を続けている。

2.取組の成果

(1) ゲーム感覚で取り組める課題を取り入れたことで、「勉強している」「やらされている」というのではなく、苦手なことでも楽しんで取り組めるようになった。また、ゲームをしながら「よく言葉知ってるねえ」「こんな言葉思いついたんや!」など、プラスの評価を即時に返すことができ、児童の自己肯定感の向上にもつながっていると考える。また、ゲームとして取り組むことで「勝ちたい」「うまくやりたい」「伝えたい」と、取り組んでいることに必要性が生まれ、うまくできたときの達成感も味わうことができる。

授業の最後に「お楽しみタイム」として取り組むこともあり、そういう時は、児童が勝てるように教師が忖度をし、気持よく教室に戻っていけるような工夫も行っている。

(2) 「通級指導の記録」を連携のツールとすることで、時間を取りにくい場合でも児童の様子やその日の成果、頑張りを担任と共有するようになっている。頑張ったことについては「今日は～頑張ったんやね」とクラスで担任からも声かけをしてもらっている。通級での指導内容をクラスでも継続してもらうこともある。

児童によっては、通級指導とクラスで、それぞれ違った姿を見せることがあり、それを担任と交流できることで、多面的に子供の姿をとらえることにも役立っている。

(3) 「コーディネーター通信」の中でユニバーサルデザインに関する内容を発信してきたことで、教室環境、情報の伝達の仕方、教材などに先生方の工夫がみられるようになった。また、特別支援を意識せずに行っている工夫を「匠の技」として紹介することで、「これもユニバーサルデザインの工夫になるのか」と思ってもらえ、自分の実践を特別支援教育の視点で振り返ってもらう機会にもなっていると考える。

先生方から「気になる子どもがいるので見てほしい」という相談のほか、「通信の内容についてももう少し詳しく教えて欲しい」「これに書かれていることは～さんのことかもしれない」など、通信によって気づきが促され、児童についていろいろな先生と話をする機会が増えてきている。

3.課題及び今後の取り組みの方向性

児童の特性に応じた個別指導ができることが通級指導の大きな利点であり、強味である。その中で個別指導だからこそできる指導内容としてゲームを取り入れた課題作りを行ってきた。興味を持って、意欲的に取り組み、達成感を持たせることができる反面、遊びの要素に流されてしまい、学習としての積み上げが見えにくという面もある。プリントなどを使った学習とゲームを使った学習をうまく配分しながら、苦手なことへも意欲的に取り組み、自分で伸びを実感できるような方法を模索しているところである。

担任との連携、学校全体への啓発にはコーディネーターの働きも大切になってくる。担任に直接伝えられなかったことをコーディネーターを介して伝えたり、学校全体への啓発方法をコーディネーターと相談しながら進めたりしているところである。

今後も児童にとっても、教師にとっても有意義な通級指導になるように研究に励んでいきたいと考える。

(参考図書:「実践ソーシャルスキルマニュアル」上野一彦 岡田智 編著 明治図書)

自他を大切にできる子どもの育成 命の学習の取組

加古川市立鳩里小学校
主幹教諭 塩濱千晴

はじめに

本校では、子どもたちの発達段階に応じたプログラムのもと、家庭と連携した学習や体験活動を通して命の学習に取り組んでいる。

命の学習を通して一人一人が命の大切さを実感し、自分だけでなく、まわりの友だちの命も同じように大切であることを学んでいる。「あなたのことが大切だよ。」というメッセージを伝えることによって、自己肯定感を高め、一人の人間として自分らしく成長してほしいと願っている。

1 取組の内容・方法

(1) 1年生の取組

男女の性器に違いがあることを知らせ、命の誕生と深い関りがあることに気づかせるとともに、体を大切にできる態度を身につけさせる。また、服の色の違いで男女の違いが分かるわけではないことに気づかせる。

ウイルスやばい菌から身を守るためには、手を洗ったりお風呂に入ったりして、体を清潔にすることが大切であることを学ばせる。

プライベートゾーンについて知らせ、危険から身を守ることを学ばせる。

(2) 2年生の取組

赤ちゃんは、お母さんの子宮の中での育ち、生まれてほしいという赤ちゃんの強い気持ちとお母さんの産む力と周りの人の協力によって生まれてくることを学ばせる。

DVD「生まれるよ」をみて誕生の喜びを感じさせ、命を大切にできる気持ちを持たせる。

(3) 3年生の取組

男の人がもつ命のもと(精子)と女の人がもつ命のもと(卵子)がくっついて命が作られることを学ばせる。

卵子と精子がどうやって結びついたのかを知らせ、自分の命は、3億の精子のうちたまたま1個が卵子に入ったからできたものであり、偶然による奇跡的なことを知らせる。

絵本「さっちゃんのまほうのて」を使って、障がいをもっていても生まれてほしいという強い気持ちで生まれてきたことを知らせ、生まれてきたすべての命が大切であることを実感させる。

助産師さん、妊婦さんを招いて、命について考えさせる。

○妊婦さんの話を聞く

事前に子どもたちに妊婦さんに聞いてみたいことをアンケート調査しておき、それをもとに養護教諭が妊婦さんに「赤ちゃんができたとわかった時、どんな気持ちでしたか?」「食べ物で気を付けていることはありますか?」などと質問する。

妊婦さんが「赤ちゃんができたとわかった時は、涙が出るほど嬉しかった。」「苦手だった魚も赤ちゃんに栄養を送るために食べている。」などと話し、おなかの中の赤ちゃんを大切に育て、赤ちゃんが生まれるのをとても楽しみにしていることを子どもたちに知らせる。

○胎児の心音を聞く

助産師さんが実物大の赤ちゃん人形を使っておなかの中の赤ちゃんの位置を示し、ドップラーを使って妊婦さんのおなかの中の赤ちゃんの心臓の音を聞かせ、子どもたちに、赤ちゃんが活着ていることを感じさせる。1分間の赤ちゃんの心音の回数と、代表児童の心音の回数を数えさせ、赤ちゃんの心音のほうが早いことに気づかせる。

○妊婦さんのおなかを触る

助産師さんからおなかの触り方について説明を聞いた後、一人ずつ子どもたち全員が妊婦さんのおなかを触らせてもらうことで、命の重さを感じさせる。令和2年度はコロナ感染予防のため、妊婦さんのおなかを触る児童は各クラス1名にした。



○助産師さんの話を聞く

助産師さんに、赤ちゃん人形を使って、おなかの中の赤ちゃんが育っていく様子やお母さんの体の変化の話をしてもらう。出産の様子についても模型を使って話をしてもらう。スライドでおなかの中の赤ちゃんの成長の姿を確認し、最後は、周りの人たちが見守る中、生まれてくる赤ちゃんと妊婦さんが力を合わせて、出産する様子を見せる。

「赤ちゃん先生プロジェクト加古川」の赤ちゃんと母親を招き、実際に赤ちゃんに触れ合い、赤ちゃんが生まれた時の話などを聞くことによって、親の思いや自分や友達の命の大切さに気づかせる。

○1回目「自分はどれだけ大きくなったかな」

- ・赤ちゃんと自分の手足の大きさを比べさせる。
- ・お母さんから赤ちゃんとの生活の様子について聞くことによって、自分も今まで大切に育てられてここまで大きくなったことを知らせ、自分が生まれてきたことの喜びの気持ちを持たせる。

○2回目「命の奇跡」

- ・両親や、家族、お世話になった人がいるからこそ自分ではあるが、自分自身が生まれたいという強い力がなかったらこの世にはいないことを知らせ、生まれたかったのに生まれてこられなかった命もあることを知らせる。
- ・赤ちゃんのお母さんから、妊娠時期、出産の時の話を聞き、赤ちゃんのお母さんから妊娠中のエコー写真や、新生児の時のグッズを見せてもらう。

○3回目「言葉の力」

- ・ふわふわ言葉、ちくちく言葉について知らせ、言葉には力があり、相手に発す

る言葉の力は自分の力になることを知らせる。

- ・言葉を話せない赤ちゃんが何を求めているのかを考えさせ、赤ちゃんにはどんな言葉をかけたらよいのか考えさせる。

○4回目「みんなちがってみんないい」

- ・今の自分でよいということに気づかせ、個性があつていいことを理解させる。
- ・お母さんから赤ちゃんの成長についての悩みをきいて、どうしたらよいかグループで話し合わせる。

○5回目「みんなの未来」

- ・今までの学習を振り返り、一人一人に大切な命があることを感じさせる。
- ・赤ちゃん先生の未来、自分の未来を考えて、赤ちゃん先生へ書いた手紙を読んで渡し、「おそすぎないうちに」を歌わせる。

< 3年生 児童の感想より >

- ・ぼくが今ここにいるのは、お父さんの精子とお母さんの卵子がくっついて、りゅうごんをせず生まれてくることができたからだとわかりました。ぼくは今、すごくうれしいです。
- ・これから、つらいことや悲しいことがあるかもしれないけど、楽しいことやうれしいこともあるから、命をむだにしないように生きていきたいと思います。

< 3年生 保護者の感想より >

- ・「生まれてくるってことは奇跡に近いんだね。」と娘が言いました。今回の学習をよく理解できたと思います。自分の命、他人の命も大切に、また生まれてくる命に対しても考えて行動できる人になってほしいと思いました。
- ・命の学習で今まで知らなかったことをたくさん知ることができたようです。特に自分がおなかの中にいた時のことや生まれてくるまでのことなどを家で話してくれました。久しぶりに母子手帳を見ながらおなかの中にいた時のことや生まれた時のことを思い出しました。そしてこんなに大きく成長したことをあらためて嬉しく思いました。

(4) 4年生の取組

思春期の体の変化や月経、射精の仕組みについて知らせ、健康に成長していることを意識させる。

「NPOエフフィールド」の講師を招いて、DVD「10歳のきみへ」を使って日野原重明先生からのメッセージを伝え、聴診器で自分の心臓の音を聞かせることによって、命の重みを感じさせる。

(5) 5年生の取組

命の誕生の仕組みについて理解し、生命を尊重する気持ちを持たせる。

ダウン症候群の子どものお母さんを招いて、障がいのある子も生まれてほしいという強い気



平成31年度



令和2年度はリモートで実施

持ちで生まれてきたことを知らせ、障がいのある人に無関心でなく、共に生きていくことを考えさせる。

(6) 6年生の取組

兵庫県臓器移植コーディネーターを招いて、臓器移植でしか助からない命があることを知らせ、命について考えさせる。

多様な性について理解させ、男だから女だからではなく、個性を尊重する態度を身につけさせる。

6年間の命の学習を振り返り、思春期の子どもたちがこれから自分らしく生きていくための大切なメッセージをおくる。

< 6年生 児童の感想 >

- ・ぼくは、当たり前のように生きているけど、生きたくても生きられない人もいるので、生きていることに感謝してこのひとつの大切な命を大事にしたいです。
- ・私は、楽になりたい、死にたいと思ったことがあるけど、生きたいと思っているのに死んでしまうことはとても悲しいことなので、毎日一生けん命生きたいと思いました。
- ・私は、自分が男の子になりたいと思ったことがあってそれは気持ちが悪いかなと思っていただけ、自分だけではないことを聞いてほっとしました。
- ・今日の学習をして、私は私でいいんだと思えて泣きそうになるほどうれしくなりました。

3 取組の成果

各学年の担任と命の学習の前に研修を行い、養護教諭が核となって担任と共に命の学習を進めたことで、養護教諭の専門性を生かすことができた。命の大切さは実感しにくいものであるが、3年生では、胎児の心臓の音をきいたり妊婦さんのおなかに触れたりすることによって、子どもたちはそこに命があることを体感することができた。さらに妊婦さんの気持ちや助産師さんの話を聞いたり、赤ちゃんに触れ合ったりすることによって自分の時はどうだったか考え、自分の命と向き合って自己肯定感を高めることができた。

また、各学年の保護者に、授業の前と授業の後に保健だよりを配布することで、保護者の命の学習に対する理解を得ることができた。

4 課題及び今後の取組の方向

近年の社会情勢の変化と共に、子どもたちを取り巻く家庭のあり方も多様化している。6年生でセクシャルマイノリティーについて取り上げ、自分とは違う人という認識ではなく、自分たちも多様な性の一部であるという認識を持つように指導したが、教師がまず、正しい知識を持つことが必要である。そして家庭と連携して共に子どもたちが自己肯定感をもって生きていくことができるように支援をしていきたい。

子どもたちが、自分は価値のある人間であると思い、自分のことを好きになって生きていくことができるように願って、今後も命の学習の実践を続けていきたい。

子どもが願いをもつ算数の授業

加西市立北条東小学校
主幹教諭 國野大樹

1. はじめに・・・子どもが願いをもつ算数の授業

「願い」と言えば、七夕や初詣が思い浮かぶだろう。しかし、私は日々の算数の授業で「願い」を大事にし授業を組み立てる。ある子は「ぼくは算数の授業で、思いやりのある自分になりたい。」と願いをもち、別の子は「私は勇気のある自分になりたい。」と願いをもち、算数の授業で思いやりや勇気とはどういうことか、不思議に思われるかもしれない。しかし子どもが授業に生き生きと向かい授業を楽しむ姿を期待する時、是非とも子どもの「願い」に着目したいと考える。

これまで多くの子どもが願いをもち、願いに向かって授業の中で新たな自分を試し変わってきた。以下、子どもが願いをもつ算数の授業の実際を見ていきたい。

2. 取組の内容・方法

学期初めに、子どもの願いを把握する時間をもった。「あなたはどんな自分になりたいですか。」この問いにすぐに答える子どもはいない。今まで考えたことのない問いに子どもは戸惑う。学期初めの2週間、私は時間をかけて子どもと個別に面談を繰り返し、願いをもつことの素晴らしさや大切さを伝えた。これまで担任をした子どもが願いをもってどんなふうに変ったのかを話し、家庭訪問の機会を捉えて子どもの家庭での様子や保護者の願いを聞き取り、子どもの願いを一緒に決めた。こうした取組を経て、下記の【子どもの願い一覧表】が完成した。

【子どもの願い一覧表】

1	立ち向かう強い心(学習面) 正直な心('分らない'といえる 嘘をつかない)
2	人間不信の払拭 楽しい学校生活(お土産を1つ)
3	野球大好き 強いこだわり とりあえず本人にさせる、失敗、軌道修正へ(軌道修正しようとしている姿をほめる)
4	母親とのトラブル除去 「今、ココ、ぼく×すぐに動く」がテーマ 小さな変化に気づきほめる
5	サッカー大好き 勉強大嫌い(宿題面倒くさい) サッカーと学習を結び付ける
6	事務的 勉強大嫌い(時間がかかることが嫌) 将棋大好き 算数が一番嫌、国語が一番好き 国語係(一人で)
7	人間関係能力・コミュニケーション力 自己表現(全体の場で)友達との関わり方 お米・野菜づくり(父・祖父)・動物物が大好き
8	算数の宿題をスムーズに 学校でのとりこぼし無し+算数の宿題ヒント お母さんを喜ばせよう
9	母親の不安除去 安心感 存在感をUP 挑戦する心(名前のごとく)
10	感情・自己表現 存在感UP・バトミントン
11	字をきれいに書く(連絡帳) お母さんを喜ばせる
12	勉強と遊びのバランス
13	家での変化を(手洗い、うがい、はし、水筒) 生きる意味・自暴自棄 存在不安からの解放 ほめて認めて抱きしめて
14	学習のやる気(ハードルを下げて) 友達づくり
15	家と学校の姿を一致(家ではずっとしゃべり聞いている)・ツイス(ダンス+歌)・スノーボー
16	楽しいお土産話を毎日に持ち帰る
17	ゲーム無縁の世界 大自然の中でひのびと
18	執着心からの解放(特定の友達を自分の思い通りにする)
19	豊かな生活体験・バランス(勉強は少々できなくても心豊かな子に) よく気がつく・頑張りすぎ 抱きしめる
20	寛容性(まあ、いいか)折り合い・許す心(自分+相手)
21	友達づくり
22	明るく(楽しく)特定のこだわりや癖をもちの解放
23	人間関係の改善 そのままの自分で(気を使わずに抱え込む傾向あり)
24	勇気 自信を付ける(学級代表)
25	勉強する意味 なぜ勉強するの? 宿題のスピードUP
26	登下校の課題克服(原因は不安、恐怖) 大丈夫感覚・安心感の育成

この表の完成後、私は授業の中で一人一人の子どもを見る角度を変えた。「勇気」を願いにもつ子どもには「勇気」を、「挑戦」を願いにもつ子どもには「挑戦」を軸に温かく見守った。そして見守る中でいいなと思った瞬間、言葉をかけた。「勇気ある行動だね。」「それが挑戦だよ。」私は子ども一人一人の願いにそった言葉を温かく笑顔で届け続けた。

これから記す3人の子どもは、家庭訪問で母親と話した際、新たな課題が見つかり、母親・子ども・教師の三者が共通理解をして「願い」を決め、算数の授業の中で「願い」の実現に向けてより良い改善の方向を探った事例である。

(1) A 児の願い「すぐに動く自分になる」に対する取組の内容・方法

- ・ A 児の課題...家ではすべてをやりっぱなしで後片付けをせずだらだらする。
- ・ A 児の願い...やりっぱなしの習慣を改善し、すぐに動く自分になる。
- ・ 願いの実現に向けた算数の授業

家庭での生活変容を願った A 児に対し、私が決めたキーワードは、『今・ココ・自分・すぐに動く』であった。算数を得意とする A 児の特徴を生かし、授業中、問題を解いた後すぐに動くようにさせた。その際、次の 3 つの選択肢を与え、自分で決めるように促した。ア)自分で新たな問題をつくる。イ)分からずに困っている子に教えに行く。ウ)先生の授業づくりの準備をする。A 児はこの 3 つから、すぐに動く自分になる道を決め、授業の中で新たな自分づくりに取り組んだ。その後、学校ですぐに動くようになった A 児を捉え、家庭生活の変容につなげた。

(2) B 児の願い「生きる意味を感じる自分になる」に対する取組の内容・方法

- ・ B 児の課題...生きる意味を感じず、自暴自棄で否定的な言動が目立つ。
- ・ B 児の願い...生きていてよかったと心から感じる自分になる。
- ・ 願いの実現に向けた算数の授業

「俺って生きている意味あるの？」毎朝、私に語りかけてくる B 児に対して、私は算数の授業の中で、B 児を活躍させ B 児の存在価値を温めることを大事にした。授業中、友だちの発言や考えを否定しがちな B 児を受容し、B 児を意図的に発表指名し、その発言内容を大いに称賛した。その際、右の写真のような形で、B 児の考えに共感する人に手を挙げさせ「きみは、みんなに大事に思われているね。みんなの目や手を見てごらん。」と言葉をかけて、B 児と一緒にその場の温かい雰囲気浸ることを繰り返した。そして、黒板の前で書かせた場面もしばしばあった。その際にはみんなで拍手をし、「きみがいるから今日の授業も進んだよ。ありがとう。」と温かい言葉をかけて、B 児の存在価値を丹念に温めた。



【B 児の願いを叶える場面】

写真は B 児とは違う子ども

(3) C 児の願い「友だちをつくる自分になる」に対する取組の内容・方法

- ・ C 児の課題...同じクラスに友だちがいなくてさみしい。
- ・ C 児の願い...一日も早く友だちをつくり、楽しい学校生活を過ごす。
- ・ 願いの実現に向けた算数の授業

「算数の授業の中で友だちをつくらう。」こう呼びかけた私に C 児は半信半疑であった。「先生、友だちづくりは休み時間や遊びでするものやで。」そんな素直な気持ちをぶつける C 児に対して、私は「算数の授業で友だちづくり」を願いにもたせ、5 つの授業場面で C 児の友だちづくりを応援した。以下、実際に試みた授業場面と、教師の具体的な手立て・言葉かけを表に整理してまとめている。

授業場面	教師の具体的な手立て・言葉かけ
自力解決の場面	・「ねえねえ、ここどうなった？」と近くの子に自分から話しかけてごらん。1つの授業で1回はしようね。
困った子に教える場面	・友だちになりたいなと思う子の所へ行って、○番の問題についていっぱいお話しておいでね。
発表の相互指名の場面	・友だちになりたいなと思う子を当ててごらん。 ・友だちになりたい子が発表したら進んで立ち、「発表します。」とつなげて発表してごらん。
グループ活動の場面	・今から2人(3人)グループで○番の問題を解決するよ。Cさん、友だちになりたい子の所へ行ってグループを作ってごらん。
ふり返りの場面	・ふり返りでは、今日の算数でこの子と問題を解決して、友だちになれたよと思う子の名前を入れて書くのだよ。

3. 取組の成果

(1) A児の願いに対する取組の成果

A児がすぐに動いたのは、3つの選択肢のうち、「分からずに困っている子に教えに行く」であった。算数を得意とするA児にとって、分からずに困っている子を助けるのはお手の物であった。「ありがとう、Aさん。」「Aさんのおかげで、分かりました。」クラスのみんなからもらう感謝の言葉はA児の学習意欲を大いに刺激した。A児はさらに動きのスピードを加速させ、「ぼくは滝のような勢いですぐに動く人になりたい。」と願いのステージを上げ、水を得た魚のように算数の授業で活躍を続けた。そして約1か月後、学校での活躍を家庭での生活変容につなげた。やりっぱなしだったA児は、学校同様、すぐに動くA児、滝のように勢いよく動くA児に変わっていった。A児の母親からは連絡帳でこんなコメントが届いた。「先生、Aですが、すぐに動いています。おかしのゴミもすぐに捨てるし、服の脱ぎっぱなしもなくなりました。驚いています。」2月20日、A児のキャリアノートには、自分のよいところとして、「ぼくは、滝のように行動する所です!」と書き記し、願いを確かな自信につなげて成長していったのである。

★自分のよいところは、どんなところですか

「ぼくは、滝のように行動する所です!」

【A児のキャリアノート】

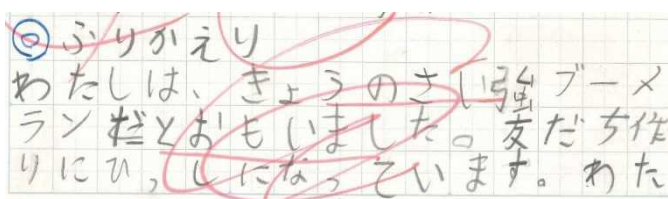
(2) B児の願いに対する取組の成果

算数の授業の中で、来る日も来る日もB児の存在価値を温める取組を続けるうちに、徐々に授業中の必要のない否定的なつぶやきが減っていった。何よりも変化があったのは、B児をめぐる生徒指導事案の激減であった。これまでは、友だちへの暴言などが毎日のようにあったが、願いの取組をはじめてから数か月ほどして、ピタッとおさまった。さらにうれしい変化は家庭でも起きた。それまで母親や妹との喧嘩が絶えなかったB児であった

が、「喧嘩も減り、母親や妹にも優しくなった。」と、母親が何かの折にした電話で報告をしてくれた。そして、「自宅へ帰ったらせめて箸箱と水筒を台所に置いてほしい。」と願う母親の思いを察知し、B児は帰ったらすぐに箸箱と水筒を台所へ出すように変わった。

(3) C児の願いに対する取組の成果

算数の授業で友だちづくりに着手したC児は、6月14日の算数の授業のふり返りでこう書いている。「わたしは、友だち作りにひっしになっています。」このように、算数の毎時間は、C児にとって友だちをつくる大切な時間になった。



【C児の算数ノートのふり返り】

これまで人の良くない所やできていない所に目を向けがちだったが、友だちの良い所やがんばっている所に目を向ける意識が育ち始めたと自分自身の成長を捉えた。7月13日、キャリアノートの保護者欄には、母親のこんなコメントが寄せられた。「3年生になって、もりもり何毎にもがんばる「力」が全開になっています。お手伝い、勉強、苦手な走る事にもファイトをもってやってパワー全開!!」C児は、算数の授業の中で、友だちづくりの願いを叶え、あらゆる分野に積極的に挑戦する、そんな子どもに変わっていった。

それから約1か月して、C児に聞いてみた。するとC児は「友だち?もう大丈夫やで。」とさりりと一言。さらに詳しく聞くと、授業の中で友だちをつくることで、何よりも学校が楽しくなってきたと言った。そして、

【おうちの人から】
3年生になって、もりもり何事にもがんばる「力」が全開になっています。お手伝い、勉強、苦手な走る事にもファイトをもってやってパワー全開!!
先生のご指導のたまものです、感謝です。ありがとうございます。

【キャリアノート(保護者コメント)】

4. 課題及び今後の取組の方向

人気歌手グループAKB48の名曲に「365日の紙飛行機」という歌がある。誰もがメロディーを聴けば、「あの曲ね!」と笑顔がこぼれる歌である。その中にこんな歌詞の一節がある。『人生は紙飛行機 願い乗せて飛んで行くよ 風の中を力の限り ただ進むだけ その距離を競うより どう飛んだか どこを飛んだのか それが一番大切なんだ さあ心のままに 365日』。作詞は秋元康さんであるが、この一節に私が本稿で主張したかった多くが含まれている。

私たち教師は、子どもの教育の中で「できたか・できていないか」という結果に目を向けがちになる。しかし大事なのは、秋元さんが言われる通り「どう飛んだか、どこを飛んだのか」という途中のプロセスである。子どもが、目標や夢に向かってやろうとしている姿、やっている姿、その一瞬一瞬を温かく見守り、「やっているね。」「それでいいよ。」「その調子。」と言葉をかけたいためである。最後になったが、これまで未熟な私を教え導き支え励まして下さった全ての先生方、授業を通して大切な全てを教えてくれた一人一人の子どもたちに心から感謝をし、本稿を閉じたいと思う。

学校経営方針を核にした、指導目的を共有する生活指導

加東市立東条西小学校
主幹教諭 中山 庸平

1 取組の内容・方法

(1) 学校の概要と児童の実態

本校は、児童数約 50 名の小規模校である。少ない人数だからこそ、普段から異学年と関わる機会を設け、縦割り班活動も盛んに行ってきた。休み時間には学年関係なく遊んでいる姿が多く見られ、低学年の児童が高学年と一緒ににおにごっこやサッカーをしている。児童は全校生の名前を覚えていて、低学年が高学年を慕い、高学年はやさしく声をかける関係性が築かれている。児童数減少とともに問題行動の件数も減ってきている。規律を逸脱するような行為がほとんどない反面、少人数ゆえに自主性・自立性が乏しいことが数年来の課題であった。

そんな児童たちに学校の誇りを尋ねると、「開魂園(かいこんえん)」と「全校群読」と答える。開魂園とは学校所有の里山で、さまざまな学習のフィールドとして活用している。春には、1～3年生が開魂園に竹の子掘りに出かける。3年生がリーダーとなり、1年生に一生懸命に掘り方を教えたり、力を合わせたりしている姿が微笑ましい。全校群読は 14 年間続いた誇りである。毎年、秋に保護者や地域の方へ群読を披露してきた。



【開魂園】

(2) 児童の自主性を伸ばす指導

教職員は、「全職員が全校生の担任」という意識で日々の教育活動を行ってきた。上記の児童の実態を踏まえ、生活指導の目標に『自主性』のキーワードを据えて取り組んできた。年度当初に教職員で以下のことを共通理解できるよう提案した。

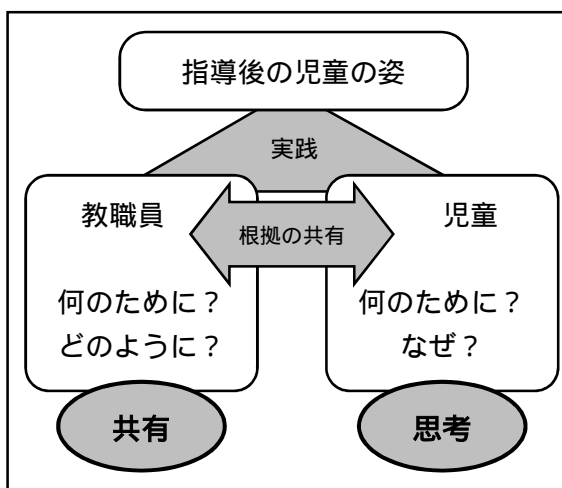
児童が「なぜ」と考えられる指導を継続する。決まりを守らせることも大切だが、決まりの必要性や意義を考えさせる。児童自身が自立した行動ができるようにすることに重点を置く。

学年が上がるにつれ、支援の手厚さを緩めていく。手はかけずに、目は離さない。できているかどうかの確認をする。そして、できたら褒める。目的を明確にした生活指導を目指す。

(3) 指導目的を明確に

教職員が指導の目的(自主性・自立性を育てる)を共有し、児童にも指導の根拠を分かりやすく伝えることを心がけた。1つの事例を紹介する。

本校では、ノーチャイムを実施しており、5分前行動を指導してきた。集団下校のときは下校時刻の5分前に集合することが慣例となっていて、担当の職員が簡単な話をしてから挨拶をして帰る。ところが、いつの間にか「集合場所に来たら、しゃべらずに静かに待つ」ことが目的になってしまった。職員にその意識があるので、話をするとき「今日の集合のときも静かにしていない。」と、注意する日が多くなっていた。児童も注意されて帰るとそうでないのでは、気分には大きな違いがある。そこで、指導の目的を『時間内に地区ごとに整列して座ること』として共有した。この目的に焦点化すると、集合場所で「児童の話し声が聞こえた」という指導は意味がなくなる。担当の職員が前に立ったときに静かにして、その日にあった楽しい話を聞いて下校する。児童が何のために整列するのか（静かに整列して待つ指導は、別の場面で指導すればよい）を整理共有する。このように、様々な場面で、何のために指導するのか、その根拠となるものを明確にすること、さらに学年に応じて児童と一緒にその根拠を考えていくことを大切にしたい。



【指導目的の明確化のイメージ】

その他に、下校時のもう1つの取組として、挨拶の改善がある。児童の代表が全校生の前で、簡単な話をして「さようなら」の挨拶をする取組を長年続けている。しかし、前が出る児童の言葉が定型化してしまっていた。それを数年前から自分の考えた言葉で語ってから挨拶するようにしていった。はじめは、天候や体調のことに関連させて語ることが多かった。そうすると、やはり同じような話になるのは想像に難くないだろう。それでは「自主性」は育たない。まず、職員の話の内容を「注意」ではなく、その日にあったことや近況の話に変える。児童は、その話を受けて話の内容を考えるようにしていった。根気よく続けることで、徐々に自分の言葉で語れる児童が増えてきた。

(4) 学校経営方針を合言葉に

前述した「開魂園」は、「学ぶ場・遊ぶ場・働く場・念じる（思う）場」とする『子どもたちの魂を開く（開魂）道場』のような存在として、昭和8年に開墾して開設された。時代の移り変わりとともに意味は変わっても、『開魂』は本校の校是として引き継がれている。この『開魂』の精神を受け継いで、伝統的に『自らを拓く』（3つの拓く）ということを学校教育目標として掲げてきている。

本校の「めざす児童像」

- まじめに責任を持って取り組む子（＝力を拓く）
- 思いを適切に表現できる子（＝心を拓く）
- 自主的に考え判断できる子（＝目を拓く）

学校長は、これらを児童に分かりやすく具体化して、4つの目標にして示してきた。今年度は、『考えて行動する』『挑戦し続ける』『支え合う』『感謝する』である。指導目

的を共有するために、全職員で共通理解したことがある。それは、学校経営方針で示された「めざす児童像」を全職員が発信することである。全職員が学校生活のあらゆる場面で、この具体目標を指導の根拠にして児童に語ってきた。根拠となるものを明確に共有することで、全職員で一貫した指導ができることを実感している。

自主性を伸ばす指導、目的を明確にした指導、学校経営方針を根拠にした指導、これらを共通理解し地道に積み重ねることで、いじめや不登校等の未然防止、早期発見につながる生活指導を目指して取り組んだ。昨年度の反省から、「めざす児童像」の4つをより具体的に評価するために、毎月の児童アンケートにも反映させて、児童自身に振り返らせている。児童自身が具体的に振り返ることで、具体像を明確にして評価できると考えている。

なんでも書こうカード。

() 月 () 日 () 曜日。

() 年 名前 () 。

☆ 自分のことを書きましょう。(挑戦していること、がんばったこと、たのしいこと、うれしいこと)。

次の4つから選び(〇で囲みましょう)、そのことについて詳しく書きましょう。

『考えて行動する』 『挑戦し続ける』 『受け合う』 『感謝する』。

【毎月の児童アンケート】

(5) 全校群読の取組

生活指導とは直接関係ないが、自主性を伸ばす取組として実践してきたことを紹介する。それは、児童の誇りの1つ「全校群読」での実践である。前述したように今年で14年目になるが、4年前の11回目から児童が主体的に関わる形に変えた。それまでは、教師主体で学年ごとに練習及び指導を行ってきており、その過程を受動的に捉えている児童が少なくなかったからである。そこで、6年生を中心に児童が群読に対して、主体的に活動できるように練習計画を立ててきた。

今年度は、次のような流れで群読を作り上げた。

6年生で作品を読み込む。(約1ヶ月半前)

6年生が1～5年生に、自分たちの思いを伝える。(約1ヶ月前)

台本を4つに区切り縦割りの班を編成し、班ごとに6年生をリーダーにして練習をする。

本番の2週間前から全校練習を行う。

全校練習前に6年生代表から、その時間の練習目標を発表する。

このことにより、自分たちの力で作り上げた「群読」として、誇りに思う気持ちさがさらに強くなったと感じている。



【6年生の思いを伝える様子】

2 取組の成果

(1) 合言葉のように

『考えて行動する』『挑戦し続ける』『支え合う』『感謝する』

4つの具体目標は、児童も教職員もいつでも諳んじることができる。それだけ事あるごとに伝え意識してきた成果である。些細な問題行動がなくなったわけでもいじめの認知件数がゼロになったわけでもない。しかし、その指導の過程で全職員が4つの目標を根拠に児童に考えさせる指導ができた。委員会活動等で児童が生活面での目標を発信するときも、その根拠を明確にして自らが主体的に考え発信するようになった。全校群読の練習では、リーダーの6年生が目標を達成できるよう、職員はほぼ関与しなくとも、事前に練習内容を打ち合わせしている姿が見られた。そのような児童の姿こそが、指導が具現化されてきた成果であろう。

(2) 下校の挨拶

ある日の低学年の下校で職員が児童に、学校の自慢は何かを聞いた。児童はすかさず、「開魂園」と「全校群読」と答えた。その話を受けての代表児童の挨拶は、「東条学園でも学校の自慢を見付けましょう。」だった。同じ日の高学年の下校である。代表児童は「東条学園でも目標をもってがんばりましょう。」と挨拶した。偶然のように感じるが児童にとってはこれまでの取組の必然であろう。児童の下校挨拶は、職員も毎回、児童が何を言うか楽しみにしている。児童の下校後、その挨拶をもとにして、管理職を筆頭に職員室で会話が弾むのである。そんな職員集団が素敵だなと感じる。

3 課題及び今後の取組の方向

ある職員が下校で、次のような話をした。

「なんでも書こうカード（毎月の児童アンケート）に、『支え合う』と『感謝する』について書いている子が増えた。今までは、『考えて行動する』や『挑戦し続ける』がほとんどだったが、意識が変わってきたんだと感じた。最後となるこの東条西小学校に感謝の気持ちを込めて生活していることが嬉しい。」

本校は、令和3年3月に閉校する。地域の2小1中が合併し、4月から新しい学校「東条学園」が開校する。児童は他の学校の児童と一緒に学校生活を送ることになる。東条学園の校訓・学校目標も決まっている。児童が安心して新しい学校生活を送れるよう、これまでの取組同様に管理職のリーダーシップのもと、学校経営方針を核に、指導目的を共有した生活指導を浸透させていきたい。

本校は地域から随時、児童の様子に関する情報を伝えてもらう文化がある。その中で多いのが、児童の「あいさつ」に関することである。そこで、『感謝する心』を具体化させる方法の1つとして、地域の方に気持ちのよい挨拶をすることで感謝を伝えようと指導してきた。校区も広くなり、地域との連携も密にしていく必要がある。児童が地域とつながることも連携として大切であると考え、今後も児童の様子を地域や家庭と共有することを大切に、普段から地域・家庭と連携を深め、未然防止はもちろん、早期発見・早期対応に努めていきたい。

国語好きな子を育てる国語科授業の創造

姫路市立高岡小学校
教諭 本家 由美

1 取組の内容・方法

平成 29 年度から「つなぐ～国語好きな子を育てる国語科授業の創造～」をテーマに校内研修を推進し、平成 30 年度に中播磨地区小学校国語教育研究大会において、「国語の時間が待ち遠しくなる授業」「考えたくなる授業」「意見がつながり、高まっていく授業」とはどのようなものかを提案した。この研究実践から得た成果と課題を確認及び改善しながら、今なお校内研修で研究を継続している。

また、令和元年度から兵庫県学力向上実践推進委員として、国語科でつまずきのある内容についての授業改善案を考えてきた。これらの研究等を通して、自ら学びに向かい、国語好きな児童をどのように育成しようとしているか、校内研修での取組及び筆者の実践を踏まえて一部紹介したい。

(1)主体的・対話的で深い学びの実現に向けた「対話的な学び」の研究

国語への興味関心を学習意欲へとつなげ、楽しさを感じさせる授業を目指す。また、児童の考えが次々につながり、より高度な結論へと導いていく授業を目指す。その方法として、次の三点を挙げる。

魅力的な言語活動の設定や学習方法の工夫 児童の興味関心をつないでいく

単元の仕組み方 中心課題を設定し、単元全体を通して課題解決に迫っていく、つながりのある授業を仕組むこと

自力学びと発見学び 自力学びでもった考えや意見を、発見学びでペアやグループ、学級全体へとつなぎ、広げていく授業

なお、本稿では紙面の関係上、 と の取組に関して以下に詳しく記すこととする。

魅力的な言語活動の設定や学習方法の工夫

< 魅力的な言語活動 >

文章の内容が理解できることを前提とし、文章の中から自分なりの答えと根拠を見つけて人とは違った意見にたどりついたときの喜びは大きいと考える。また、学びを表現したり共有したりする体験は、学んできたことを視覚化できるため、自分の成長を感じることができるものである。このような体験がたくさんあればあるほど、児童は国語が「好き」になるのではないだろうか。その体験をたくさん積み重ねることができるのが授業である。

学年・教材	指導事項	言語活動
4年生：くらしの中の和と洋 (東京書籍)	何をどのように比べているかを読み取り、調べたことを目的に応じて引用・要約する。	くらしの中の和と洋 “ そうだったのか ” ポスターを作る。
5年生：世界でいちばんやかましい音 (東京書籍)	物語の構成をとらえ、山場で起きた変化を読み取る。	題名に隠された “ 真実報告文 ” を書く。

< 学習方法の工夫 >

学年・教材	指導事項	学習方法
1年生：花いっぱいになあれ (東京書籍)	人物の行動や様子に着目して、想像を広げながら読む。	コンの気持ちを「ハート」として視覚化し、なりきり吹き出しを使う。
5年生：言葉の意味が分かること 見立てる(練習) (光村図書)	事実と感想、意見などとの関係を、叙述を基に押さえ、文章全体の構成をとらえて要旨を把握することができる。	練習教材において、教員があらかじめ作成した要旨を提示し、要旨とは何か 要旨をとらえるためのポイントは何か を考える。

「要旨をとらえる」ということを初めて学習する単元

本文を読み取った後に要旨をとらえてまとめるのではなく、要旨をとらえてまとめるためのポイントを考える手立てとして、練習教材で先にあらかじめ要旨を提示する。この要旨と本文を比較するという活動を入れることで、要旨をとらえることに難しさを感じている児童や、どう指導してよいか悩む教師にとっても、要旨のとらえ方やまとめ方について、要旨と本文に出てくる共通の言葉を探すことから始められ、比較しやすく、苦手意識を減らすことができる。



[写真1 繰り返し出てくる言葉を見つける]

要旨と文章構成図、要旨と本文を見比べて気付いたことはありますか？



まず筆者の考えが多く書かれている「初め」や「終わり」の部分に児童の目を向けさせ、繰り返し出てくる言葉を見つけることから始める。

自力学びと発見学び

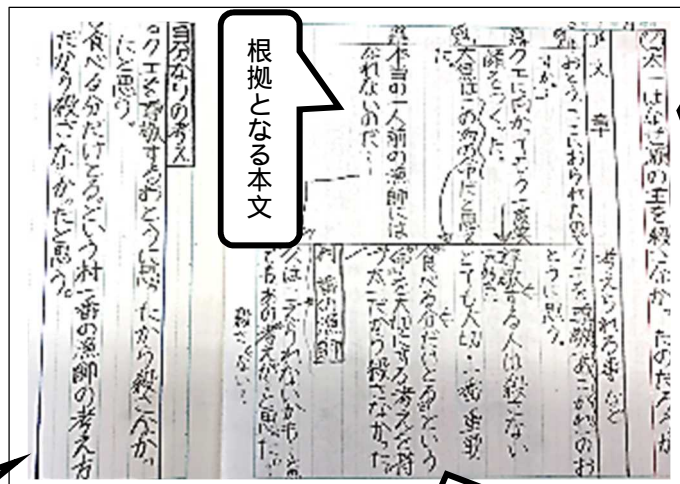
【対話的な学び】を以下のように位置付けた。なお、ここで言う「対話」とは、音声言語によるものだけではなく、教材との対話、自分自身との対話も含む。これらの学びの根幹にあるのは、自分事として考えることである。そのためには、聞き手と話し手の関係が成り立ち、意見や考えを認め合いながらつながる支持的風土のある温かい学級集団づくりが必要条件となる。

1. 教材を自分で読む 教材との対話
2. 自分の考えや思いを友だちと交流し合う 友だちとの対話
3. 再度、自分の考えと向き合う (考えの修正、付け足し) 自分との対話

[写真2 6年「海の命」自力学び例]

< 自力学び >

自力学びは、教材と自分が対話をして自分の考えをもつ学びのことである。ノート、ワークシート、教科書への線引きなど、児童の実態に応じてやり方は様々である。学年の状況に応じて、ワークシートやノートを使用しての自力学びを行う。いずれにせよ、教材文としっかりと対話し、「自分の考えをもつ」ことをねらっている。



根拠となる本文

みんなで考えたい疑問

自分の考え・疑問に対する自分なりの答え

本文から想像できること読み取れること

< 発見学び >

発見学びは、自力学びでもった自分の考えと友だちの考えを、ペアやグループで交流しながら、自分の考えとの共通点や相違点をもとに、学級全体でより高度な結論へ到達しようとする学びのことである。

先述の自力学びでもった自分なりの答え（考え）をもとに、ペアやグループ、学級全体など、対「人」との対話によって、より高度な結論へと導いていくこと、それが発見学びである。発見学びで得たことをもとに、最後にもう一度自分なりの答え（考え）をもつ。



[写真3 学級全体での発見学び]

その際、単なる児童同士の意見発表や感想発表で終わらせないことである。発見学びによって読み深めるためには、教師には「教材研究、話し合いをさせるスキル」が求められる。そもそも「対話」の術を知らなければ、このようなやりとりはできない。そこで、学級経営や普段の学校生活も含め、朝の短時間学習タイムを中心に対話指導、対話訓練を取り入れ、そこで培った力を生かして、友だちとの対話でより高度な結論へと導くための発見学びを取り入れている。

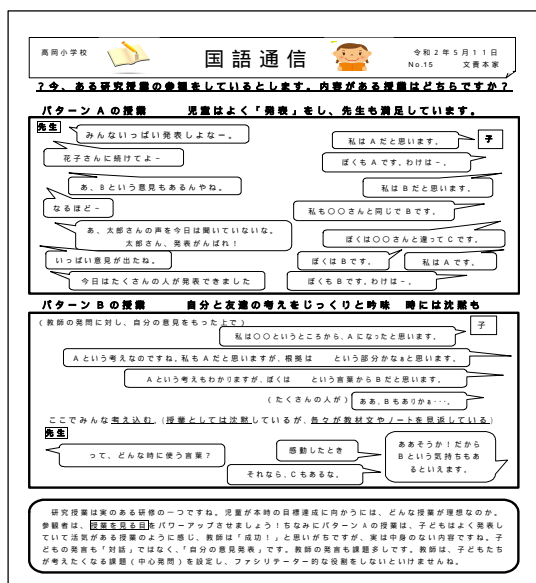
発見学びを充実させるための【対話指導】

対話の理論と実践研修、高岡小対話指導マニュアルの作成、高学年児童による全校対話指導、授業公開など、全校をあげた対話指導を提案した。全教職員が全ての児童に同じ学びを保障すべく、朝の短時間学習タイムを利用して全教職員による対話訓練授業の公開や各学年でローテーション授業を行うなどして、指導力の向上を目指した。



[写真4 対話授業 指導略案]

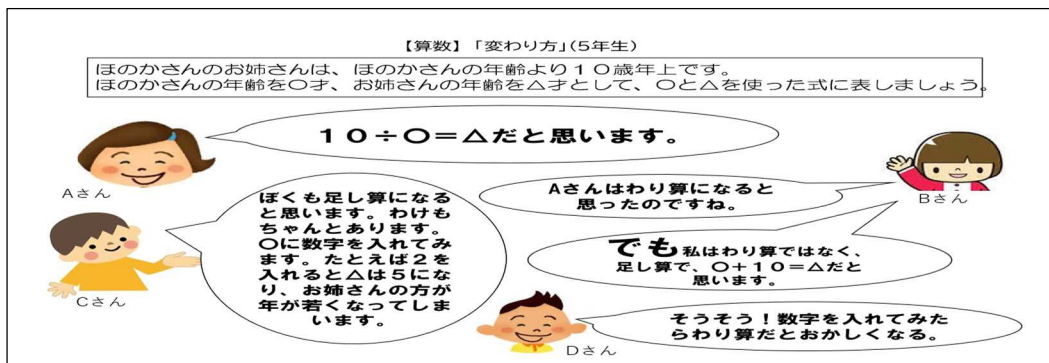
対話の基本や質問、反論などの指導を文字化やゲームなどを通して行う。



[写真5 国語通信(教職員向けに発行)]

研究授業での成果や対話指導、国語科の理論などについて、全職員で共有したい情報を発信している。

- (2)「主体的・対話的で深い学び」を実現するための教科横断的な校内研修
 国語科で培った自力学びや発見学びは、他教科の学習でも同様に行う。対話の術を学習しているため、下記のように互いの意見を尊重しながら学習を深めている。



この実際の学習例を用いて、学びに向かうとはどういうことか、対話的な学びとはどのようなものを校内研修で検証している。

2 取組の成果

本校では学校全体で「興味関心を高めるための工夫」「自力学びと対話による発見学び」「単元や45分間の仕組み方」などを研究してきた。その中で、教師の意識は大きく変わり、児童も変わっていった。筆者の学級では毎日3行日記を書いているが、国語の学習や対話に関する記載が非常に多い。

今日休み時間に「海の命」の疑問を友だちと話し合った。僕はこの話し合いが好きで、国語の時間の後はほとんどその話をしている。これからも友だちといろんな疑問を話し合いたい。自力学びをしました。根拠を本文から探していくうちに、自分なりの答えが出てきました。でも、まだ少し不安なので、みんなと対話をして、いろいろな人の考えを聞きたいです。やっぱり対話でいろいろな人が意見を出すことで、自分にはない気づきまで学ぶことができる。クラスみんながいなければできないことだと、あらためて思いました。対話のおかげで話し合いが広がる。
 (児童 毎日の3行日記より)

ここからも取組の成果が感じ取れる。「国語の時間が待ち遠しくなる授業」「考えたくなくなる授業」「意見がつながり、高まっていく授業」の実現に近づいていると実感する。

3 課題及び今後の取組の方向

【読む領域】や【話すこと・聞くこと領域】では、児童は主体的・対話的で深い学びを実現しやすく、児童も教師も取り組みやすいのではないが。しかし、【書く領域】に関しては、書く力の差からも生じる学びに向かう勢や対話的な学びの展開の仕方など、課題がある。理想は「読むことも、話すことも聞くことも、そして書くことも含めて国語が好き」という児童の姿である。まずは説明文単元などで書く力の学びに向かう姿や対話的な学びを研修していきたい。また、国語科で培った力をさらに他教科や特別活動につないでいき、学びの過程や質の向上を目指していかなければならない。

1 取組の内容・方法

(1) 研究にあたって

プログラミング教育を行う中で重要となるのが「プログラミング的思考」であることはすでに広く周知されている。プログラミング的思考とは、「自分が意図する一連の活動を実現するために、どのような動きの組み合わせが必要であり、一つ一つの動きに対応した記号をどのように組み合わせたらいいのか、記号の組み合わせをどのように改善していけば、より意図した活動に近づくのか、といったことを論理的に考えていく力」のことである。よく考えてみると、従来から生活や学習場面で児童はプログラミング的思考につながる経験を繰り返してきている。

例えば、給食の食器当番は右のような手順で仕事を行う。ここでは、プログラミング的思考において重要な要素である「手順の細分化」「順序の最適化」が表れている。加えて、学習場面でもこのような思考が見られる場面がある。例えば、算数におけるわり算の筆算である。右のように、計算の仕方を順序立てるだけでなく、「たてる かける ひく おろす」という手順の「反復」も見られる。時には誤答を導き出した際、「どこが」間違っているのか「改善点」を探そうとする。

- | |
|-----------------------|
| ① 食器かごを配膳台に置く |
| ② 必要枚数と予備に分ける |
| ③ 配膳図に合わせて食器を各食缶の横に置く |
| ④ 食器かごを食器返却場所へ置く |

- | | |
|-------------|--|
| ① 5をたてる | $\begin{array}{r} 54 \\ 4) 216 \\ \underline{20} \\ 16 \\ \underline{16} \\ 0 \end{array}$ |
| ② 4に5をかけて20 | |
| ③ 21-20で1 | |
| ④ 6おろす | |
| ⑤ 4をたてる | |
| ⑥ 4に4をかけて16 | |
| ⑦ 16-16で0 | |

つまり、児童は日々の生活の中で「無自覚的に」プログラミング的思考につながる経験をしているのである。したがって、これらの思考を自覚的に行なって過ごしている児童は少なく、多くの行動が当たり前の生活の営みとして習慣化しているため、いざ改善を求められる場面に出会ったときにどのようにしてよいか分からないケースがある。そこで、生活の様々な場面で、「今どのような問題が起きているのか」「どのように改善していけばいいのか」について児童が意識できるように、学習における児童自身の行動手順の「視覚化」が鍵となる。この考えに基づき、授業の中に「考えの組み立てや改善が『見える』工夫」を取り入れることとした。以後、数ある実践の中の一部を紹介する。

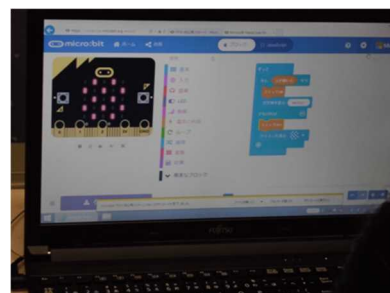
(2) 6年理科「発電と電気の利用」実践

学習内容

「温度」「明るさ」「人感」の3つのセンサを目的に合わせて選び、micro:bitによるプログラミングによって電気回路の制御を行った。

展開

まず、「温度」「明るさ」「人感」の3つのセンサのメリットについて皆で話し合うことで、児童が目的を

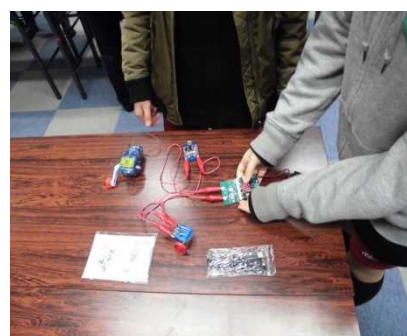


もってセンサを選ぶことができるようにした。次に、手回し発電機で蓄電したコンデンサを従来通り回路につないでモーターや豆電球を作動させる体験を行った。そして、「micro:bit プログラムサイト」で自ら選んだセンサが作動するようにプログラムを組み立て、micro:bit にプログラムを取り込む活動を行った。最後に、実際に micro:bit を回路に組み込み、モーターや豆電球を作動させることで、プログラムで制御することによって電気の効率的な利用につながっていると実感できるようにした。

見える化する手段	目的
micro:bit プログラムサイト	センサのプログラム 手順の見える化
micro:bit	意図したプログラムの 動作の見える化

児童の振り返り

- ・人感センサを使うと省エネにつながる。
- ・今までのスイッチよりも、自動で電気の使う量を調整できて便利だなと思った。
- ・明るさセンサの数値を5にすると作動しなかったから、4にすると作動するかもしれないと思った。
- ・お年寄りが一人で暮らしていたら、人感センサはいろんなところで使えそうだなと思った。



成果と課題

振り返りから、電気の効率的な利用に対する学びが深まり、身の回りのものに対する電気利用の有効性を多くの児童が実感できていたことがわかった。また、学びの意欲やコンピュータの役割についての理解、情報活用能力にかかわる部分でも子供たちの高まりが感じられた。理科のねらいを達成しつつ、実生活とプログラミングをつなげることができた実践となった。課題としては、コンデンサの電気の残量表示がないため、体感的にはより長く電気を利用できていることはつかめたが、実測が難しかった。また、明るさを表す数値と実際の明るさの関係性をつかむのが難しく、児童は実際に何度も改善を加えながら関係性を探っていた。

(3) 4年総合的な学習の時間「未来の便利な生活を見つめよう」実践

学習内容

パソコンの上下左右ボタンに、Scratch でロボホンの動きをプログラミングし、自ら選んだコース上をロボホンに歩かせながら、より意図した動きになるようにプログラムを改善した。

展開

まず、実際にロボホンがコース上を歩いている様子を見て、人がボタンを押すことで、ロボホンが前後左右に動いていることをつかんだ。次に、「Scratch for ロボホン」を使って「上矢印キーが押されたとき1歩前へ歩く」というプログラムを皆で作ってみることで、ボタンにプログラムを組む方法について知った。そこから、後退や左右にロボホンが動くためのプログラムを他の矢印キーにもプログラミングする活動にグループで取り組んだ。そして、教師が用意した3種類のロボホンが歩くコースから好きなものを選び、実際に歩かせてみることで、「前進する歩数を増やそう」「右へ向きを変える回数を変えよう」とい

見える化する手段	目的
Scratch for ロボホン	ボタンに割り当てる プログラムの見える化
ロボホン	意図したプログラムの 検証と改善の見える化

たプログラムの改善を何度も行いながら、ロボホンをゴールまでたどり着かせる活動を行った。最後に、本時の学習を振り返りながら、身の回りのボタンは、人間の意図したプログラムが組み込まれていることに気づく展開とした。

児童の振り返り

- ・家にあるリモコンのボタン1つ1つにも誰かがプログラミングしているのだなと思いました。
- ・ロボホンが思った通りに動いてくれたときはとてもうれしかった。
- ・1回ボタンを押すだけでゴールまで自動でロボホンが歩くプログラムを作っている班がすごかった。私ももっとプログラムを変えてみたいと思った。



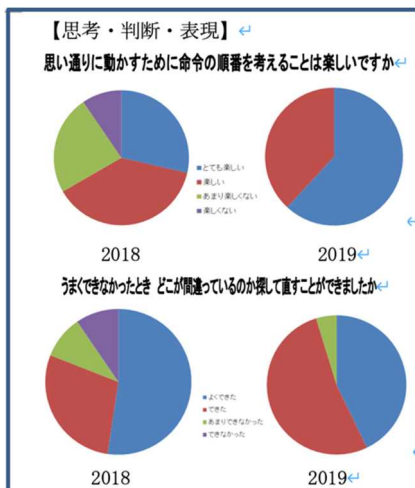
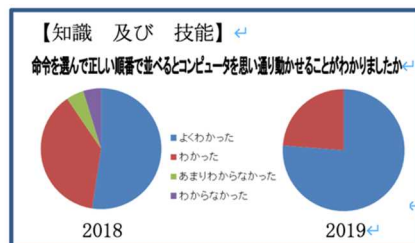
成果と課題

実際に目の前でロボホンがコースを歩く姿を通して、ロボットに愛着がわき、ロボホンがスムーズにコースを歩くためにより効率的なプログラムになるよう改善する児童が多かった。また、総合的な学習の時間で、まず身近な自動で動くものについて調べる探究学習を行い、「なぜ自動で動くのか」という問いを持たせ、そこから実際にプログラムに対する意欲や探究に繋がる展開が効果的であった。課題として、本時はプログラムの仕組みに「気づく」学び、つまり情報活用能力の「知識・技能」の側面が強調されていた。今後は、例えば「来校者が校内で迷わないようにロボホンに学校案内をさせたい」というようなイノベーション活動を展開することで、「学びに向かう力・人間性等」の涵養につなげられると感じている。

2 取組の成果

(1) 児童の実態の変容

平成30年度から姫路市教育研究員として研究を始めた頃に児童の実態をアンケート形式で把握し、その後2年間にわたる前述の実践も含めた授業を経験した児童に同様の内容でアンケートを行い、変容を分析したのが右のグラフである。これらの結果から、児童の思考の組み立てや改善が見える授業の工夫を取り入れたことで、児童自身がプログラミング的思考を意識しながら活動に取り組むことにつながったといえる。さらに、実践初期の児童の中には、プログラムが上手くいかない状況に出会うとどこを改善すれば良いか分からず、そのため意欲が低下する姿も見られたが、自らの思考の手順が視覚化された授業を通して、改善点が分かったり、改善すること自体に楽しみを感じたりする姿に変容していた。



(2) 研究を広める活動

2年間にわたって行ってきた研究内容は、以下に記すような機会を得て、発表を行うことができた。発表にあたって研究内容をふり返ってまとめたことや、指導助言や傍聴者の感想を得ることで、研究内容をさらに深めることができた。

姫路市理科担当者会でのプログラミング研修

理科担当者へ micro:bit を使ったプログラミング教育実践の報告と体験活動のデモンストレーションを行った。学習指導要領にも例示されている6年理科「発電と電気の利用」の単元について、入手しやすい micro:bit と、手回し発電機やコンデンサといった校内にある備品を活用した実践である。来年度の完全実施へ向けて、各校でどのような機具を準備すればよいのかを例示することができた。



平成31年度兵庫県内教育研究所連盟研究発表大会

研究の動機から児童の実態調査の結果、それまでに行った授業実践の内容と成果と課題に至るまでを発表した。教科学習の中での実践や低学年から中学校までに渡る様々な発達段階に応じた実践内容は傍聴者の関心を集め、質疑応答でも盛んな意見交換を行うことができた。

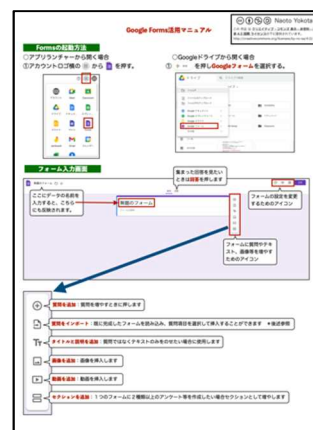
令和元年度課題研修（情報活用能力）

姫路市教育委員会教育研修課の主催する情報活用能力についての課題研修の場で行った。発表に先立ち、兵庫教育大学大学院の森山潤教授の講演が行われ、それを受けての発表となった。実社会の動向や日常の学校生活で働いている思考とプログラミング的思考の共通点などを取り上げながら、研究の趣旨について説明した。中でも、我々が実践の中で大きな課題と感じていた「教科のねらいとプログラミング教育のねらいの扱い」については、研究の前後で捉え方がどのように変容したかについて大きく取り上げ紹介した。発表を通して、思考を「視覚化」するプログラミング教材の有効性や、プログラミング的思考を育むためには、低学年時より取り組んだほうが効果的であること、そのためのカリキュラム作成や情報共有サイトの重要性について伝えることができた。



3 課題及び今後の取組の方向

本年度は姫路市全小中学校に1人1台の Chromebook や micro:bit が整備され、より一層プログラミング教育を推進しやすい環境が整えられている。そこで、多くの教員がプログラミング教育や ICT を活用した教育を展開できる取組が必要不可欠である。現在、右のような教員が活用できる各種 Google アプリケーションのマニュアルを作成して啓発しているところであり、今後はプログラミング教育も含めた教育コンテンツの充実に努めていきたい。



新時代を切り拓く社会科学習の在り方について

姫路市立城陽小学校
主幹教諭 小川 真也

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、人工知能の進化、SDGsの推進などにより、現代を生きる子ども達の将来は、予測困難な時代になると言われている。平成29年告示の小学校学習指導要領は、そうした社会の変化やその先の社会の在り方を見通しながら、その時代に社会人として活躍できる人材に必要な力を育むことを目的に改訂された。そのためには、児童の学習の中に「持続可能な社会の実現」について現代の社会が抱える諸課題について主体的に追究し続け、自分にできることを思考・判断・表現する場面を設定することが重要であると考え。そこで、社会科学習において「児童が主体的に学習に取り組むことができる魅力的な教材・資料の開発」「児童が自分を社会につなぐことができる対話的な学習展開」を軸に研究を行った。そうすることで、持続可能な社会に向けて生きて働く力を子どもたちに身につけさせることができると考え、実践を進めている。

この稿では、社会科学習における「魅力的な教材・資料の開発」及び「多様な人材との対話を重視した学び」について実践したことを、紹介したい。

(2) 児童が主体的に学習に取り組むことができる魅力的な教材・資料の開発

社会科学習において、児童が主体的に学習に取り組むためには対象とする教材(社会的事象)が、児童にとって身近に感じられるものであることが重要である。社会的事象に対して児童が感じる、「どのようにして?」、「なぜだろう?」といった小さな疑問を連続して取り上げていくことで、問題解決的な学習を展開することができる。そのような疑問から社会の仕組みについて学習し、自分が社会の一員であるということを認識していくことを目指していく。これらのプロセスにおいて、学習対象が身近であることは児童にとって無理なく学習を進めて行くことに寄与するものである。

魅力ある資料と体験活動 ～3年社会科「わたしたちの市のうつりかわり」～
生活科から社会科に発展する3年生は、児童にとって大きな転換期になる。生活科における家庭や学校、身近な地域といった学習から、社会科では校区をはじめ姫路市全体へと学習対象が広がる。さらに、兵庫県、日本全体と学年が上がるごとに学習対象が広がっていく社会科学習においては、3年生において確実に社会的事象の見方・考え方の基礎を身につけておくことが重要である。そこで、姫路市全体の移り変わりを学習する前に、校区の移り変わりについての学習を組み込んだ単元を開発した。

過去数十年間における校区の様子や人々の生活の変遷について、児童が学習しやすいように、写真資料や体験的な活動を中心とした単元を構成した。校内に保存してある資料だけでは不十分であったため、姫路市広報課や兵庫県立歴史博物

館から多くの写真資料を提供していただいた。また、校区在住のスクールヘルパーの方を招いて、当時の生活の様子について児童と意見交流を行ったり、七輪での火起こしを教えていただいたりと体験的な活動の充実を図った。

日頃から見慣れている景色とは大きく異なる昔の写真について話し合ったり、スクールヘルパーとしていつも見守ってくれている方をゲストティーチャーとして招聘し交流したりしたことで、児童が高い意欲をもったまま学習を進めることができた。



図1 罹災した城陽小学校講堂
(兵庫県立歴史博物館 所蔵)



図2 写真を時代順に並び替える
グループ活動



図3 地域の高齢者との対話



図4 七輪体験の実施

校外学習に代わる視聴覚教材の作成 ～施設や工場の見学動画の製作～

令和2年度は、感染症拡大防止対策の一環で、校外学習のほとんどが実施できない状況であった。学習する対象を現地に赴いて見学調査することは、社会科学学習において極めて重要な活動であると言える。そこで、姫路市役所をはじめとする行政施設や民間企業に協力を依頼して、ごみ処理場、浄水場、かまぼこ工場などの動画を作成し、市内の学習サイトにアップした。

各動画において、過去の見学・説明資料をもとに内容を構成し、施設の概要や製品の製造過程を中心とする一方で、担当者への質疑応答をイメージしたインタビュー映像を組み込むことで、児童が疑問に思ったことを解決できる資料としての活用をねらった。学習サイトは、児童に一人一台導入された Chromebook や、家庭で使用している端末機からもログインすれば視聴できるため、教室での一斉授業のみならず児童の一人学習においても効果を発揮することができた。



図5 かまぼこ工場見学動画
(協力 ヤマサ蒲鉾株式会社)



図6 浄水場職員へのインタビュー

(3) 児童が自分を社会につなぐことができる対話的な学習展開

社会科の学習において、社会的事象を自分事としてとらえるための学習活動のひとつが、社会に対して児童が選択・判断する場面であると考えられる。単元を通じて獲得してきた知識や概念を用いて、今の自分にできることや未来の社会について考えることは、自らを地域や社会に生きる一員として認識することにつながる。そして、その学習場面において、社会で実際に諸課題に対してつながっている人物との対話的な学習活動を設定することで、現在及び未来の社会のあり方についてより身近に感じながら広く考えることができる。

自分たちにできること ～4年社会科「ごみのゆくえ」～

前述のごみ処理場の動画作成において連携した、姫路市役所リサイクル推進課の担当者をゲストティーチャーとして招聘した。児童がこれまでに学習してきたごみ処理の取り組みから、「ごみを減らすために自分たちにできることは、ないのだろうか?」という学習問題を設定し、それに対して個人やグループで考えたアイデアについて担当者と対話する活動を取り入れた。担当者からの、「小学生だからこそできることがある。」という声掛けから始まり、「合言葉はもったいない。」という市内でのごみ減量についてのスローガンをもとに、行政における取り組みを紹介していただきながら、児童が考えたアイデアについて対話を行った。地域のテレビ局や新聞社も取材する中、児童と市の担当者がこれからの姫路市のごみ減量について話し合う活動は、校内のみならず市内に広く啓発することができた。



図7 市の担当者との対話活動



図8 朝日新聞(2020年7月30日)

歴史学習から未来を考える

～ 6年社会科「国力の充実を目指す日本と国際社会」～

歴史学習において、「自分たちにできることを選択・判断する」活動は設定することが難しい。そこで、その時代の中心的な登場人物に焦点を当てて学習を進め、現在、未来へと児童の意識を繋げる単元を構成した。ここでは、伊藤博文に焦点を当て明治維新とそれ以後の日本の国づくりについての変遷を学習させ、単元の終末に、伊藤博文に対して手紙を書く活動を設定した。手紙の内容は、「伊藤博文の当時の取り組み」「現在の日本とつながりのある点」「これからの日本のあるべき姿」について児童なりの意見を述べた。児童にとって遠い昔の歴史人物を身近に感じ、その人物との対話を設定することで日本が歩んできた歴史を学び今後にかかしていこうとする意識をもたせることができた。

2 取組の成果

児童にとって身近で魅力ある資料と体験活動を単元内に効果的に組み込むことで、児童が主体的に追究活動に取り組むことができた。外部の人材との対話的な学習は、講師からの一方的で講話的な活動とは異なり、児童が学習してきた内容やその過程で生じた疑問について専門家と意見を交流し合うことをねらった。その結果、地域や日本の未来について考える活動を通して、理解を深めるだけでなく「もっと知りたい。」「知ったことを誰かに伝えたい。」といったさらなる学習意欲へとつなげることができた。

3 課題及び今後の取組の方向

地域素材を教材として活用したり、地方行政や民間企業と連携して学習を展開したりすることで、児童にとって充実した質の高い社会科学学習を実践することができた。本実践において作成した資料、指導計画、評価計画などはすべて市内の小学校と共有しており、どの小学校においても活用することができる。しかしながら、周知が十分ではなくすべての小学校で同様の実践が進められているわけではなく、また、校区の実態に合わせて改善例を示していく必要も考えられる。

今後は、新しい時代に求められている社会科学学習について、市内に限らず県内の小学校並びに中学校、さらには高等学校までを見通して実践研究を進めていきたい。そのためにも、様々な校種の先生方や実践家、研究者の方々と交流しながら研鑽していきたい。

参考文献

- 澤井陽介 小学校新学習指導要領 ポイント総整理 社会 東洋館出版社 2017
- 澤井陽介 社会科の授業デザイン 東洋館出版社 2015
- 安野 功 授業実践ナビ 文溪堂 2010
- 安野 功 新しい社会科の授業 日本標準 2017
- 北 俊夫 なぜ子どもに社会科を学ばせるのか 文溪堂 2012

「主体的・対話的で深い学びを実現する算数科授業の創造」

姫路市立城乾小学校
教諭 田中 渉

1 取組の内容・方法

(1) 「ひょうごつまずきポイント指導事例集」作成について

平成 27 年度より、城乾小学校は「指導事例集」の協力校に指定された。この「指導事例集」は兵庫県下の小中学生のつまずきポイントを洗い出し、そのポイントを系統性に着目して、低位の学年から解決に向けて取り組んでいこうとするものであった。

そこで、本校では特に「量と測定」の領域に特化し、「単位量あたりの大きさ」や「速さ」につながるつまずきについて調査・研究してきた実践を事例として取り上げた。

- ・異学年間で研究を推進する「縦の交流部会」を設置



写真 1 「ひょうごつまずきポイント指導事例集」

(2) 平成 30 年度中西播磨地区小学校算数教育研究会の開催

上記の「指導事例集」作成にかかわり、本校児童にもつまずきポイントに若干の改善が見られるようになっていたが、依然として児童は主体的な学びや対話的な学びが十分に実現できていない状況にあった。そこで、児童一人ひとりが「問い」を明確にして問題解決に主体的に取り組み、自らの学習過程を振り返ってさらなる学びを追求していくことができるような問題解決型の授業を創造することを目指した。

- ・活用を重視した問題解決型授業の設計

これは、主問題を全体で練り上げていく「かいけつする」場面とさらにそこで得た学びを児童一人ひとりが活用する「やってみる」場面を取り入れた授業である。

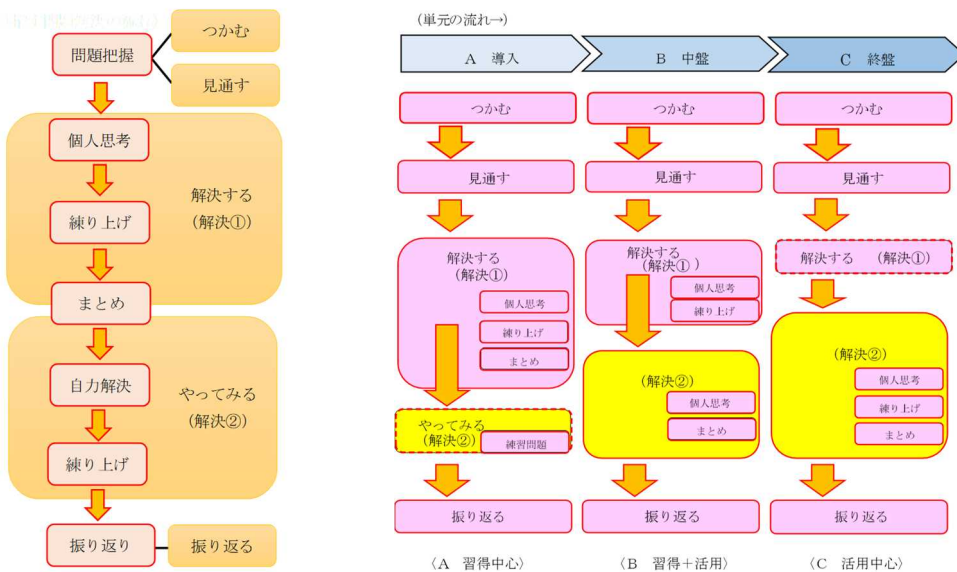


図 1 城乾小の問題解決型授業の流れ

・教師の研修方法の工夫

これまでの授業者中心の授業研究から，参観者全員が中心となって研修に取り組めるよう，授業観察シートやクリッカー（ ）の活用を導入する工夫を行い，P P D A C サイクルを意識した研修を行ってきた。

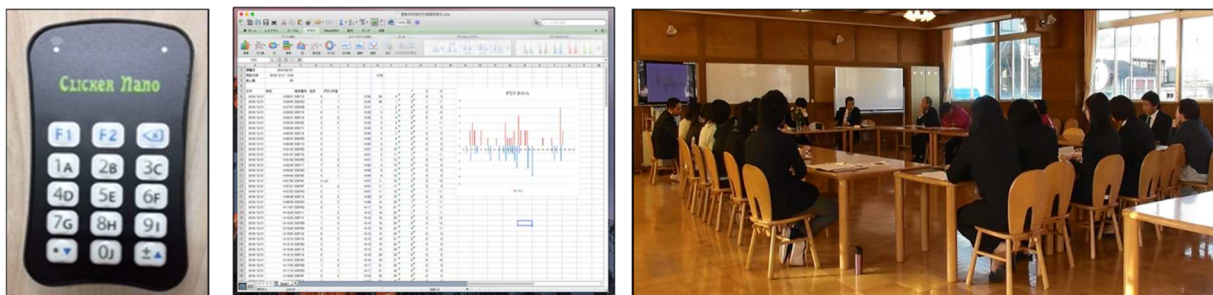


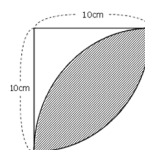
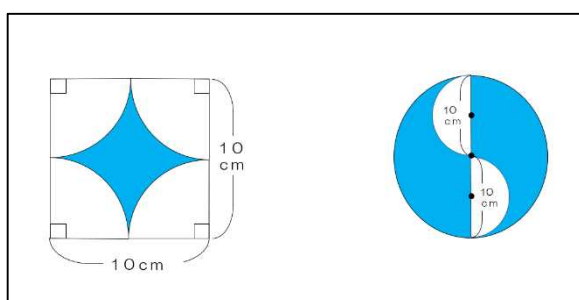
写真2 左：クリッカーリモコン 中：クリッカー集計 右：研修風景

参観者がリモコンのボタンを押すと，回答結果が集計されてリアルタイムにパソコンの画面に表示されるというシステム。大学では教授する側と受講する側の双方向授業を目指して導入している。ここでは参観者に授業展開に従って good/question を回答してもらい事後検討の際に集計結果を活用して話し合うという使い方をした。

(3) 「見て・学ぼう！ひょうごっ子広場」への出演

研究会で確立した授業のノウハウを生かし，上記番組の制作にあたった。担当したのは第6学年の「円の面積」の学習である。特に，既習の見方・考え方を想起させて問題解決ができるように展開を工夫したことと，図と式の関連を意識して説明することを心がけた。

- ・パワーポイントのアニメーション機能を生かした図の変形を説明する資料
- ・d ボタンを活用した視聴者参加型番組
- ・発展的に見方・考え方を活用する練習問題の掲載



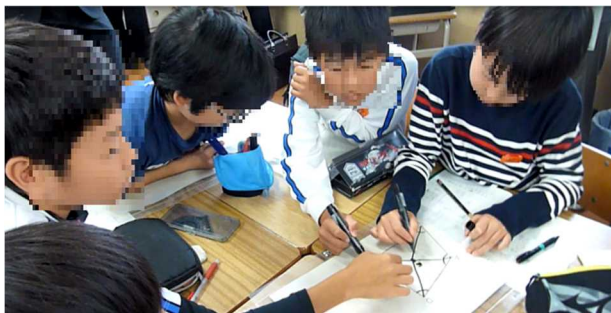
Q 左の図形の色をぬった部分の面積の求め方を考え，説明しましょう。

図2（上）番組で扱った問題
（左）発展的な問題

2 取組の成果

(1) 「ひょうごつまずきポイント指導事例集」作成への協力の過程で，それぞれの学年の教師が，自分の担当学年の学習内容を超えて，教材研究するようになったことが成果と言える。該当学年では何を学ぶのか，それを学ぶための「見方・考え方」が前学年のどこにあるのか，該当学年で学んだことが上位の学年の学習内容とどうつながっていくのか，授業を計画する際にしっかりと深められたからこそ，研究授業などでも児童の発言を統合的にまたは発展的に扱うことができていると思われる。

- (2) 中西播大会の成果は、児童が主体的に算数科の学習に向かう姿が増えたことである。その要因となっているのが、本校の問題解決型学習の「やってみる」場面にあると考えられる。児童は、この場面があることによって受け身で学習した見方や考え方を自分の力で活用し、その理解を確かなものにしていくことができているように思われる。ただ、一概に「やってみる」活動を「こうすればよい」と括することはできないため、指導者が児童の実態を十分把握した上で、どのような見方・考え方をを使わせたいのか、どうすれば児童一人一人が見方・考え方を自然と発揮する状況になるのかを綿密に計画しておくところが難しい点である。また、研究会を通して、児童に話し合いを「委ねる」教師の姿勢が重要であることも共通理解された。我々は、児童に学習内容をしっかりと定着させなければならないという責任から、つい足りない部分を説明してしまう。しかし、その状況が、児童が発見したり、分からないことを尋ねたりする機会を奪っていたのである。



- (3) 「見て・学ぼう！ひょうごっ子広場」の作成にあたっては、以下の2点が整理できた。
- ・児童に話し合わせたいことを本時で最も考えさせたい部分に絞る
これは、授業をしているとつい、全ての児童の理解を追究するあまり、ショートステップに一問一答を繰り返しがちな我々の授業が、いかに本題に入るのが遅く、肝心な内容が十分に話し合われないまま終わっていたかを考えさせられたということである。
 - ・算数科特有の具体的な目標の背景には数学へと続く「数学的な考え方」がある
明確に「できるようにさせたい」内容があるだけに、ついその定着に意識が向かいがちであるが、その背景には大きな「考え方」が存在していて、学習者にとってはそちらを捉えることが今後の学びにとって重要であることに気付かされた。

3 課題及び今後の取組の方向

児童に「主体的・対話的で深い学び」を実現させていくためには、綿密な授業計画が必要不可欠である。それと同時に的確な児童の見取りをもとに対話を彼らに委ねていくことも必要である。計画にも実践にも多大な時間を要する。そのため、どうしても1時間の授業時間内に収まりきれない場面が生まれてしまう。そうならないために、本時で一番児童に考えさせたいことは何かしっかりと授業者がつかんでおく必要がある。今後も児童が「主体的・対話的」に学べる環境を工夫しつつ、実践事例を蓄え兵庫県下の先生方と成果を共有してよい授業を広めていきたい。さらに学識の先生方に教えを受けながら「深い学び」を我々自身が学んでいかなければならない。

姫路市学校事務職員協議会活動の取組

～ 学校業務改善の推進 ～

姫路市立豊富小中学校（前期課程）

学校副主幹 木村由賀里

1 取組の内容・方法

（１）はじめに

姫路市立小中義務教育特別支援学校事務職員協議会（以下、「協議会」）の活動は、学校事務の確立を図り、学校運営を担う職員として学校教育の向上発展に寄与すべく、学校事務を推進するための研究・研修を行い、会員相互の情報共有及び親睦を図ることを目的に日々取り組んでいる。

姫路市では現在、小学校66校、中学校32校、義務教育学校3校、特別支援学校1校の102校130名で活動している。以前から継続し繰り返し行う活動と、その時代に適応した新たな活動を全員で共有し、児童生徒の豊かな教育活動を支援するために、新採用事務職員からベテランの再任用事務職員までがそれぞれの立場で活動をしている。前年度まで協議会の会長として取り組んできた私が今回代表して兵庫県優秀教職員表彰を受賞することになった。

（２）学校業務改善のための協議会活動

協議会では、すべての教職員がいつでも自分が必要な時に必要な情報を各自の校務用パソコンから得られるように、様々な工夫をしている。毎年8月に開催される姫路市勤務時間適正化検討会では、学校業務改善推進校の加配事務職員が参加者（各校管理職及び安全衛生委員代表者）に活動を紹介し、取組や作成物を姫路市全体に普及させるための活動をしている。平成30年度から2年間、本校は姫路市の学校業務改善推進校となり、他の推進校の加配事務職員と共に中心となって研究をした。市教育委員会と情報交換を行い、課題や問題点を共有し、勤務時間適正化検討会の発表に向けて調整した。

ア 公文書リンクファイルの活用

市内すべての学校で、「姫路市立学校事務諸表簿基準一覧表」に基づき、文書（紙媒体・データ）の集中管理をしている。データ文書は各校事務職員が「公文書管理フォルダ」に保存しており、教職員は協議会作成の「公文書リンクファイル」を活用することにより、簡単に保存したデータを検索できる。また、報告する文書も同じファイルに保存することによって、いつでも誰もが必要な時に必要な情報を活用することができる。すべての学校で、新規採用者や市外からの転入者、市内の異動者が4月当初に各自の校務用パソコンのデスクトップに貼り付けて利用することにより、文書の流れが統一され業務改善につながっている。

イ 「姫路市学校ルールブック（学校事務編）」の活用

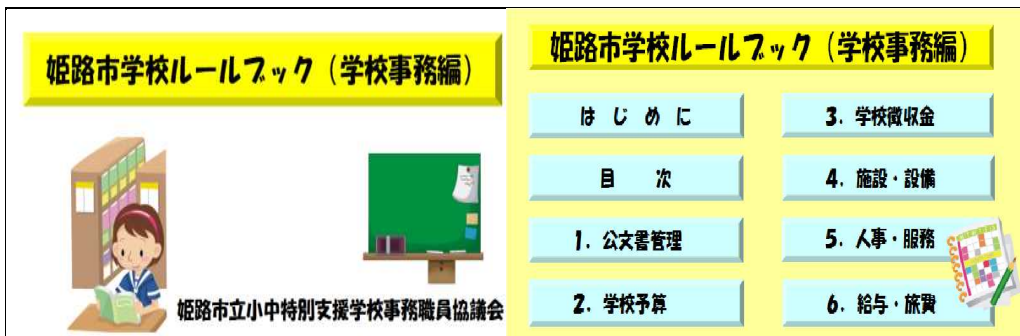
姫路市全体での学校事務のルールをまとめた「姫路市学校ルールブック（学校事務編）」は、市教育委員会のポータルサイトに掲載することで、姫路市の教職員が、誰でも自由に必要に応じて、サービス・給与等の資料や手続きを閲覧・利用できる。

市全体で学校事務の標準化が進み、学校異動時の教職員の負担軽減につながる。
各学校が個別に作成してきた、サービス・給与・文書管理・学校予算等の教職員向け資料作成のための時間が大幅に短縮される。

事務負担の軽減と経費の節約にもつながる。

事務処理のルールを標準化することにより、姫路市全体のコンプライアンスの向上につながる。

教職員は、このルールブックを利用することによって、姫路における文書管理や学校予算などの事務処理ルールをいつでも確認したり給与やサービス等の知りたい情報の概要を事前に調べることが可能になる。まず、教職員へ基本の情報を提供し、次の段階の個人の適正な事務処理につなげる。各自の校務用パソコンのデスクトップに貼付しての利用、また「公文書リンクファイル」の画面からも市のポータルサイト「業務カイゼンの広場」にリンクすることで、利用しやすい環境となるよう工夫している。



ウ 学校事務職員サイト「ぴあっつぁ」IMU

「ぴあっつぁ」はイタリア語で「広場」を意味し「ぴあっつぁ」IMUは、「事務の広場」という意味になる。市教育委員会ポータルサイトの学校事務職員サイトにある【みんなが気軽に集まれる広場】には、県の通知文や各種手当認定マニュアル、給与等のワンポイントアドバイスを集約した資料集コーナーや、県教育委員会や市教育委員会の様式集、協議会作成の学校事務システム、学校予算支援システム、備品管理システム、公文書リンクファイル等ここを覗けば、事務職員にとって参考になることや解決するヒントがあり、事務職員の業務改善のためのサイトである。市内教職員誰でも見ることができ活用できるため、勤務時間適正化検討会で紹介をしている。



トがあり、事務職員の業務改善のためのサイトである。市内教職員誰でも見ることができ活用できるため、勤務時間適正化検討会で紹介をしている。

エ 「備品管理システム」の活用

以前市内の学校では、市教育委員会から配信される備品リストを使用していたが、庁内共通のため教科や保管場所の項目がなく、学校現場では利用しにくい仕様となっていた。そのため現在は、学校現場で使用しやすいように、協議会が学校用に開発した「備品管理システム」を活用している。備品管理システムでは、教科や保管場所ごとの一覧表が即時に作成でき各校で教科担当者が行う備品点検も大変しやすくなった。このシステムでは、

- ・何が、どこに、いくつあるか。
- ・有効活用されているか、使用できる状態か。
- ・新たに何が必要か、不要なものを置いていないか。

等が容易に把握でき、教授活動をより円滑に行うことができる。学校によっては、棟番号や部屋番号を決定し、年度によって変更になる教室や特別教室も備品システムとリンクすることによって管理しやすく工夫している。

児童生徒の学びをより深める手段の一つとして、「備品管理システム」を活用し効果的・効率的な備品管理を行うことにより、備品の有効活用を図り、業務改善につなげている。

オ 「学校事務指導票」の完全電子化

協議会では以前から、「総務」「学務」「人事」「財務」「経理」の分野ごとにそれぞれの単位事務が、いつ、誰が（校長、教頭、事務職員、担当者）どのような流れでどの書類を作成し処理するかをまとめた「学校事務指導票」を活用してきた。目まぐるしく変化する事務処理の対応にそれまでは紙媒体で修正し、業者に依頼し、加除修正をしてきたが、必要な時に最新の内容を確認するには時間のずれがあり以前からの課題であった。今年度、完全電子化が完成し、市教育委員会の「ぴあっつぁ」IMU」の中に掲載された。変更になった箇所については事前に播磨西教育事務所に確認し修正するため、学校と市教委、県教委が同じ内容を確認することができる。



学校事務指導票			分類番号	人-101		
大分類	総務	単位事務	記号説明			
中分類	人事	採用	○⇒作業	◎⇒点検・決裁		
小分類	人事		□⇒合議	△⇒保管・管理		
			⇒⇒送付			
処理期間	要件発生の都度		担当者			
ステップ	作業	処理方法及び関係係票	校長	教頭	事務職員	担当者
						(本人)
1	提示	人事通知書を提示する。				○
2	確認	人事通知書を確認する。	◎	◎	◎	
3	書類作成	[3]の書類を作成する。				○
4	受理確認	内容を確認する。	◎	◎	◎	
5	発送	着任届を姫路市教育委員会(教職員課)へ送付する。				◎
6	保管	1 人事通知書の(写)をファイル(人-0-2)につづる。 2 履歴書をファイル(人-0-3)につづる。(臨時的任用教職員等) 3 教員免許状管理簿をファイル(人-0-3-3)につづる。 4 着任届をファイル(人-1-6)につづる。				△

2 取組の成果

(1) 「備品管理システム」活用の成果

- ア 毎年行う備品点検において、品名・数量・保管場所の確認や、使用の状況や保管状況の確認、廃棄備品がわかりやすい。4月の予算委員会では、各担当者からの希望備品の選定にも活用することで、児童生徒に年度の早い段階で有効な備品を購入し活用できる。
- イ 姫路市内すべての学校で同じ備品管理システムを使用することにより、教職員はどの学校においても同じ仕様の備品リストと現物の照合確認ができ、適正な備品管理が実現している。

(2) 「学校事務指導票」完全電子化活用の成果

- ア 長年使用していた「学校事務指導票」(紙仕様)は、制度や内容・手順が変更のたびに修正し、業者に依頼し追録費用を公費で支払っていた。常に加除修正の作業があり、印刷発注と納品に時間がかかっていた。そこで数年前から徐々に電子化に取りかかり、編集部担当者と共に、全協議会会員に“打ち人募集”の声をかけて、毎年何人かの若手からベテランまでの数人が加わり電子化を進めてきた。協議会の大切な財産である学校事務指導票の電子化に協議会全体で取り組めたことは、会員の意識向上につながった。電子化はようやく今年度完成し、すべての分野において、以前よりタイムリーに、各学校から簡単に活用できることとなった。
- イ 事務職員にとっては、以前から修正のために作成していたデータをそのまま電子化利用することによって、時間及び金額負担の解消ができた。

3 課題及び今後の取組の方向

協議会活動において様々な業務改善を推進していく中で、市教育委員会と情報交換を行い、課題や問題点を共有してきた。そして今では市内すべての学校で、協議会が改善したシステムが軌道に乗り活用が進んでいる状況にある。新採用者や市外からの転入者に対しては各学校の事務職員から、年度初めの職員会議で周知徹底を図っている。事務職員は1校1名が基本であるため、1校でも周知できていない学校があると、市内で同一步調を図ることはできない。学校間格差解消と学校事務啓発のためには、職員の異動時及び機器更新時におけるコンピュータのデスクトップ画面への再度の貼り付けが必要であり、各校での事務職員の継続した取組が不可欠である。維持管理と職員への利用啓発に各事務職員の自覚と努力がもめられる。

また、今後進めていく共同学校事務については、協議会の取組をもとに、市内学校間の情報交換、課題共有を行い、学校事務の標準化に向けて事務処理の適正化・効率化を図るうえで、市教育委員会と情報を共有し取り組んでいく。

本校は今年度、姫路市で3校目の義務教育学校として開校した。4月からコロナ禍の長期休業等変則的な状況の中で、市内初めての施設一体型の学校としてスタートし、1年生から9年生が同じ学校で学習をする環境にある。学校運営協議会の一人として会議に参加する中で、地域・保護者の方々が、学校に寄り添い、期待し、協力してくださっていることを強く感じた。私たちは各学校での取組は勿論、協議会活動の取組の中で、事務職員だからこそできる発想から改善につなげ、今後も児童生徒や姫路市内全体の地域・保護者のために、日々取り組みを継続していきたいと考えている。

自分の思いや考えを伝えるための表現力の育成をめざした国語科教育

～ 目的や意図に応じて資料の活用を取り入れて～

たつの市立小宅小学校
教諭 柿本 亜津子

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

本校は、「気づく・伝える・深め合う」を研修テーマとし、校内研究に取り組んでいる。中でも、すべての教科学習において基本となる国語科を学習するうえで、実生活で生かしていける言語活動（話す・聞く・書く・読む能力）をつけることが大切である。そして、本校児童は、自分の意見を全体に広げたり、思いを伝えたりすることに抵抗を感じていることが多い。そこで本年度は、「表現力を育成すること」を中心に様々な実践に取り組んできた。「表現力」といっても、国語科においては、作文などを書く、発表や交流を通しての話す、図を使ったり新聞を書いてまとめたりするなど様々な方法がある。その場に応じた表現の仕方を工夫しながら、自分の考えを広げたり伝えたりする様々な表現力の育成を取り入れた実践を行った。

(2) 「活用・表現力」に着目した授業研究

今、小学校においては、目的や意図に応じ、必要な情報をもとに自分の考えをまとめることが課題であると言われている。そのために、目的や意図に応じて複数の資料を用いて、自分の考えを表現する力をつけていかなければいけない。書く活動においては、ただ感想を書くというだけではなく、キーワードを指定したり、文字数を指定したりして何らかの条件を用いて書かせることが大切である。読む活動においても、ただ読ませるのではなく、観点をしっかりと決めて読ませることが大切である。そして、最終的には、自分の考えをもつ、また筆者の考えと比べられるとさらによくなる。

また、教科書を読むだけではなく、教科書以外にどのような資料を取り入れていくのかということも重要になってくる。様々な資料を取り入れ、それを時と場合に応じて活用できるような児童を育てていく。そのためには、どのような場合でも、語彙力をつけていくことが大切である。そのために、子ども達に言葉のシャワーをあびさせ、身近なところから語彙を増やしていくことも必要だと考えられている。

(3) 自ら学ぶ意欲を高める授業作り

音読力を高めるためには、毎日の音読練習を通して、文章の中での語のまとまりや言葉の響きに意識しながら音読する。また、物語の内容を読み取っていくには、大切な言葉を落とさずに読み、登場人物の会話文や様子が書かれている文章から様子や気持ちを読み取ることが大切である。さらにその言葉の裏に隠された気持ちまで読み取っていく事が必要である。そのために気持ちが書かれている部分に線を引かせ、その部分に着目させながら音読練習をするよう取り組んでいる。

書く活動においては、毎日の日記を書くことで、子どもたちは書くことへの抵抗が

少しずつなくなり、自分の思いや考えを文章に表すことができるようになる。毎時間学習の終わりには、ふりかえりとして書く活動を取り入れるようにし、本時の学習の内容を自分の言葉でまとめる活動をした。また、物語文では、吹き出しを使って登場人物の心情の移り変わりを読み取って書いたり、日記形式にして登場人物の立場に立って日記を書いたりして、物語を読み深めていくようにした。

また、物語の挿絵を見ながら場面の様子や登場人物の気持ちを想像することは、何もない状態で物語の世界をイメージするよりも子供たちにとっては、世界が広がる。そこで、学習の導入や振り返りをするとき、物語の世界を想像しやすくするための一つの手がかりとして挿絵を活用した。また、中心発問と挿絵を結びつけながら想像を広げさせるために効果的に活用していった。

2 取組の成果

(1) 文を書く(語彙を増やす取り組み)

意味調べ 文作り

国語科では、言葉を多く知ること、そしてその言葉を正しく活用できる事が大切である。授業開始の数分を利用して、これからの学習で出てくる言葉を1時間に1個意味調べさせる。そして、8個調べたあとで、調べた言葉を使って話づくりをしている。教科書の言葉の宝箱も参考にして語彙を増やしている。言葉うまく文章に取り入れられない児童も多いので、例文も参考に書くようにしている。

詩を作る

季節ごと(春夏秋冬・新年、修学旅行、卒業)に短歌や俳句を作る。またその詩のイメージも書かせている。書けたらクラスで読み合っ、自分のお気に入りの一句を選ばせ、その句について自分なりの考えを書くようにしている。

初めは、自分のお気に入りの句を選ぶことすらできなかった児童が、何度か学習を繰り返すことによって、自分の考えがスムーズに書けるようになってきた。また、友だちの作品を読み合うことで、様々な表現の工夫を見つけたり真似したりする児童も出てき、表現が豊かになった気がする。

新聞活用(コラム・ワークシート)

季節の話題や教科書の内容に沿ったものがあれば、新聞記事を活用して文章や資料から読みとり、自分の考えを書く。そして、通信で知らせて読むことで、自分の考えと友だちの考えを比べたり、様々な考えを共有したりする。また、週に一度ワークシートを活用して、学習に取り組んでいる。新聞を読む習慣のない児童もいるので活字に触れるいい機会であると思う。また、時事問題など楽しみにしている児童も見られる。初めは、読むスピードが遅かった児童も回数を重ねる度に読むスピードも速くなってきた。



<つまずきポイント指導事例集(中学版):ことのはプリント参照>



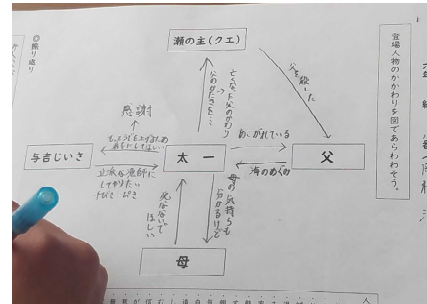
<コラム>

<俳句>

(2) まとめる(6年:「海の命」光村図書)

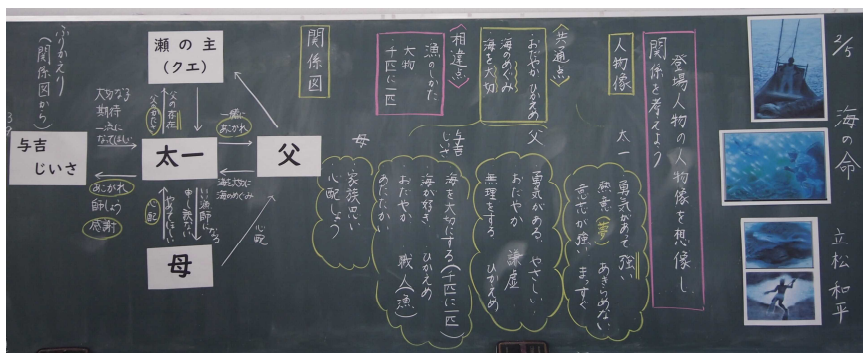
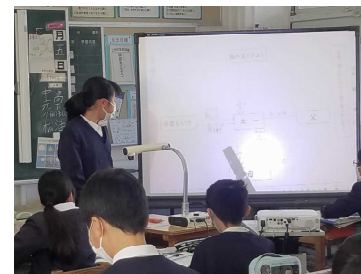
登場人物を関係図で表す

以前「やまなし」の学習時に登場人物の関係を絵に表し学習を進めていった。本文からだけでは、なかなかイメージがつかみにくい児童も絵や図に表すことによって登場人物の関係や情景を読み取ることができた。本授業では、登場人物(太一、父、母、与吉じいさ、瀬の主)の関係図を元にしながら、ペアやグループで人物の関係



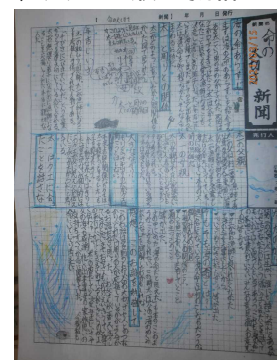
図示して発表

性について伝え合った。教材提示装置を使って全体に伝えるという発表形式にした。伝え合うときには、どうしてその関係が成り立つのか、文章の内容から読み取り理由付けをしながら伝えることで、内容把握を見とることができる。また、相手に伝わるように図示した内容をわかりやすく自分の言葉で相手に伝えていった。



登場人物の批評文を書く

批評文とは、登場人物の生き方から自分にとっての価値を見出し、それについて自分の考えを書いた文章である。登場人物の批評文を書くことで、人物を客観的に見つめ直し、自分の考えを表現することにつながる。父、母、与吉じいさ、太一の順で批評を書き進めていった。はじめは、人物像についての内容しか書けなかった児童も、書き進めていくうちに、その人物の生き方や考え方が書けるようになっていった。また、生き方や考え方に対する自分の考えも書けるようになっていった。太一の批評文では、太一と自分を重ね自分の生き方と比較して書いている児童も多かった。



それぞれの生き方について新聞にまとめる

学習のまとめとして、命や生き方をテーマとして新聞にまとめ

ていった。あらすじを書いたり、登場人物の関係図を書いたり、批評文の一文を書きぬいてまとめる児童もいた。登場人物の関わりやそれぞれの人物の生き方などが新聞を通して、様々な角度からまとめることができる。新聞にまとめる活動は「表現力」の一つの方法でもあると考える。また、社会の歴史新聞や総合学習のまとめなど、他教科と関連させて、取り組めた。

(3) 交流する、伝え合い(6年:「やまなし」光村図書)

並行読書

「イーハトーヴの夢」を重ねて読むことで、宮沢賢治の世界観を感じ取る

この2つを重ねて読むことで、作品の世界と作者の生き方、考え方を捉えながら、自分の考えを深めていく学習が展開できる。川の中での様子を幻灯で映し出し、造語などの独創的表現、擬態語・擬声語など作者自身の内面を映し出した作品でもあり、作者を意識しながら読むことができる。さらに、「イーハトーヴの夢」は、賢治の自然を愛する心や自分のことよりも人のために尽力を尽くした生き方が簡潔に描かれており、作品を通して賢治が表現したかったことがつかめる資料である。

題名「やまなし」について考え、交流する

かわせみとやまなしは対比できる関係であるのに、なぜ「やまなし」という題名をつけたのか考えさせる。また、別の題名であった場合の印象を考えることにより、より深く題名の意味を考えさせる。さらに自分が考えたことや話し合ったことをもとに題名「やまなし」について自分の考えをまとめさせる。

読書会を開き感想を交流する

「やまなし」を学習した後に、宮沢賢治が書いた作品を読み、同じ作品を読んだ児童が集まり、内容や感想を伝え合ったり、「やまなし」と比べて、作品の共通点や相違点を見つけたりしながら話し合いを広げていった。

3 課題及び今後の取組の方向

自分の思いや考えを言葉にすること(表現すること)は、なかなか難しいことである。しかし、本来子どもたちは、話したい、伝えたいことがいっぱいあると思う。その思いを正しい言葉で順序だてて話をしたり、うまく伝えられたりした時の喜びは、何とも言えないものだと思う。しかし、言葉を知らなければ、自分の考えや思いを伝えられるはずがない。「やまなし」「海の命」の二つの実践より、登場人物の相互関係や個々の心情を読み取りながら、常に登場人物の生き方や考え方に対して自分の考えをもたせて学習を進めてきた。また、自分の生き方や考え方と比べたり、これからどのように生きていくのかなど、自分ごととして考えさせたりしながら、自分なりの言葉で表現させていきたい。今後、さらに表現力を高めていくためにも、書くこと・話すことを中心に様々な方法を見つけ、子ども達が自信をもって表現できる方法を身につけさせていきたい。どんなときにも、自分の考えをもち表現できる、また、学習したことが実生活で生かせる生きた言語活動ができる児童を育てていきたい。

情報活用能力の育成に向けたプログラミング教育の推進

太子町立石海小学校

教諭 入江 賢一

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

本校は、2019年度から「兵庫県版プログラミング教育スタートパック構築事業」の実践校の指定を受け、プログラミング教育の先行的実践を推進した。2020年度は、前年度の取組を継続しながら、全面実施された新学習指導要領にもとづき、プログラミング教育の授業研究を実施した。そして、プログラミング教育の推進とともに情報活用能力の育成に取り組んだ。

(2) 校内研修の推進

プログラミング教育については、初めての取組であり、「何から始めようか。」「何をしたらいいの。」という状態からのスタートであった。また、「一体どんな授業をしたらよいのだろう。」「難しそうだ。」という声を聞いた。そこで、教員の不安感や苦手意識を解消するため、体験を重視しながら校内研修を進めていった。

石海小学校でのプログラミング教育の推進

全体研修「プログラミング教育って何？」

ミニ研修「やってみよう！プログラミング」

プログラミング教育の授業実践（各学年）

次年度への引継ぎ（各授業者）

2019年度 太子町立石海小学校

資料1

資料1は、実践指定を受けた初年度の校内研修推進のイメージである。まず、県立教育研修所の出前講座を活用し、「プログラミング教育って何？」というテーマで全体研修を行った。次に、ミニ研修として希望者のみで操作体験の研修を行った。全体研修では、プログラミング教育のねらいについて学び、「Scratch」の操作体験をした。プログラミング教育のイメージを学校全体で共有することが目的である。ミニ研修では、ライントレース型ロボット「Ozobot」やビジュアルプログラミング言語「Viscuit」の操作体験を行った。ミニ研修は、全員参加ではなく、ちょっと知っているという教員が、ちょっとやってみたいという教員に伝えるのがポイントである。

(3) 授業実践

ア Ozobot で行うプログラミング教育（3年 社会科）

Ozobot は、ライントレース型の小型ロボットである。2020年度は、前年度の実践をふまえ、社会科の学習と関連させてプログラミング教育を行った。本学習の内容は、子どもたちが意図した道順でロボットが地図上を移動できるようプログラ

ムを作成するというものである。制約条件として、自分たちが決めた2地点を経由すること、同じ道は通らないこと、という2つを設定した。子どもたちがゴールまでの過程を組み立てる、試行錯誤するというプログラミング的思考を促すためには、制約条件の設定は重要である。また、ロボットが1台あるだけで、自然と子どもたちの間に対話が生まれ、トライアルとエラーをくり返しながらか試行錯誤する姿が見られた。さらに、地図を読み取ることや地図を使って案内することなど、教科の学習内容を深めることができた。【写真1】



写真1

イ Viscuit で行うプログラミング教育（3年 C分類）

Viscuit を使用したプログラミング教育の授業を行うにあたり、デスクトップ型PCの操作経験がない児童がほとんどであったため、コンピュータの起動方法やマウス操作について指導するところからスタートした。本学習では、自分が描いた絵が思い通りに動くよう、試行錯誤し、意図した動きを表すことができるというのが目標である。

今回の実践では、国語科「きつつきの商売」の学習を発展させ、秋のぶなの森に響く音をイメージして描いた絵を意図した通りに動かすという学習を行った。音が響く様子を自分がイメージした通りにアニメーションで表現できるよう、何が音を出しているのか、また、それをどのように動かしたいのか考えさせたり、動かす方（向き、速さ）について試行錯誤させたりした。どのように動かしたいかというイメージを事前にワークシートに記入させ、明確にもたせていたため、集中して作品作りに取り組み、意図した動きを友だちに紹介することもできた。【写真2・3】

また、子どもたちに本時の学習の進め方をフローチャートで示した。【写真4】学習をどのように進めていくのかということや、手順を明確に示しておくことは、主体的に学習させるために重要である。また、作品を紹介し合うことで、自分の意図を明確にしたり、互いの考えの良さを交流し合ったりすることができ、子どもたちは、自身の学習の成果を振り返ることができた。



写真2



写真3

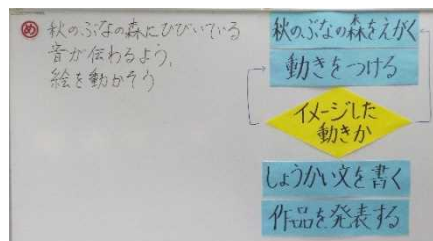


写真4

（4）情報活用スキルの向上のために

教科等の学習を通じて、キーボードによる文字入力やインターネットの活用など、コンピュータの基本的な操作や情報収集等の方法を習得させることを意識して指導

を進めた。例えば、1人1台端末が導入された際には、キーボードでの文字入力ができることはたいへん重要である。3年生で学習するローマ字を習得させ、キーボード入力ができるようにするためには、タイピングトレーニングを行う時間が必要である。3年生では、ローマ字を学習した後、コンピュータを使用したタイピングトレーニングだけでなく、市販ドリルに付属のキーボード下敷きでもタイピングトレーニングを行うようにした。



写真5

また、子どもたちが情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を発信・伝達したりできるように、各教科等の指導の中で情報手段を適切に活用できるようにする学習活動も大切である。付箋や思考ツール、簡易ホワイトボード等を使って、情報を比較したり、分類したりする学習もその一つである。【写真5・6】今後は、このような学習活動を1人1台の端末でも行うことができるようになるのである。



写真6

(5) 情報教育指導計画の見直し

系統的に情報活用能力を育成するためには、各教科等の年間指導計画と関連させながら、情報教育指導計画を見直す必要がある。子どもたちがこれまで扱っていた端末は、デスクトップ型PC、タブレット型PCの2種類である。ここに2020年度、GIGAスクール構想により1人1台端末が整備され、Chromebookが導入された。扱う端末により、起動の方法、マウスによる操作、タッチパネルによる操作等、それぞれに基本操作として身に付けさせなければならないことが異なる。また、学習経験や家庭環境により、コンピュータを扱った経験にも違いがあり、操作スキルの差が大きい。そこで、「情報活用能力の体系表例全体版」(文科省)を参考に、学年に応じた指導内容を確認した。また、「クリック」「タップ」「ドラッグ」等の言葉を教師と子どもとの間での共通の学習用語として、正しく使うことも確認した。

しかし、新学習指導要領の実施に伴い、教科書の内容も改訂されているため、学校として完全に指導計画を見直すことができていない。さらに、1人1台のChromebookをどのように活用していくかもこれからの課題である。各教科等の年間指導計画と関連させて情報教育の指導計画を改善していくこと、カリキュラム・マネジメントの必要性を強く感じている。

2 取組の成果

(1) 職員研修の活性化

プログラミング教育を進めていくことやコンピュータ等の操作について、不安感や苦手意識を抱いていた教員が、指導の見通しをもち授業の準備や実践に取り組むことができるようになった。全体研修で招聘した外部講師から情報活用能力の育成やプログラミング教育についての考え方を学び、教員がそれを共有したことで、共通理解が

進み,さらに,教員自身が体験を通して学んだことが成果につながったと考える。

資料2は,ミニ研修や全体研修を通して体験したことを生かし,教員同士で試行錯誤しながら授業づくりを行っている様子である。「どんな授業をすればよいのか」からスタートした取組が,「授業でのどのような力をつけることができるか」ということを議論できるようになり,授業の質が高まったといえる。



資料2

(2) プログラミング教育年間指導計画の作成

資料3は,本校におけるプログラミング教育の年間指導計画である。1年から6年までの全ての学年でプログラミング教育を行うことができるよう,教育課程を編成することができた。今後は,実践の継続と検証を重ねながら,授業改善を行っていく必要がある。また,系統的に指導を行うことで,子どもたちの資質・能力の高まりも期待できる。教育課程全体を見ながら,指導計画を見直していくことも必要である。

2020年度 石海小学校プログラミング教育年間計画及び校内研修計画表											
1学期			2学期					3学期			
	4-5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年							C分類(3時間)基本操作を身に付けよう Viscuit	C分類(2時間)プログラミングってなあに Viscuit			
2年						音楽(1時間)くりかえしをつかってリズムをつくらう アンブラグド					
3年		C分類(2時間)基本操作を身に付けよう Ozobot	社会(1時間)わたしたちの住んでいるところ Ozobot			C分類(2時間)基本操作を身に付けよう Viscuit	C分類(2時間)やってみようプログラミング Viscuit				
4年	臨時休業								C分類(1時間)基本操作を身に付けよう Scratch	音楽(1時間)日本の音楽でつながろう Scratch	
5年						家庭科(2時間)食べて元気に アンブラグド	C分類(2時間)基本操作を身に付けよう Scratch	算数(1時間)円と正多角形 Scratch			
6年								C分類(3時間)基本操作を身に付けよう LEGO WeDo		理科(2時間)発電と電気の利用 LEGO WeDo	
クラブ活動等	パソコンクラブ(4-6年 36名対象)										
校内研修							プログラミング教育研修 LEGO WeDo 講師:情報教務専門推進員				

資料3

3 課題及び今後の取組の方向

わたしたち教員は,2030年の社会をイメージし,その時代に必要な力を身に付けさせるための教育を行っていかなければならない。そして,道具の活用や方法論のみを考えるのではなく,子どもたちに身に付けさせたい力はどんな力か,何ができるようになればよいのか,子どもたちの現在も大切にしながら,生涯にわたって活用できる汎用的な力を身に付けさせる授業づくりをしていきたい。

「自ら学び続ける児童の育成をめざして」

丹波市立青垣小学校
主幹教諭 荻野由香里

1 取組の内容・方法

令和2年度がスタートしてまもなく、新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う臨時休業の措置がとられた。長引く臨時休業の中でも、児童とのつながりを持ち、学習意欲を低下させず、学習を保障することが大きな課題となった。丹波市では、令和2年5月に臨時休業中の学びを止めないため、長期化する自宅での自学自習において、児童が自律的に取り組める予習型のワークシートや動画等の作成を目的とした丹波市予習型教材作成チームがつくられた。その際、小学校国語部会のメンバーとして参加し、児童が進んで家庭学習できるような教材を作成して丹波市内の小学校に提供することができた。

また、令和2年度丹波市教育委員会主催の初任者研修において、「子どもたちが輝く言葉がけ・授業づくり」をテーマに5年生国語の授業公開をし、講話を行う機会をいただいた。授業や講話を通して、児童が意欲的に取り組むために自分が大切にしてきたことを見直し、初任者の先生方に伝えることができた。

(1) 児童が進んで取り組める予習型教材の作成

予習型教材作成にあたって

予習型教材作成チーム小学校国語部会は8名で構成された。第1回目の会議では、各校の休校中の取組を交流し、現状における課題をはっきりさせた。各校とも、漢字や言語事項の家庭学習については、ドリルやプリント等を活用しながら家庭学習を進めていたが、物語文や説明文教材については、学校で基本事項を教えたり、自分の考えを持った上で友だちと交流しながら深めたりする学習ができない中、どのように家庭学習を進められるのかという悩みが多かった。そこで、5月当初に読解の基礎として学習する説明文教材についての予習型教材を作成することにした。

学年	教材名（東京書籍）	言葉の力
1年	さとうとしお	事柄の順序などに気をつけて、内容の大体をとらえる。
2年	たんぼぼ	説明の順序をとらえる。
3年	自然のかくし絵	段落の内容をとらえる。
4年	ヤドカリとイソギンチャク	文章のまとまりをとらえる。
5年	動物たちが教えてくれる海の中の暮らし	要旨をとらえる。
6年	イースター島にはなぜ森林がないのか	論の進め方をとらえる。

作成するには、単元で必要な力をつけるための学習活動を考え、「つかむ」「取り組む」「ふり返る」の3段階で学習が進むようにワークシートを作成すること、家庭での自学が進むように、内容によっては考え方のアドバイスを入れたり、解説動画を加えたりすることを決めた。家庭での自学であっても、自分の学びをふり返ってできたことが実感できる主体性や、登校した時に授業で活かし、友だちとの交流によって深い学びにつながるような予習型教材にすることを話し合った。

3年生「自然のかくし絵」(東京書籍)の教材作成

私が担当した3年生教材「自然のかくし絵」では、学習内容を考えて7枚のワークシートを作成した。また、児童の学びの手引きとして有効であると考えた内容については動画を作成した。

学習段階	学習のめあて	動画
つかむ	「自然のかくし絵」が、どんなものなのか考えながら、教科書を読もう!	・教材の範読
	知っておきたい言葉をたしかめ、「自然のかくし絵」にくわしくなろう!	
取り組む	ほご色とは何かをはっきりさせよう!	・だん落の意味 ・だじな言葉の見つけ方
	コノハチョウの身のかくし方をはっきりさせよう!	・「問い」と「答え」の関係
	トノサマバッタとゴマダラチョウのよう虫の身のかくし方をはっきりさせよう!	・読み取りの手がかり
ふり返	ほご色がどんな場合でも役に立つのかをはっきりさせよう!	・「問い」と「答え」の関係 ・読み取りの手がかり
	ほご色がどれほど役立つものなのかをはっきりさせ、「自然のかくし絵」について感そつをまとめよう!	

④ コノハチョウの羽のうらみ、かかれまのよう色、水の色と似たときの形、かかれまを見分けがつかない

コノハチョウは、

③ ほご色とは何かをはっきりさせよう!

② だん落の意味、だじな言葉の見つけ方

① 自然のかくし絵が、どんなものなのか考えながら、教科書を読もう!

⑩ 一日のさきま、た時間だけ活動、ほかの時間はじっと休む、休む場所の異なるかきりた色、身をかくすのに役立つ

⑨ 人間の目と同じくらい、鳥やトカゲが色を見分けられる、人間の目をなますのと同じくらい、身をかくすのに役立つ

⑧ 人間の目と同じくらい、鳥やトカゲが色を見分けられる、人間の目をなますのと同じくらい、身をかくすのに役立つ

⑦ 人間の目と同じくらい、鳥やトカゲが色を見分けられる、人間の目をなますのと同じくらい、身をかくすのに役立つ

⑥ 人間の目と同じくらい、鳥やトカゲが色を見分けられる、人間の目をなますのと同じくらい、身をかくすのに役立つ

⑤ 人間の目と同じくらい、鳥やトカゲが色を見分けられる、人間の目をなますのと同じくらい、身をかくすのに役立つ

〔動画のQRコードをつけた予習型ワークシート〕

授業での活用

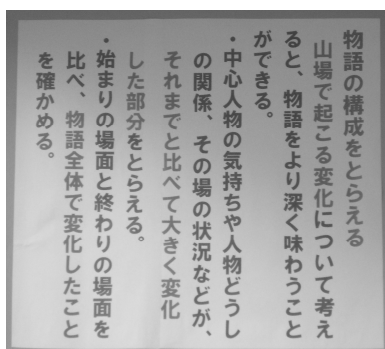
実際に5、6年生国語の授業で、予習型教材作成チームで作成した教材を活用した。ワークシートは児童が自学できることを考え、わかりやすくめあてが絞られているので、予習として児童が一人でも進められる内容であった。ワークシートをもとに予習してきたことを授業で活用することにより学習が確かなものになり、友だちと交流することで考えを深めることができた。単元で身につける力をはっきりさせ、指導内容を整理して作成されているので、学校再開後の限られた時間内で授業を進めるために大変役立った。

(2) 子どもたちが輝く言葉がけ・授業づくり

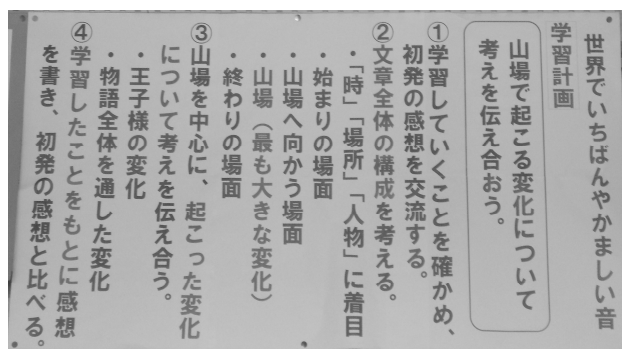
初任者研修では、先生方が実践される時の参考になるように、授業づくりの考え方や児童に力をつけるための支援を具体的に示したいと考えた。公開授業では、5年生国語「山場で起こる変化について考えを伝え合おう～世界でいちばんやかましい音～」を參觀していただき、単元構成や授業づくりで大切にしていることについて講話した。

単元のねらいをはっきり持つ

単元構成を考える時には、その単元でつけたい力をはっきりさせてから、学習計画を立てる。教科書には単元ごとに大切な言葉の力が示されているので、それをもとにして、単元のはじめに児童と一緒に確認し、その力をつけるための学習計画を立てていく。国語の物語文や説明文教材では、単元指導計画が10時間近くなるような長い単元になるので、ゴールをはっきりさせることで、児童に学習の見通しを持たせることを大切にしている。



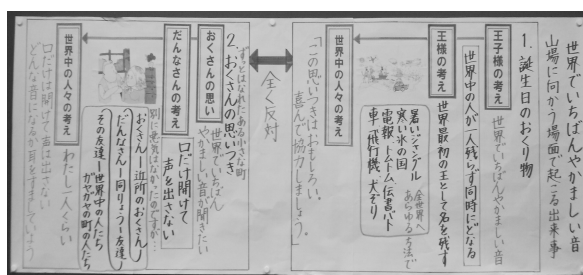
〔単元でつける言葉の力〕



〔単元学習計画〕

支援の手立てを考える

児童が意欲的に学習に取り組めるための支援には様々なものがあると考えられる。児童の実態や教材の魅力に合った学習課題の設定、気づきを深めるための発問、児童の考えを整理した板書、学習したことを確かめることができる学習のあしあと等は重要である。



〔学習のあしあと〕

また、児童を認める評価言も大きな支援であると考え。評価言にも励ます、価値づける、深める、整理する、つなぐ等、場面に応じて考えることができる。その場で児童に伝える言葉は効果的であるが、ワークシートやノートへのコメントも児童にとってはやる気につながるものになる。また、児童にとって、友だちに認めてもらうことも大きな自信につながる。児童同士で認め合える場面も授業の中で意識的に取り入れたいと考えている。

学びをふり返る

児童が自分自身の学びをふり返り、できるようになったことやこれから頑張りたいことを確かめるための活動も大切にしている。「登場人物の言葉や行動を比べることで、山場の前後に起きた変化がよくわかった。」「山場に向かうしかけもおもしろかった。別の物語でも山場が見つけられそうだ。」等、学習のめあてに沿っており、次の学習や生活につながるようにふり返ることで、自分の力を確かめる力につながるのではないかと考える。

2 取組の成果

予習型教材については、丹波市内の学校で課題となっていた説明文教材の自学自習の進め方について、参考になるものが作成できたと思う。また、めあての明確化や児童の主体性や思考力、判断力を培うことを考えた教材作成の過程は、単元構成や1時間の授業を考える上での学びになった。

初任者研修での授業公開や講話については、初任者の先生から以下のような感想をいただいた。先生方にとって児童生徒のための授業づくりに役立ててもらえればうれしく思う。

- 言葉がけだけでなく、板書の方法の勉強にもなりました。児童が落ち着いて考えられていたのは、温かい声かけ、肯定的な声かけがあったからだと思います。まねをしていきたいと同時に、もっと教材研究をしないといけないと思いました。
- 多くの声かけがあり、その種類も様々で明日から使ってみたい、実践したいことが見つかりました。本の読み方、手の挙げ方、発表の仕方など、自分の課題も多く見つかりました。子どもたちが気持ちよく学習できる環境を整え、全員を認める声かけをしていきたいと思いました。
- 教師の言葉のかけ方一つで、児童の反応や理解にも変化があったように思います。

3 課題及び今後の取組の方向

児童が課題に興味を持ち、自ら進んで学習に取り組む自学自習の力をつけることは、新指導要領でめざす「主体的・対話的で深い学び」にとっても必要であると考え。今年度作成した予習型教材作成の考え方が、他の単元や教科でも活かせるようにしていきたい。また、児童が学びに自信をもって意欲を高めることができるように、日々の授業づくりにも取り組み、研鑽を積んでいきたい。

地域と連携し、主体的に行動する児童を育成する防災カリキュラムの作成

南あわじ市立福良小学校
主幹教諭 浅井 裕治

1 取組の内容・方法

(1) 児童の発達段階に応じた系統的で体系化された防災教育カリキュラムの在り方

全教科での防災の視点を明確にしたカリキュラムと授業づくり。

- ・ 防災意識の継続と防災の基礎知識の習得を目的に全教科の単元にわたって防災に関わる教材・題材を既存の授業内で扱うことができるかを研究した。

防災関連事物を教材や題材として、授業内で扱う実践の展開。

- ・ 防災関連事物と関連を持たせた授業展開について可能な教科の研究を進めてきた。この研究をもとに授業実践を積み重ね、精選した。

、 を踏まえて防災教育の視点を取り入れた防災教育実践研究。

- ・ 防災教育の視点としてA、B、Cを設定した教科授業の展開。

視点(A) ... 指導要領の目標内容レベルで防災教育に関連するもの

〔社会科・理科・家庭科・体育科・道徳科・特別活動 等〕

視点(B) ... 指導要領の目標内容レベルではなく、教材・題材レベルで
関連するもの

国語科... 文章・資料写真を扱う

算数科... 災害に関連する問題

図工科... ポスター・新聞を扱う 等

視点(C) ... 活動レベルのもの

〔総合的な学習の時間・特別活動・自立活動 等〕

(2) 学校と地域家庭、関係機関が連携した防災教育カリキュラムの在り方

総合的な学習の時間を活用したカリキュラム作成

- ・ 教科学習(防災の視点を含む)関連させ、地域の「人」、「もの」、「こと」を活用して、課題解決に向けた活動を展開していく。

【探究課題】

3年生... 「福良のまち(ふしぎ)をさぐる」

4年生... 「大好き! 福良の人・まち・自然」

5年生... 「福良防災体制改善プロジェクト」

6年生... 「つながろう! つなげよう! 未来へ!」

地域・家庭・学校合同防災訓練の実施

- ・平成26年度から福良地区まちづくり協議会と協力して実施。福良地区自治会との打合せの後、自治会を通してチラシを全戸配布。

【交流を兼ねた防災学習】

平成28年度「兵庫県総合防災訓練」

平成29年度「舞子高校環境防災科による防災マップづくり」

平成30年度「人と防災未来センター研究員の講話」

令和元年度「東北ボランティア活動 報告会」

【炊出し訓練・防災食の試食】

- ・福良地区自治会女性部の炊出し訓練として実施。毎年、実施内容を検討しながらよりよいものへ改善しながら進めている。
- ・防災食の試食は、炊出し訓練の検討の成果が試食の反応として現れる。

【福良地区まちづくり協議会との連携 関連団体】

- ・自治会、大学関係者、県民局、市役所、商工会、消防団、学校。
- ・神戸大学大学院との連携...福良地区ジオラマを防災学習に活用。

【地域・家庭・学校合同防災訓練の様子】



<住民一次避難>



<防災食試食>



<一斉下校>

(3) 主体的に行動できる児童の育成をめざす防災教育カリキュラムの在り方

- (1)・(2)のカリキュラムの展開や訓練等で子どもが思考力・判断力・表現力を生かして危機想定力や危機管理力に繋げるとともに、主体的に取り組む態度や行動できる力を培う。

地域・家庭学校合同防災訓練

- ・避難行動や防災学習を通して、災害のことについて知り、災害を自分事として捉えられる機会とする。

園・小連携合同避難訓練

- ・地震発生時に身を守るための適切な行動をとることができる。
- ・大津波が想定される地震時に迅速に高台へ二次避難することができる。
- ・自分の命を自分で守るだけでなく、高学年児童については、避難行動用支援者である乳幼児などと共に安全に避難するための共助の意識を高める。

予告なしの避難訓練

- ・ 3学期に実施。3学期当初に児童朝会で全員に告知する。実施については、2月末までとし、時間は事前に告知しない。

マニュアルの周知徹底並びに検討。児童も教職員もその日の行動について振り返り、今後の有事に備える。

委員会活動での取組（生活委員会・児童会運営委員会）

- ・ 防災啓発ポスターの作成 ・ 防災標語づくり ・ あいさつ運動
- ・ 東北ボランティア活動への参加

学級活動を活用した防災啓発活動

- ・ 6年生による活動、5つの視点から防災カード「福良小学校防災二十五箇条」を作成。

2 取組の成果

（1）児童の意識の変容...主体的な判断と行動が取れるようになった。

- ・ アンケート結果においても災害時の基本的動作を取れるようになったことや自分たちの地域に対する知識の向上、家族と話し合いを持つことで家庭全体での災害に対する意識の向上にも繋がった。
- ・ 研究期間中に発生した大阪北部地震（H30.6.18）や紀伊水道での地震（H31.3.13）において、児童が自ら考え行動することができた。

【H29年度～R1年度 校内アンケートの結果から（5年生）】

質問内容	H29	H30	R1
・ 自分の地区の予想最大震度を知っている	20.0	59.2	80.0
・ 地震発生時取る行動	82.5	88.8	96.6
・ 家族との集合場所の確認	32.5	25.9	60.0
・ 非常時の備蓄はどこに	45.0	66.6	53.3
・ 防災イベントへの参加	25.0	11.1	53.3
・ 1.17に家族会議	20.0	29.6	30.0

（2）教師の意識の変容...カリキュラムマネジメントと防災スキルアップ

- ・ 今回の研究から教科カリキュラムを基にして防災の視点をどのように授業に組み入れ展開していくかを考えるとともに、訓練等での活動によって、防災に対する個人のスキルアップに繋がった。

（3）よりよい社会づくりへの連携強化...社会に開かれた教育課程の編成

- ・ 教科でのカリキュラムづくりから、総合的な学習の内容をマネジメントしつつ、クロスカリキュラムについても考え構成したことにより、地域の人材等の資源を活用することができた。

(4) 専門家との連携...新しい情報・知識の習得、適切な助言

- ・(一財)総合初等教育研究所参与 北 俊夫先生をはじめ、3年間、様々な関係機関の先生方からの研修等により、新学習指導要領や防災教育の在り方について等、多くの情報を得られる機会となった。

3 課題及び今後の取組の方向

(1) カリキュラムの見直し

- ・新学習指導要領実施に伴い、単元名や目標、内容等の見直しは実施しなければならない。また、本市においては国語科の教科書が変更となり、大幅な見直しを進めなければならない。また総合的な学習の時間については、既存のものを活用し、よりよい学習に繋げるために単元や学習内容の見直しについても地域との連携が不可欠である。今後、教職員のレベルアップに繋げていくためにも、それぞれが意識を持ってカリキュラムの改訂に取り組まなければならない。

(2) 教職員の資質向上

- ・今回の研究において、教職員の意識の向上とスキルアップには繋がったが、それでもまだ十分とは言えず、児童に対して防災教育を自分事として捉えられるようにするためには、教職員のさらなるレベルアップが必須である。訓練や授業においても自発的にできるようにする意識や防災教育の必要性を実感することが重要である。

(3) 防災教育コーディネーターの役割と防災教育の重要性

- ・3年間の研究課程において、地域との連携を図るには、地域と学校を結び付けるコーディネートを進める必要がある。防災教育担当者が進めてきたコーディネートを引継ぎ、改善し、よりよいものにしていくためには、防災教育担当者の役割を明確にすることや学校全体として地域との繋がりを持つことが重要である。自然災害が頻繁に起こっている現代では、今、自分の身を守るだけでなく、生涯教育としての防災教育が必要となってきた。子どもたちの未来に向けて、どんな場所でも自分の身を守ることや周囲の人を助けることなど、どのような場所においてもコミュニティを作っていけるような防災教育を進めていくことが求められている。

(4) 評価・検証について

- ・地域とともに進めてきた防災教育のカリキュラムについては、地域とともにPDCAサイクルを進めていく必要がある。プランニングから実践、実証、反省、改善を繰り返し替えていくことによって、活動が醸成され、よりよいものになっていく。また地域も学校も関わる人が変わっていくにつれ、捉え方や熱量が変化してくる。PDCAサイクルを構築することが、今後も継続できる防災教育の取組に繋がっていく。

生活科・総合的な学習を核とした教育活動の取組

淡路市立志筑小学校

主幹教諭 南 志乃婦

1 取り組みの内容・方法

平成29年3月末に、平成31年度生活科・総合的な学習研究協議会全国大会兵庫大会の会場校の一つが志筑小学校に決まった。そもそも、生活科・総合的な学習の時間を充実させるためにどこから始めたらいいのかわからない。全く手探りの状態から研究が始まった。その時の研修担当者として、研究推進委員の先生方と協力したり、他の2校の会場校の先生方と協議を重ねたりしながら、研究を進めていった。また、大学の先生にご指導を仰いだり、全国小学校生活科・総合的な学習研究協議会兵庫大会研究部長の先生にアドバイスをいただいたりして、研究を深める努力を続けた。

研究の足跡は、次の通りである。

<平成29年度>

生活科・総合的な学習研究協議会全国大会の過去の取組がどのようなものであったかを、資料から探っていった。夏休みには、先進的な取組を進めている奈良女子大学附属小学校を訪れ、生活科・総合的な学習の授業を参観した。授業参観後、参加した先生方と何から始めたらいいのか等、本校に必要な内容について話し合った。また、加古川で行われた兵庫県小学校教育研究会生活科・総合な学習部会夏季研修会に参加し、文部科学省視学官の渋谷先生、國學院大学の田村先生から新学習指導要領について教えていただいた。

秋に、全国大会（横浜大会）に参加し、授業や大会運営の様子をビデオや写真に記録し、持ち帰って全職員で共有した。自分たちが思う以上に全国大会のレベルが高いことに衝撃を受けた。年度末には、これから志筑小学校に必要と思われる「発言力」「見通しを持った学習の進め方」「探究的な学習」などの力をどのように捉え、どのようにそれらの力を付けていくかを話し合い、全職員で共通理解した。

<平成30年度>

前年度末に確認したことを、年度当初に異動してきた先生にも伝え、年度のカリキュラムを作成した。夏休みには、前年度と同様、奈良女子大学や兵庫県小学校教育研究会の部会に参加し、生活科・総合的な学習についての研修を進めた。また、甲南女子大学の村川先生にご指導いただき、全国大会の授業構想について全職員で話し合いを進めた。秋には、全国大会（石川大会）に参加し、授業や大会運営についてのノウハウなどを学んだ。また、全国大会のプレ大会を開催し、淡路地区の先生方に授業を公開した。まだまだ足りないところが確認できるなど、有意義なプレ大会となった。

<平成31年度>

いよいよ11月14日、15日に全国大会本番を迎えるということで、4月から村川先生をはじめ、関西福祉科学大学の馬野先生、武庫川女子大学の酒井先生にお越しいただいて、本校がめざす生活科・総合的な学習について、異動してきた先生方も交えて方向性を確認するなどの研修を行った。3年間の研究は「研究の概要」としてまとめ、大会冊子に掲載していただいた。次のページに、その一部を紹介したい。

研究主題

一人一人が主体的に探究する授業の創造

～地域から学び、ふるさとに心を寄せ続ける子どもたちを目指して～

主題設定の理由

<主題を設定するまでの経緯>

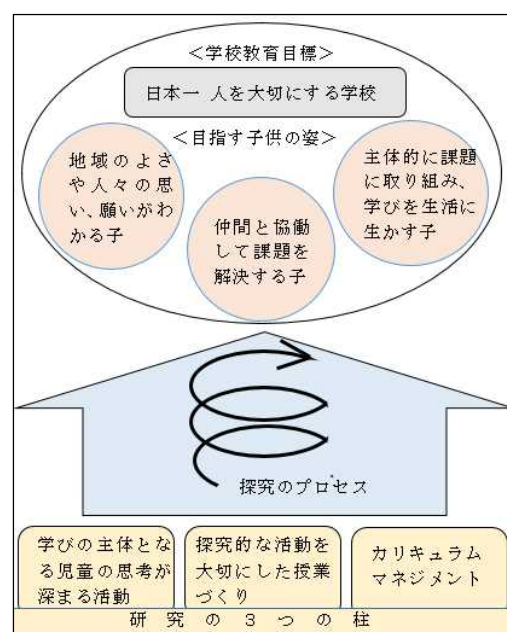
本校の教育目標は「日本一人を大切にする学校」である。数年前まで子どもたちが落ち着かず授業に集中できない子、教室に居場所がなく外に出ていく子、自分に自信がなくて上手にコミュニケーションがとれずに困ってしまう子など様々な課題を抱えている子がたくさんいたことから、一人一人を大切に、個の育ち、集団の成長を認めほめていこうという思いを込めて定められたものである。

<主題設定にあたって>

本校では、一人一人を大切に、なかなかやる気の出なかった子どもたちが学習課題を自分ごととしてとらえ、やる気や意欲をもって粘り強く課題に取り組むようになること、探究的なプロセスに基づいて身近な生活や地域から課題を見つけ、仲間とともに主体的・協働的に解決することを目指して研究主題を設定した。そして、この学びの過程や充実した学びの体験、地域とのかかわりがふるさとに心を寄せ続け、誇りをもてる子どもたちへとさらに成長させていくと考え、副題を「～地域から学び、ふるさとに心を寄せ続ける子どもたちを目指して～」とした。そこには、小学校の系統立てたカリキュラム・マネジメントによりたっぴりと地域とかかわった子どもたちが、中学校、高校での学びや社会に出てからの生活の中で、地域に誇りをもち続けてほしいという願いが込められている。

<研究にあたって>

兵庫大会のテーマである「子どもが変わる」「教師が変わる」「学校・地域が変わる」の3つの視点を意識して3つの柱（内容については「研究内容」で詳しく述べる）を設定した。その上で、本校が目指す子どもの姿を3つの資質・能力の観点に沿って整理し、「地域のよさや人々の思い、願いがわかる子」「仲間と協働して課題を解決する子」「主体的に課題に取り組み、学びを生活に生かす子」とした。どの学年も地域に材を得て活動する中で地域のよさや人々の思いに気付く子になることを期待している。そして、探究のプロセスにおいて仲間と協働することに喜びを見だし、主体的な学習から学んだことを学校生活や地域の中で生かしたり、活用したりできるようになることを願っている。



(1) 学びの主体となる児童の思考が深まる活動

学び合い

本校では、自分と「ひと・もの・こと」とを体験や経験、知識のやりとりで結びとときに生まれる次のような場を学び合いと定め、このような場のくり返しにより、思考が深まると考えている。

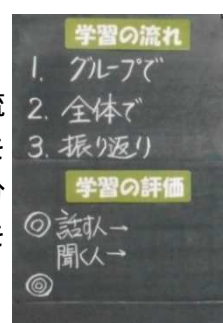
○友達、先生、家族、地域の人やその他のさまざまな「人」及び「もの、こと」との対話を通して、既存の知識と新しい知識が結びつき、新たな考えが生まれる場。

○各教科で得た知識や地域にある社会的概念、事実に知識などの定着を図る場。
(知識の定着)

○得た知識をさまざまな場面で使おうとする場。

見通しと振り返り

本校では、すべての授業において、右のように小黒板に「学習の流れ」と「学習の評価」を書くようにしている。授業の最初に見通しをもって取り組めるように学習の流れを示す。次に、子どもたちは自分たちで学習の評価を考える。それをもとに、授業の最後に振り返りを行うことで、自分たちで新たな課題を見つけることができる。



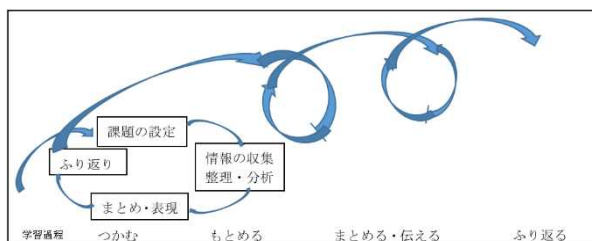
スピーチタイム

本校では、全ての学級において朝の活動の時間にスピーチタイムを導入している。「3文スピーチ」といい、自分で見つけた題材について3つの文でみんなに伝える。

(2) 探究的な活動を大切にしたい授業づくり

探究的なプロセスを大切にしたい単元デザイン

本校では、総合的な学習の時間における探究的な学習の過程に「振り返り」を加えた探究のプロセスを、生活科では子どもの思いや願いを実現するプロセスを大切に単元をデザインする。単元計画のどの学習過程



でも探究的なプロセスを取り入れることで、探究的な活動の流れがわかり、見通しをもって主体的に取り組めるようになる(図)。

「学習指導要領に示される探究的な学習の過程」をもとにした本校の「単元における探究的な学習のイメージ」

見取りと評価(授業リフレクション)

子どもたちの行動や発言、ノートやワークシート、その他の成果物からしっかりと個々の育ちを見取り、どのように評価するのかを全職員が共有している。また、公開授業の後の授業リフレクションについて研修を行い、付箋を使って個の育ちを見ていくことを大切にしている。

ICTの活用

淡路市では、4～6年生の子どもたちには、一人に一台タブレット端末が貸与されている。教室には無線LANが設置され、教室にいてもすぐにインターネットにつながる環境にある。子どもたちは、情報の収集や整理・分析、まとめ・表現する際に活用

している。最近のタブレット端末の機能向上により、個人で調べたり分析したりしたことが、グループで一つの成果物としてまとめられるようになり、協働して課題に取り組めるようになった。

(3) カリキュラム・マネジメント

教科横断的な学習

生活科、総合的な学習の時間を核に各教科を資質・能力でつなぐことを意識するために、指導案に「この単元を通して育成したい3つの資質・能力」という表を挿入した。単元構想では、小単元ごとに関連する教科等の内容を資質・能力で表記し、年間を通して教科横断的な学習により子どもたちにつけたい力が明確になるようにした。

PDCA サイクルによるカリキュラムの見直し

年度末に年間計画の見直しを行い、1年間の教育課程を評価し改善を図る機会を設けた。

地域の材「ひと・もの・こと」を取り入れた学習活動

- 地域とのつながりを大事にした活動
- 異校種間の接続（資質・能力でつなぐ）
 - ・保育園とのつながり（知識、技能）
 - ・中学校とのつながり（学びに向かう力、人間性）
 - ・高校とのつながり（思考力、判断力、表現力）

校内研修の工夫

カリキュラム・マネジメントを充実させるために、以下の校内研修を行った。

- 新学習指導要領における生活科・総合的な学習の時間とは
- 授業研究の工夫
- 教室環境、学校環境の整備
- 年度末におけるカリキュラムの見直し

2 成果と課題

令和元年11月15日、全国からたくさんの先生方に来ていただき、生活科・総合的な学習の授業公開を行った。先に研究の概要として示したような取組を、学校全体で行い、全職員が一丸となって研究を進めた結果、たくさんの先生方から高い評価をいただいた。この3年間の取組の成果として、子どもたちが主体的に学習に取り組んだこと、対話的な活動を通して自分に自信を持つようになったこと、そして、さまざまな事柄を関連付けて考えられるようになってきたことなどが挙げられる。また、地域に関心を持ち、地域の人とともに活動する中で、地域愛が育って来たり、地域の人たちにほめられることで自己肯定感が高まってきたりした。

課題としては、この研究を今後どのように継続、発展していくかということである。今年度は、コロナ禍で昨年度と同じような活動はできなかったが、どの学年もそれぞれが工夫して昨年度と同じような活動に取り組むことができた。校内研修を通して生活科・総合的な学習の重要性も共通理解できたが、先の見えないコロナ禍の中でいかに活動を発展させていくのかが問われていると感じる。

2 中学校

「中学校における全校一斉の数学教え合い学習『笹トレ』の試みと授業の確立」

伊丹市立笹原中学校
教諭 古谷 俊樹

はじめに

日本の学校教育の現況は系統学習であり、本人の興味関心にかかわらず、積み上げ学習が中核となっている。とくに小学校や中学校の算数・数学では一斉学習による指導で、本人の理解深度にかかわらず先に進んでしまう傾向にあり、「算数・数学嫌い」を多発することになりかねない。本校においても、生徒は年々落ち着いてきており、生徒会活動や地域のボランティア活動などにも積極的に取り組んでいる。しかし、学力については学習意欲が低い生徒が多く、小学校の時から基礎学力がついていないなど課題は多い。そこで次の2つの実践に力を入れた。

上級生が下級生を教えることを核とした全校一斉の数学の教え合い学習「笹トレ」
伊丹市教育委員会委嘱伊丹市マイスター（中学校数学 教科等指導員）として、市内の数学の公開授業や研修会の開催

1 取組の内容・方法

(1) 上級生が下級生を教える異学年間による全校一斉の数学の教え合い学習「笹トレ」

はじめに

本校の前研究推進アドバイザーである太成学院大学教授 伊藤 博先生から、「学校が生徒の『居場所』として、安全で安心して学べる場所であるべきである。さらに、規律ある学習環境のもとで『わかる授業』づくりと、生徒の学習意欲を引き出すために、学ぶ先に見える目標を見いだすキャリア教育を積極的に進めていかなければならない」との助言をいただいた。

そこで、「上級生が下級生を教える」を核として伊藤 博先生のご指導のもと、他の教職員の協力を得て、「異学年による全校一斉の数学の教え合い学習『笹トレ』」の実践を行った。

ベースとなる理論

エドガー・デールの「経験の円錐：学習指導における聴視覚的方法、1946）」といった理論を基にしている。これは最近になり、「学習のピラミッド」や「ラーニングピラミッド」といった名称で変形されながら紹介されるようになった。

この理論の中で、記憶への定着率においては「言葉による表記」よりも「意図的な参加」や「直接的な体験」になるほど、記憶の定着率が高くなるというものである。

つまり、従来の知識注入型の授業(一方通行の授業)よりも、授業の中で「生徒同士の教え合い」により、主体的・対話的に学ぶことに重点を置くことになり、授業内容の定着率が高まることが期待できると考えられる。



図4 経験の円錐(筆者による加筆・修正)

実施方法

この実践は、「学習意欲の育成」、「キャリア教育の推進」、「仲間との教え合い(ピアサポート)による自尊感情の育成」の3点を目的とした教え合い学習である。

「笹トレ」の実施方法は、毎週水曜日に年間20回程度、総合的な学習の時間(30分間)に実施している。テスト等の結果をもとに、教える役である笹トレteacherを各クラス10名選出する。笹トレteacherの3年生は2年生を、同2年生は1年生を教える。同級生を教える場合もある。笹トレteacherは教える問題を事前に解いておき、教える準備を行う。笹トレの開始前に、笹トレteacherを含む男女別の3人班または2人班をつくる。教え合いにはミニホワイトボードも用意する。演習 教え合いタイム 確認テスト 繰り返りの流れで行う。この教え合いタイムの中で、笹トレteacherを中心にチームのメンバー全員が理解を深めることを目標に進めていく。

(2) 伊丹市教育委員会委嘱伊丹市マイスター(中学校数学 教科等指導員)として、伊丹市内の数学の公開授業や研修会の開催

“活用する力を伸ばす” 授業実践

授業のねらい

三角形の相似条件を用いて、人が実際に見える景色の範囲を求めることにより、既習事項から発展させて答えを導き、活用する力を身につけさせる。

授業内容の流れ

- ア 大阪市内にあるテーマパークUSJのジェットコースターの最高地点から、本校(笹原中学校)が見えるかどうかということについて予想をさせる。
- イ 対象物を簡単な図で示し、実際に見える範囲を求める方法について、個人で考えさせる。
- ウ 4人班で意見や考えの交流を行わせる。話し合いを通して、求めたい答えに近づいているかを中心に確認しながら机間指導を行う。

エ ICT機器を用いて考えを全体共有させる。相似な図形の性質を利用して見える範囲の求め方を見つけ、実際の地図上でその考えを用いて確認させる。

授業をとおして

日常生活にある課題について、数学で解決できることが多くあることを、全体で深めることができた。

中1ギャップ解消のための小中連携研修 ～ 算数から数学へ ～

現任校で生徒指導主事を担当して、学校全体の不登校生徒について考える機会が増えてきた中で、「中1ギャップ」という言葉が気になった。そこで、算数・数学指導を通じて「中1ギャップ」を防ぐ手立てはないかと考えた。研修においては、前半は小中の現状やいくつかの手立てを紹介し、後半は情報交換から現状での課題や今後についての意見交換を小中の教員が合同で行った。

2 取組の成果

(1) 上級生が下級生を教える異学年間による全校一斉の数学の教え合い学習「笹トレ」 実践後の生徒反応や教員の反応（ふり返り）

生徒の反応

笹トレteacherからは「教える側も考える必要があり、理解させるための工夫をした」、「教えた結果が点数に出てうれしかった」など前向きな意見が多かった。また、教えてもらう生徒からも、「先輩に教えてもらってわかりやすかった」、「1回目にできなかったことが、2回目には分かるようになっていて嬉しかった。できる問題が少しずつ増えたように思う」という感想が出ている。笹トレは双方にとって数学に対する苦手意識を取り除き、学習意欲を高めるのに大きな効果がある。



教職員の反応

本校の教職員からは「先輩として、プライドをもって教える準備をしている姿に感銘を受けた」、「教えてもらう後輩が、いい緊張感をもって教えてもらっていることが良いと思う」など、前向きな意見が多くあった。教室では見ることができない生徒の別の一面を見る良い機会になっている。また、「普段の授業中においても教え合う姿が増えてきている」という意見もあり、「笹トレ」以外の授業の場面でも、大きな効果が現れている。

(2) 伊丹市教育委員会委嘱伊丹市マイスター(中学校数学 教科等指導員)として、市内の数学の公開授業や研修会の開催

生徒が様々な考え方や発想で問題を解決しようとする場面が見られた。また、課題解決学習をとおして、身近な事象に数学が関わっていることを実感させることができた。

小学校算数科研究会と中学校の教員とが連携することにより、「小学校算数科」と「中学校数学科」の円滑な接続に向けて、小中一体となって取り組んでいく良いきっかけとなった。



3 課題及び今後の取組の方向

(1) 上級生が下級生を教える異学年間による全校一斉の数学の教え合い学習「笹トレ」

「笹トレ」を開始してから4年目に入った。検証していく中で、課題点もいくつか存在している。例えば、時間が足りず途中で終わってしまうことがあるという生徒からの声は少なくない。また、毎回の数学の問題作成については、学年の状況次第で例年通りでは行えない場合などがある。また、3年生に関しては、3年目ということもあり、緊張感が薄れている場面も見られる。1年生に関しては、教えられなくても、すでに理解が進んでいる生徒もあり、そのような生徒に対しては、早い段階で同学年の笹トレteacherとして活躍させてもいいのでは、という声も出ている。

「笹トレ」はまだまだ検証しながら改善していく段階であるため、その過程をくり返しながらシステムを構築していきたい。

(2) 伊丹市教育委員会委嘱伊丹市マイスター(中学校数学 教科等指導員)として、伊丹市

内の数学の公開授業や研修会の開催

意見交流が止まってしまう班や、発言の少ない生徒もいるなど、全員が活発に取り組めていない部分もあった。また、教師主導での説明が多くなってしまいう場面があった。

小中における新学習指導要領の全面実施も含めて、引き続きさらなる研究が必要であり、今後も小学校と中学校の連携を深めていかなければならない。

「論理的な意志決定をめざす社会科学習法の開発」

三田市立上野台中学校
主幹教諭 王子 明紀

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

社会科の目標は「公民的資質を育成する」ことである。具体的に述べれば、熟慮した上で投票行動ができる将来の有権者を育成することが目標であるといってもよい。そのために社会科教育学研究は、かつての「社会科＝暗記教科」というイメージからの脱却を図るために、様々な授業構成理論を構築してきた。その一つに、科学的な探究活動をとおして社会認識形成を図る授業構成理論がある。これは、羅列的、無意味綴りに語句の暗記を求める学習ではなく、子どもが様々な知識を関連付けながら社会事象の因果関係を説明することをめざしている。この学習では、「なぜ」という問いを中心に、資料の読み取りや解釈をとおして「社会のしくみ」を理解することをめざす。もう一つは、「社会のしくみ」の理解をもとに、社会的な論争問題について論理的に価値判断・意志決定することをめざす授業構成理論である。この学習では、「だから、私は することがよいと考える」というように、子どもが根拠のある価値判断・意志決定できることをめざす。つまり、社会科は「社会のしくみ」を理解し、それをもとに「のぞましい社会のありかたを考える」ことをとおして、教科の目標である公民的資質の育成を図ってきた。

(2) 気づかなかった思考のクセ

既に論じたように、社会科でめざすのは論理的な価値判断・意志決定である。社会的論争問題に対する自身の価値判断・意志決定(結論)とその根拠に論理整合性があれば、論理的な意志決定ができているとこれまでは評価してきた。しかし、ある事実の発見によって、それは誤りであることに気づいた。

公民的分野の教科書に掲載されている「コンビニエンスストアの経営者になってみよう」(以後、「コンビニ意志決定」)という学習がある。教材では、地図に示された5か所の内、どこにコンビニを出店するかが問われる。この学習では、限られた立地条件に関する情報であるものの、公平にそれらの条件を比較、吟味して意志決定し、他の場所よりも意志決定した場所の優位性を論証することが求められる。子どものワークシートに、次のような記述がみられた。

場所：オフィス街の一角，駐車場なし

理由：資料2より20歳以上の利用者が多いのでオフィス街の一角にした。オフィス街が駅の近くにあるので、電車通勤が多いと考え、駐車場は不要だと思う。資料3より週に2回以上利用する人が多い。ほぼ毎日、仕事をするために会社などに来ると考えたから。

子どもは資料をもとに根拠を形成し、それに基づいて意志決定をしているようにみえる。これまでなら「よく考えられている」と評価してきた記述である。しかし、ふと「この根拠と結論をどのように導き出したのだろうか」という疑問がわいた。そこで、他の子どものワークシート記述をあわせて精査すると、これまで見落としていた新たな事実を発見することになった。それは、一見論理的にみえる意志決定が必ずしも論理的な思考過程によるものではないということである。特に、子どもの思考に関して、次の2点の課題が明らかになった。直感的に結論を出してから適合する理由を後付けすること(以後、「理由の後付け」)、自身の選択肢のメリットと他の選択肢のデメリットを比較する不公平な比較を行うこと(以後、「不公平な比較」)である。106名のワークシートを分析し、73名(69.9%)の子どもが「理由の後付け」をし、「理由の後付け」をしていない子ども33名のうち、31名が「不公平な比較」をしていた。本当の意味で論理的に意志決定をしていたのは106名中2名(1.9%)のみであった。つまり、論理的に見える意志決定のほとんどは直感的な意志決定であったという事実が明らかになったのである。しかし、この段階では非論理的な意志決定をしているという事実は発見できたものの、その原因を明らかにすることはできなかった。

(3) 謎を解くカギは学問の研究成果に

「なぜ、はじめに直感的に意志決定をし、それにもっともらしい理由を後付けしているのか」という疑問の解明に取り組んだ。その原因をさぐるために先行研究の知見を調査した。認知的なバイアスの影響があることを予想し、それを確かめるために認知心理学の研究成果を調査した。その結果、直感のバイアスの影響によって、人は「はじめに結論ありき」の意志決定をしてしまう傾向のあることがわかった。また、直感のバイアスの内、別の可能性の証拠を無視し、思い込みの判断をさせる確証バイアスの存在がわかった。さらに、行動経済学の研究成果からも、人は直感のバイアスの影響を受けた思い込みで意志決定をする傾向のあることがわかった。

先行研究の調査によって、「コンビニ意志決定」の学習でみられた意志決定の傾向は決して不思議なことではなく、直感のバイアスが影響していることがわかった。そこで、これまで社会科教育ではあまり注目されてこなかった直感のバイアスの影響を制御する新たな意志決定学習法の開発に取り組むことにした。

(4) 比較吟味自己内討論法の開発と実践「電源構成を考えよう」

人は、日常生活の判断のほとんどを直感で行っており、その判断のほとんどは間違いではない。また、直感を完全に排除することなどできない。そこで、直感のバイアスの制御を意図した比較吟味自己内討論法を開発した。ワークシートを用いて個人の意志決定に至る思考過程を可視化する方法である。比較吟味段階と自己内討論段階の2段階で構成される。比較吟味自己内討論法の学習過程は、次のとおりである。

比較吟味段階

() メリット・デメリットの比較

まず、はじめに教科書と資料を用いて各発電法のメリットとデメリットを一覧表にまとめる(右のワークシートは一部を略している)。本実践において、子どもは教科書以外に19の資料を用いて各発電法のメリットとデメリットをまとめた。

() 規準をつかって吟味する

比較段階でまとめた各発電法のメリットを規準にし、評価する。評価の方法は、それぞれの子どもが工夫して行った。例えば、5段階評価する、得点化する、重視したい規準のみ2倍の重みづけをするなどの工夫がみられた。右のワークシートの子どもは、各項目を得点化し、一覧にまとめている。各発電法のメリットのすべてを規準にすることで「不公平な比較」を回避することができる。

さらに、電源構成を考える場合に何かの割合を減らせば、何かの割合を増やさなければならないというトレードオフの関係の理解が必要になる。「吟味してみよう」の過程によって、例えば、原発に賛成か反対かという主義主張ではなく、社会を維持するための電源構成全体のあり方について考えを深めることができる。

自己内討論段階

比較、吟味をした後に、子どもは仮の意志決定を行う。思考過程の可視化によって、「理由の後付け」の直感的な意志決定にはならない。仮の意志決定後、自己内討論段階へと学習は進む。仮の意志決定に対して、他者からどのような反論や指摘がなされるかを想定して、それについて反駁を考える。自己内で「本当にそれで大丈夫なのか」、「 に関しては確かめるデータが不足しているのではないかなど、自身の意志決定を批判的に吟味していく。

(1) 各発電法のメリット・デメリットをまとめてみよう。

	メリット	デメリット
火力	<ul style="list-style-type: none"> 発電効率が良い。 定定的 発電量を調節しやすい。 消費量の近くに建設しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> CO₂を排出する。 1kWhあたりのコストが高い。(石油火力) 温室効果ガスを排出しやすい。 燃料枯渇の恐れがある。
原子力	<ul style="list-style-type: none"> 燃料をリサイクルできる。 コストが最も安い。 CO₂を排出しない。 定定的 	<ul style="list-style-type: none"> 維持・管理費、人権費などがお金の掛かる。 事故が起こるリスク。 立地場所が限定される。
水力	<ul style="list-style-type: none"> 資源が枯渇する恐れがない。 CO₂を排出しない。 温室効果ガスの排出が少ない。 定定的 	<ul style="list-style-type: none"> 自然条件に左右される。 新たに建設できる場所が少ない。 鳥獣が当たると死ぬ恐れがある。 自然環境・生活環境と衝突することがある。
太陽光	<ul style="list-style-type: none"> 資源が枯渇する恐れがない。 CO₂を排出しない。 温室効果ガスの排出が少ない。 メンテナンスがほとんどない。 非常用電源として使える。 	<ul style="list-style-type: none"> 気候条件に左右される。 新たに建設できる場所が少ない。 鳥獣が当たると死ぬ恐れがある。 自然環境・生活環境と衝突することがある。 発電費用が高い。
風力	<ul style="list-style-type: none"> 資源が枯渇する恐れがない。 CO₂を排出しない。 温室効果ガスの排出が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 自然条件に左右される。 広い土地が必要。 発電費用が高い。

吟味してみよう①

(1)のメリットなどをもとに判断する規準をつかって(その正しさを確認して)、比較してみよう。

【例】

規準	●●...	△△...	□□...	◆◆...	◎ ○ △ ×
電源	●●	△△	□□	◆◆	◎ ○ △ ×
火力	◎	○	△		

	安定性	温室効果ガスの排出	資源の枯渇	発電効率	コスト
火力	◎	×	△	◎	◎ (石油火力)
原子力	◎		◎	◎	◎
水力	◎	◎	◎	◎	◎
太陽光	△	◎	◎	△	2030年12月 ◎
風力	○	◎	◎	△	△
その他	△	◎	◎	△	△

	建設のしやすさ	メンテナンス	発電規模の大きさ	安全性	合計
火力	◎	○	◎	○	19
原子力	△	△	◎	△	21
水力	△	○	◎	◎	24
太陽光	◎	◎	○	◎	22
風力	△	◎	△	○	17
その他	△	○	△	◎	16

吟味してみよう②

(2)何かの割合を増やせば、何かの割合を減らすことになる。その場合のメリットとデメリットを吟味しよう。

【例】 ①Aを増やして、Bを減らす→メリットは◎◎、デメリットは××

水力を増やして火力を減らす →	メリット: CO ₂ の排出量◎	デメリット: 建設に長い電気代△
太陽光を増やして原子力を減らす →	メリット: 少し安全になる。建設しやすい。メンテナンスが少なくなる。	デメリット: コストが高くなる。発電効率△。安定性△
風力を増やして火力を減らす →	メリット: CO ₂ の排出量◎	デメリット: 安定性△。発電効率△。コスト△
風力を増やして原子力を減らす →	メリット: メンテナンス◎	デメリット: 安全性△。発電効率△。コスト△

・反論の出し方 既得(自分のもっている)知識 or 資料○番から ××では□□ではないか?

記号	反論の内容	反論の出どころ(きっかけ)
ア	風力を上げると電気代が上がるから不安になるのではないかな。	資料(A)・既得知識
イ	太陽光を増やすとゴミが増えるのではないかな。	資料(C)・既得知識
ウ	風力を増やすと鳥の死ぬ数が増えるのではないかな。	資料(F)・既得知識
エ	火力を減らし、水力を増やすと建設場所が少ないのではないかな。	資料(A)・既得知識
オ		資料()・既得知識

②反論についての反駁(はんぱく)を考えよう。(反駁ができないこと、自身の考えの修正もある)

記号	反駁、修正の内容	反駁、修正の根拠
ア	原子力を減らして風力を増やしているのを、原子力を増やしたら、安定はできるけど事故が起こった時のお金がかかるし、近くに住んでいる人にとって危険な場所が少なくなる。	資料()・既得知識 ()なデータあれば
イ	ゴミは増えるかもしれないが、これより耐用年数の高い太陽光パネルが完成するかもしれない。 ③耐用年数が短いからゴミが増えることは事実	③ 安定性、少し減らす電気代も上がる。
ウ	風の通りは変わらないが、鳥が風力発電に当たらないようなネットを建て物を作る。 カメラなどをつけて鳥が近づいてきたら風力発電と接触しないよう建て物を作る。	
エ	資源が枯渇する不安はない。割に大量に発電できるから安定で安心できる発電方法になる。 ④おそろく建設場所は不十分ではないと思う。	水力の新たに建設できる場所がもっとあるかな? -9

この段階をとおして自身の意志決定をより論理的なものにすると同時に、自身の意志決定が絶対解でないことも理解する。この理解をとおして他者の考えも取り入れようとする態度が育成される。

最終意志決定段階

自己内討論後、子どもは最終の意志決定し、その後、単元全体をふりかえる。授業のまとめに関するワークシート記述は、次のとおりである。

【子ども A】

私はこれからの日本の電源構成は水力に力を入れるべきだと思います。理由は次の3点です。(中略)ただ、水力発電は建設できる場所が少ないという課題があります。建設可能な場所がどれくらいあるかを確かめて、考えていきます。

【子ども B】

安全面に関しては、以前(注：仮の意志決定)よりよくなったと思うが、コスト面や供給面ではいまいちの部分があるため、他の細かい資料を組み合わせる等、もっと詰めていく必要があると感じた。(中略)メリットとデメリットを補い合う方法について考えていきたい。

比較吟味自己内討論法によって、自身の思考過程を省察しながら、子どもの学ぶ意欲が学習後も継続していることがわかる。

2 取組の成果

比較吟味自己内討論法は意志決定に至る思考過程を可視化できる。意志決定学習に比較吟味自己内討論法を用いることで、次の三つの成果が得られた。

(1) 論理的思考力・批判的思考力の育成

直感のバイアスの影響を制御することで、「理由の後付け」、「不公平な比較」というこれまでの意志決定学習の課題の克服を図ることができた。様々なデータを分析し、それらを吟味する過程で論理的思考力が育成された。また、自己内討論段階で自身の意志決定を省察することで批判的思考力を育成することができた。

(2) 学習者の不安感を取り除く

思考過程を可視化できる比較吟味自己内討論法は、特に学習に苦手意識をもつ子どもにとって有効な手立てである。大量の情報を処理する場合、「今何を考えていたのかわからなくなった」、「何をどのように考えればよいか見通しがたたない」など学習に苦手意識をもったり、学習に取り組むこと自体をあきらめたりする子どもがいる。自身が思考したすべての過程にいつでも立ち戻ることができるので、安心感をもって大量の情報を分析しながら学習に取り組むことができた。

(3) 学習評価の実際 C評価がない

子どものワークシート記述を評価したところ、次のような結果となった。

評価	評価規準	割合
A	優先すべきと考えることを明確にした上で、その場合に受容すべきデメリットも示した論理的な意志決定ができる。	73.5%
B	優先すべきと考えることを明確に示した論理的な意志決定ができる。	26.5%
C	意志決定の過程と結果が論理的でない。	0%

3 課題及び今後の取組の方向

今後も学習に対する子どもの苦手意識を取り除き、「考え続ける」学びを保障する社会科学習のありかたについて仲間とともに研究を重ねていきたい。子どもが「なるほど！そうだったのか」と思う授業や「今日はよく考えたなあ」という充実感をもつことができる授業づくりを進めていきたい。

1 取組の内容

はじめに

これからの時代を「厳しい挑戦の時代」「予測が困難な時代」として新学習指導要領の冒頭には記されている。1年前までこの言葉は、数年先の将来について語られていると考えていたものが、新型コロナウイルス感染拡大により、その「時代」がまさに今のことであると痛感している。

先が見通せない現在において、義務教育9年間で子どもたち一人一人の生きる力の育成につながる授業とはどのようなものか、実践事例を紹介しつつ考えていきたい。

(1) 授業：自分で課題を決め最後まで取り組む

授業者の示すねらい(めあて)が、子どもが解決したいと思う問題に変換させることが授業の導入で大切である。そのためには蓄積した授業記録をもとに、集団の実態、個別の支援を必要とする子どもへの配慮、既得の知識技能や学習成果について事前評価し、総合的で緻密な指導計画を立てる。さらに子どもたちの考え方の多様性や個々の課題に柔軟に対応する可塑性及び汎用性の高い教材を選び、子どもの学習意欲を高めるようにする。

[例：スケッチ]

自然の美しさを見つけそれと同じ色を再現する授業である。冒頭に学習課題を2つ示す。1つ目は個々が美しいと感じた色を見つけること、2つ目はその色をどのように再現するかである。色の再現は簡単なようで難しい。これまでの色彩に関する知識を活用し、何度も色を混ぜ合わせながら、「にじみ」「点描」等の技法を活用してスケッチを進めた。



写真のように、子どもたちは試行錯誤し自分なりの答えを見つけようと集中している。子どもの「主体性」を育成するには、子ども自身が判断し行動する「チャレンジ」を授業に組み込まなければならない。

(2) 授業：自他の多様な価値観を尊重し学びを深める

自他を尊重する心の育成は、学級経営をはじめ学校教育全体で推進され、その基盤上に授業の対話的な深い学びがある。

また美術科において、お互いの表現とその価値を認め合う集団をつくるには、3年間の継続的な指導が必要であり、授業者は豊かな学びは安心できる土壌で育つことを忘れてはいけない。

[例：対話から学びを深めるグループ活動]

下図は色の組み合わせについて、グループで意見交換をしている場面である。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、現在グループ活動の実施は困難な状況だが、子どもたちは授業中の対話の時間を楽しみにしており、その有用性を感じていることが、授業後の振り返りから読み取ることができる。



生徒の振り返りシートより
美術は自分の思ったことを形や色にして、みんな違う考えがあるんだなあと思った授業だった。また美術の授業で身についた力は、みんなと協働できたり、自分の考えを人に教えてあげたり、逆に他の人の考えをもらったりする協働力や、自分で考える力を身につけた。協働力はこれからの自分に生かせると思う。

自分らしく表現するには自分の見方だけでなく、他者にはどう見えてどう伝わっているかという客観的な視点も求められる。対話は自分の考えにだけにとらわれない思考力・表現力を育てる機会である。そしてそこで生まれるよりよい表現は、自他にとってよりよいものであることで、その価値は一層高まっていく。

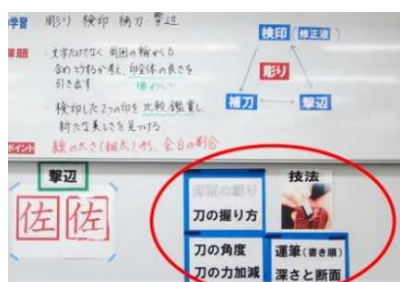
また授業者は「何について対話を進めるのか」を発問で具体的に示すことが大切である。でなければ学習内容に関係ない雑談が続いたり、全体での交流の場面において、価値の共有やその違いを比較して考えを深めていくことが難しいからである。

(3) 初任者及び2年次研修講師等：若手教員の資質向上

教科等指導員(美術)に任命された縁で、令和元年から県立教育研修所において、初任者及び2年次研修の講師として、若手教員の授業力向上につながる助言を行った。

主な内容は学習指導要領の理解をはじめ、下に示す子どもが安心して学びに向かうことができる板書の工夫、ICT等を活用した基本的で汎用性の高い知識技能の提示、さらに思考力・判断力・表現力を伸ばす評価の在り方等である。

板書例



本研修では、初任及び2年次研修受講者から私も学ぶ点が多かった。その例として、子どもと教師の信頼関係に基づく学びの空間づくり、教師の資質向上には教師自身が子どもの発言やその活動から謙虚に学び、常に授業改善を進めることの大切さである。

またこれからの授業は「教え - 教えられる」といった固定化した教師と子どもの関係ではなく、めあて向かって柔軟に子ども同士が学び合う中に教師が入り、教師が指導すればするほど子どもの自由度(思考力・判断力・表現力)が高まっていくにはどうすればいいか考える機会になった。

(4) 提案：コロナ禍の授業の展開について

教科書編集や教師用指導書を作成した教科書出版会社の依頼により、緊急事態宣言中の令和2年4月「新型コロナウイルス感染症拡大防止の状況下における授業の展開」と題した原稿を執筆し全国の中学校に配付された。その内容は以下のURLで公開されている。<https://www.nichibun-g.co.jp/chubi/info/1627/>

2 取組の成果

(1) 義務教育9年間を終えるにあたって

私たちは小中学校の学びの系統性を確かなものとし、一人一人にその後の社会でよりよく生きるための資質・能力を育成し義務教育を修了させなければならない。

私はその力がどうついたのか、また子どもたちがどう自覚しているのかを確認するために、義務教育最後の定期考査で次のテーマで生徒に作文を書かせている。

「3年間を振り返り、あなたにとって美術の授業とはどのような時間でしたか。また美術で身についた力が、これからの生活でどう生かされると思いますか。」

[生徒作文]

美術の時間は、友だちと話し合ってたくさんのアイデアを出し、様々な方向から物事を見る機会が多く、とても楽しい時間だった。大きく周りを見渡す力をこれからももっと広くして、いろいろな観点から見られるよう努力したい。将来知らない土地に出るとき美術で学んだ力を活用できたらと思う。

美術の時間を通して、とりあえずやってみようと思うことが増えていった。ミスしてもそのミスから何か思いつくかも知れないと思うことができるようになった。この考えはこれからの生活にも必要な考えだと思う。ミスをおそれていると次に進めないと思うので、美術で学んだことを常に思い出して頑張っていきたい。

今後これらの内容が子どもたちの中で持続し、様々な状況で発揮される力であるとは明言できないが、少なくともこの時にそのような思いを持つことができたことを、ささやかではあるが取組の成果の1つとしたい。また子どもたちの作文は、私の授業への大切な評価であり、それ以降の授業改善に必ず生かしている。

3 課題及び今後の取組の方向

(1) 生きる力の育成につながる評価

美術科の特徴として「その子らしさ」を重視し支援していくことが大切である。ただ一方で義務教育の出口には進学のための入試が現実としてあり、「その子らしさ」は入学選抜の基準にはなっていない。

「その子らしさ」や「指導の個別化」、「学習の個性化」に重きを置く令和の学校教育の流れの中で、いかに評価を一人一人の生きる力の育成につなげていけるかが求められる。その糸口として、単元の終わりや学期末等で一定の基準による総括的な評価(評定)が最重要とする認識を改めることではないかと思う。今後は授業中の形成的評価や数値化できない個々の成長を分析した個人内評価を重視し、「以前と比較してこのような力がついた」、「課題に対し新たな視点で考えるようになった」等を本人や保護者と共有し、粘り強く学習に取り組む主体性や自己肯定感を高めることが、生涯を通して学ぶ生きる力の育成につながると思う。

「学校給食の管理と食に関する指導を一体的に行う取組」

養父市立養父中学校

栄養教諭 井口 留美

1 取組の内容

学校給食は成長期にある児童生徒の心身の健全な発達のため、栄養バランスのとれた豊かな食事を提供することにより、健康の増進、体位の向上を図ることに加え、食に関する指導を効果的に進めるための重要な「生きた教材」としての役割がある。学習指導要領において学校給食は、特別活動の「学級活動」に位置付けられており、各教科等における食に関する指導を相互に関連付けることがうたわれている。ここでは、栄養教諭の職務である学校給食の管理と食に関する指導を一体的に行う取組について述べる。

(1) 学校給食の管理

ア 学校給食摂取基準に基づく栄養管理

養父市学校給食センターは、これまで旧4町ごとにあった共同調理場を、平成27年1月から1市1センターに統合した共同調理場であり、市内全ての小・中学校の学校給食を提供している。当時受配校は13校で、全校児童生徒数が約35人から約250人とその規模も様々である。統合前及び統合直後の平成27年度までは、文部科学省の学校給食摂取基準に基づいて給食を提供していた。しかし、統合前に比べ管轄する受配校及びそのクラス数が増加したこと、また複式学級から1クラス40人学級とその構成も多様になっ

たこと、さらに同学年でもクラスによって残食量に違いがあることから、児童生徒の実態に応じた量の給食を提供することが栄養管理に不可欠であると考え、学校給食摂取基準に基づき対象集団に応じた給食管理を実施することにした。各クラス男女別の身長・体重データの平均値を各学校から収集、平均身長から標準体重を算出し、対象集団の推定エネルギー必要量を求めて配食量を決定する。また、配食量は、対象集団の推定エネルギー必要量を基に、各学校の給食担当者と各クラスの給食残食状況やクラブ活動等をふまえた身体活動量及び個別的配慮の有無等を相談しながら決定する。成長期にある児童生徒の身体状況は、短期間で変化していく。成長を鑑み4月と9月の年2回の身体測定値に基づいた配食量を決定し、取組を継続している。

イ 食に関する指導の全体計画に基づく献立作成

食に関する指導の全体計画に沿って、学校の教育活動との連携、郷土料理、旬の食材や地場産物、行事食等様々な観点から計画的に取り組んでいる。地産地消では、児童生徒の地場産物に対する理解・関心を深め、郷土愛を育むことを目的とし

て市内産及び県内産の旬の食材を活用した献立を考案し、新メニューを月に1回給食献立の一品として提供

する「やっぷーメニュー」、県産品の食材を使用する献立「はばタン給食」を学期に1回実施している。献立内容はご飯を中心に魚・海藻・野菜などを組み合わせた和食を意識的に取り入れる。給食当日までに料理の由来、献立の特徴や食材の産地を紹介した掲示資料を作成・配布し、児童生徒の意識付けも行う。

養父市イメージキャラクター

やっぷー



令和3年2月12日(金)
「はばタン給食」

- ・赤米ごはん ・牛乳
- ・県産黒ダイの甘酢あん
- ・ひじきれんこんサラダ
- ・もち麦めんの汁 ・金柑

今年度は特に新型コロナウイルス感染症の影響による経済対策の一環として県産農林畜産物が提供されたことから、豊富な兵庫県の食材を献立に取り入れることができた。

ウ 学校給食衛生管理基準に基づく危機管理

統合により新しく導入された施設・設備に合った衛生管理や調理方法等について、調



理従事者が統一的に実践することができるよう、衛生管理マニュアルの作成と改訂を実施している。平成 31 年 4 月には県の HACCP 認証を受けた。その際、帳票書類の内容や衛生管理重要

ポイント項目の厳選も行われたことから、長期休業中等の機会をとらえ、年に 1 回以上

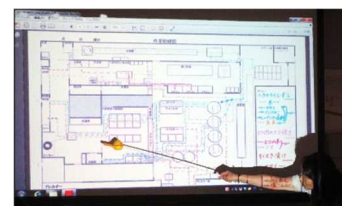
は調理従事者全員で書類の見直しを行い、共通理解を図っている。特に帳票は次回調理

時の手引書となるため、調理従事者全員が携わることができ

るよう場内研修を積み重ねている。帳票に記録することで、

調理作業を振り返ると同時に学校給食衛生管理基準の理解と

調理技術向上を図っている。



(2) 食に関する指導

ア 給食の時間における食に関する指導

給食時間に行われる指導は「給食指導」と「食に関する指導」に分けることができる。

「給食指導」は、給食準備から片付けまでの一連の指導の中で、正しい手洗い、配膳方法、食事マナーなどを体得・習慣化させる場面であることに対して、「食に関する指導」は、学校給食の献立を通じて食品の産地や栄養的な特徴を学習したり、教科等で取り上

げられた食品や学習内容を確認するなど、献立を教材として用いた指導を行う場面となる。

(ア) 献立を教材とした給食時間における指導

・食料の生産と消費及び栄養バランスのとれた食事



作り手（調理員）の言葉を直接聞くことで、感謝の気持ちを持ってバランスよく食べるという意欲につなげる。

・食品の種類や特徴



夏野菜にはビタミンAと水分が多いことを知り、夏バテ予防に適していることに気付く。

(イ) 教科等と関連付けた給食の時間における指導

・学習の確認の場面としての活用（授業 給食）

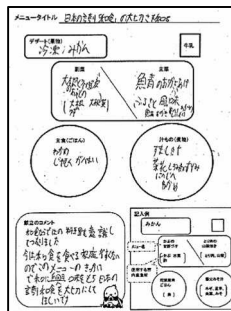


国語で学習した養父の『養』の漢字を考える。育てる 体を大切にする 心を豊かにするという意味を踏まえて、「養」に隠れている『食』という漢字を引き出し、丈夫な心と体を育てるためには、食べるのが大切だと気付く。

イ 教科等における食に関する指導

各教科における食に関する指導の実施は、各教科の特性によって食との関わりの程度が異なっていることに配慮しながら、各学校の食に関する指導の全体計画に沿って計画的に行われることが重要である。給食と教科を関連づけた授業を目指し、献立コンテスト「養父市学校給食甲子園」を実施している。市内の児童生徒を対象に、給食献立のアイデアを募り、選考基準に沿って代表校長や PTA 代表、教

第1回ホームラン賞 「日本の誇り「和食」の大切さを



- ・わかめ蛇紋岩米ごはん
- ・鯖のおかき揚げ
- ・大根と柚皮のあえ物
- ・すまし汁 ・みかん

育部長など約10名の養父市学校給食運営委員会のメンバーで審査する。入賞献立は、最優秀賞を「ホームラン賞」、優秀賞を「ストライク賞」、「ダイヤモンド賞」として決定。1月の「全国学校給食週間」の献立として採用し、全校に提供している。今年度で6回目の取組となるが、毎年テーマを設定することで、年々新しい献立の応募がある。学校全体の取組として家庭科等各教科における食に関する指導と関連付けて取り組んでいる学校もあり、応募内容を考える学習の際には栄養教諭が出向きTT授業等を行うことが定着した。授業として取り組むことで、地場産物利用や給食に対する興味・関心、栄養バランスや食べ合わせ等も考えられ、自分の食生活を振り返る機会ともなっている。

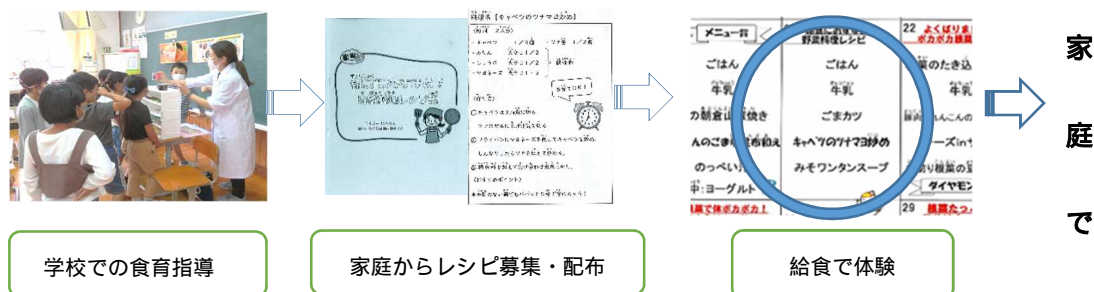
(3) 家庭・地域と連携した食育

学校では旬を感じながら、配膳されたものを食べ、授業では栄養バランスのよさを考える姿勢が見られるが、食に関する知識や実践は、最終的には家庭での実生活に生かされているかが重要である。児童生徒の実態に応じた栄養管理を行いながら、学校・家庭が相互に連携し合う取組を推進することや、地域の実態も勘案すると、市関係部局との連携強化も念頭に置いて市全体の食育推進を展開させることが効果的な取組となる。

ア 朝食指導における家庭との連携

9月～10月には食に関する指導の全体計画に位置付けた「朝食の大切さと生活リズム」について、養父市小中学校養護教諭研究会小学校部会と連携し給食時間等に朝食の指導を行った。学年に応じて、朝食に関する目標や指導ポイント等を設定した上で実施し、指導内容は、教科等で習う内容と県及び市の食育推進計画に沿うように工夫した。この給食指導を家庭での実践につなげるべく、養父市小中学校養護教諭研究会小学校部会が

家庭から朝食メニューを募集し、12月にレシピ集を作成・配布して継続的に指導をした。児童生徒の食に関する自己管理能力の育成には、このような学校での食に関する指導が児童生徒の実生活で活用されることが重要である。このレシピ集配布の取組をさらに家庭での実践へつなげようと、レシピ集に載っているメニューを給食の一品としてとり入れることにした。レシピ集の「文字」だけでなく、実際に「食べる」体験も通じて家庭での実践を促したい。



年間平均残食量の全体量比較 単位：g/人/日

イ 地域・家庭への情報啓発

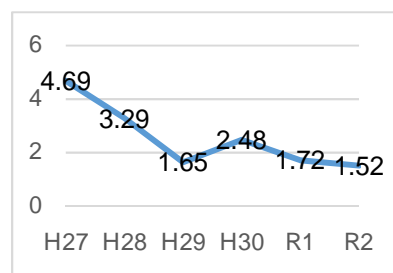
家庭で調理等を実践する力をつけるために、給食センターから何を発信できるかは重要な要素である。そこで実践力に



着目し、市のケーブルテレビと協力した「給食メニュー紹介」に取り組んでいる。学校で学習したことを家庭で振り返られるように知識を伝え、動画を通じて実践を促すことを目指している。市の食育推進計画の行動目標にもリンクさせた内容にし、市全体の食育推進に寄与できるよう工夫をしながら発信している。

2 成果と課題及び今後の方向性

学校給食摂取基準を踏まえ、児童生徒の身体状況及び生活活動強度の実態に応じて運用した取組によって、12校全てのクラスに適切な配食量による給食の提供が可能



となった。養父市の小中学校の喫食状況はもともと残食量が少ないが、この取組の導入後、更なる残食量の減少傾向が見られたことから、給与栄養量がほぼ充足していると評価できる。給食指導の内容等にも工夫を凝らしながら、今後も継続して取り組みたい。

一方、地産地消については課題が残る。その使用量は重量ベース（米を含まない）20%台を推移し、県や市の目標に届いていない状態が続いている。地場産物活用献立の工夫は継続しているが、大規模になった養父市の学校給食において、いかに効率的な地産地消率の向上を図るか、重量ベース（米を含まない）30%を目指し、市や地域の生産団体等との連携強化と更なる協議を図っていく必要がある。

学校給食を生きた教材として有効活用するためには、食に関する指導の全体計画をもとに献立を作成することが重要になる。日々の献立が児童生徒にとって「生きた教材」になるよう、学校と連携しながら日々ねらいを持った献立をたてることを目指したい。また、家庭での実践も視野に入れ、学校や家庭・地域との連携を深めながら食に関する指導を展開していきたい。

3 高等学校

総合学科の在り方とは

～これまでの課題を見直し、新たな取り組みへ～

兵庫県立伊丹北高等学校
教諭 寺西 友理

1 はじめに

本校は、昭和48年に全日制普通科として開校し、平成12年に総合学科に改編した全日制高等学校である。『社会の変化に主体的に対応できるこころ豊かな人間』を育成することを教育

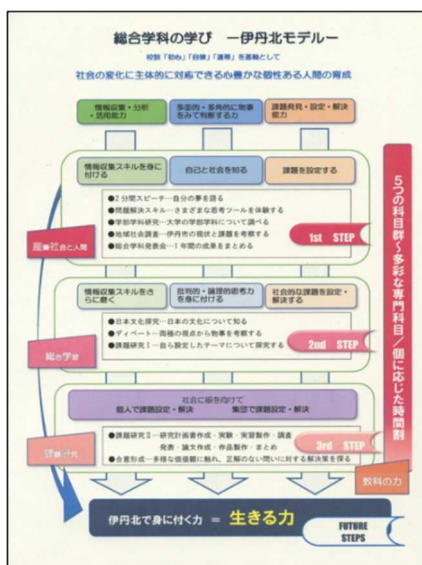


図1 伊丹北モデル

目標として掲げている。教育理念の根幹に一貫してキャリア教育を位置づけ、「伊丹北モデル」(図1)を作成し、3年間を通じたキャリア教育計画を立て、生徒の基礎的・汎用的能力を育成するとともに、生徒が明確な目標を持ち、主体的に判断する「未来につながる人間力」を学校全体で育成している点を評価され、平成30年度にキャリア教育優良校として文部科学大臣表彰を受けた。

本校では「人文国際」「自然科学」「芸術文化」「情報メディア」「健康福祉・スポーツ」という5つの科目群を設置しているが、類型やコースと違い、5つの科目群は選択を縛るものではない。将来就きたい職業や進路希望から興味ある分野を深く掘り下げ、一人ひとりのニーズに合わせて複数の科目群から自由に選択することができる。卒業生の8割が大学進学を目指していることもあり理数や外国語に関する専門科目、学校設定科目を数多く設置している。

2 本校のこれまで取り組み

普通科を母体として総合学科に改編された本校は、将来の職業選択を視野に入れ、自己の進路への自覚を深めさせることを意識して、様々な取り組みを行ってきた。普通科ではできなかったこと、総合学科だからできることを探し求めてきた。本校では、平成30年度入学生まで、1年次で「産業社会と人間(以下「産社」)2単位」、総合的な学習の時間を2年次で「総合学習(以下「総学」)1単位」、3年次で「課題研究(以下「課研」)2単位」と分割し、実施してきた。

1年次生の最初に「産社」では2分間スピーチに取り組む。「将来の夢と私の取り組み」というテーマで全員がスピーチを行う。もちろん、全員が将来の夢を描いているわけではないが、ここで自分の夢を他の生徒の前で語ることが、自分の人生設計のきっかけとなる。また、クラスメイトの真摯な姿勢に触れることで、まだ夢を持っていない生徒には刺激となる。この2分間スピーチの雰囲気は現在でも受け継がれており、本校での学びの第1歩となっている。上級学校への進学を多くの生徒が考えている総合学科であり、生徒の科目選択も進学を念頭においた普通科目を中心に考えている。しかし、生徒の意識が「自分の長い人生・職業選択を考えた結果この大学に進学したい、それに向けて科目選択を行ったら、普通科目をたくさん選択した時間割になった」という点が大切である。そこには、自分の責任で組み立てた時間割という意思が働き、必然的に授業に取り組む姿勢も熱心なものになる。

3 新たな取り組みへ

時代が変化し、社会が求める人材が変化していく中で、普通科高校と本校との差別化が難しくなってきた現状の打破、令和2年度から始まる「総合的な探究の時間」の先行実施を見据えて、平成30年から本校の学びを見直し、単位数、学習内容の改編を行った。以下に2つの大きな改編について述べる。

(1)「自主体験学習」から「地域社会調査」へ

本校では、平成29年度まで「産社」の授業の一環で1年次の8月に3日間「自主体験学習」（インターンシップ）を行っていた。これは、生徒たちが自分の将来を考え、自分が将来就きたい仕事が体験できる事業所を自分で探し、自分で依頼の電話をかけ、日程の交渉をするというものである。生徒自身の主体性に任せられ、自分で交渉した相手先で、自分の将来に関わる経験をするのは、生徒たちにとって非常に有意義なものであった。地方の鉄道会社に依頼して辺境の駅で体験する生徒、産婦人科で実際のお産の場に同席させてもらった生徒など、自分の将来の糧となる学びを経験できた生徒がいた。しかし一方で、生徒自身も深く考えず、身近な店舗でアルバイトと同じような経験しかできなかった生徒がいたことも事実である。また、専門学校・普通科高校もインターンシップ事業を始めたこと、また受け入れ先での複数のトラブルから事業所側がインターンシップ事業をやめたケースや、受け入れる事業所側に余裕がなくなり断られるケースも多発した。生徒からも教員からも得るものが多いと高評価であった「自主体験学習」ではあるが、まだ社会をあまり知らない、職業を知らない生徒たちにとって、視野を広げること、社会の課題を発見する、設定する、という部分では物足りないものがあつた。

そこで、平成30年度より、8月に行っていた「自主体験学習」をやめ、9月から11月にかけてグループで地域の課題を見つけ、解決する「地域社会調査」に改編した。

この単元は身近な社会問題に眼を向け、「伊丹」に対する理解を深めるとともに、課題発見力や課題設定力の育成を目的として実施している。生徒は、自分の興味ある分野あるいは、解決したいと考える課題に対して、グループで調べ、話し合い、現状分析を行い課題を見出す。そして、その課題の解決策について考察する。その後、自分たちが設定した課題に関連する事業所（市役所や公共施設、地域の商店や農家など）を訪問し、そこで働く方たちにインタビューを行い、自分たちが考えた解決策について意見交換を行う。それぞれのグループの研究成果を全体発表会で舞台発表を行い、様々な観点から伊丹市の現状や課題、その解決策を聞き、自分たちがこれから社会とどのように関わっていくのかを考える機会としている。

初年度（平成30年度）は、伊丹市役所の各課をはじめ、警察、スポーツセンター、小学校、公設市場などの公共施設や、地域の農家や商業施設、郷土文化保存会などたくさんの方々にお世話になった。例えば、『伊丹の観光地である「荒牧バラ公園」への来場者を増やすためには』という課題を設定したグループは、スタンプラリーやHPのデザインなどを提案した。事業所の方にこれらのことを提案し、意見交換する中で、「費用対効果の考え方」「市街地にある観光名所にあまりに大勢の人が来場すると市



事業所の方と意見交換する生徒

民生活に支障が出る可能性もある」など、新たな視点からの気づきを与えていただいた。地域の方たちが、自分たちの取り組みに興味を示し、意見に耳を傾けてくれることに生徒たちは驚きと喜びを感じ、自分たちが今できることは何か、これから自分たちがどのように行動するべきか、について意識するようになった。

昨年度（令和元年度）は、伊丹空港に隣接するスカイパークに顔出しパネルを設置するという案が実現し、生徒たちが実際に顔出しパネルをデザインした（令和2年12月に設置）。



本校生徒がデザインした顔出しパネル

本年度は、過去2年の取り組みを受けて、課題発見も大切だが、相手先の要望に沿って課題解決することにも意味があるのでは、という意見が校内から出ていたため、過去にお世話になった6つ事業所に、合計12の課題の提示を依頼した。それらを「君たちへのミッション」という形で生徒に紹介し、生徒たちはグループに分かれ、課題の解決策を協議した。途中で、意見交換会という形で、事業所の方たちにプレゼンテーションを行い、問題点の指摘やアドバイスを受け、最終的な提案を全体発表会の場で披露し、事業所の方たちから助言をいただいた。事業所の方から「自分たちにはない発想を聞いて新鮮だった」「持ち帰り、検討したい」との声を直接聴くことは生徒たちの自信となり、また改善点を指摘されることが今後の糧となった。

（2）合意形成 ～3年間の学びを生かして～

令和2年度から、「総合的な探究の時間」として、2年次で「総合学習（以下「総学」）2単位」、3年次で「課題研究（以下「課研」）1単位」と分割することとなった。そのため、3年次の夏で「課題研究」の論文を書き上げ、3年間の学びの集大成として「合意形成」を実施することにした。本格的な導入に先駆けて、令和元年度に実施した内容について以下に示す。

ア 「合意形成」の位置づけ

「合意形成」とは、予測不可能な世の中の課題に対して、その課題に関連するそれぞれの立場の人々のメリットやデメリットを考えながら、一番有益な新たな考えを導き、問題解決を目指すことを言う。社会の様々なことに関心を持ち、情報を活用し問題解決に取り組めるようになること、物事を長期的展望で幅広く捉えながら、問題解決力を身に付けること、それぞれの立場と利害を尊重し、そのいずれもが満足することができるような創造的なコンセンサス案を模索することを目的としている。「産社」「総学」「課研」の内容に準じ、「自ら学び、考え、まとめ、発表する」力が発揮され、「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性の涵養」につながる取り組みである。

イ 単元の流れ

個人で行う課題研究を10月に終え、11月から集団で課題を解決することを目標に、導入（ステージ）・展開（ステージ）・発展（ステージ）の3つのステージを用意した。

ステージでは、「NASAゲーム」と「誰がなぜゲーム（Who & Why Game）」を行った。「誰がなぜゲーム（Who & Why Game）」とは、多様なアクターの利害に関わる決定（たとえば公共施設の設置など）を誰が行うべきか、その決定権を持つのは誰なのかをめぐってアクター間で議論を

重ね、正当な権利を持つべき人、その権利の根拠について、合意を目指すゲームである。関西学院大学 野波寛教授をファシリテーターにお迎えし、実施していただいた。ゲーム形式ではあるが、立場が変わると意見が変わること、未来という視点から現在の課題を考える必要があることを学ぶことができた。また、「NASA ゲーム」では、「合意形成」の結果を数値化することで、自分の意見を主張しすぎること、他人の意見を聞きすぎることのデメリットを体験させた。この2つのゲームを通して「合意形成」をイメージさせることができた。

ステージ では、「がん治療に必要な先進医療を保険適用にはどうか」「自動運転車にプログラミングをする際に、誰を守るようにプログラムするのか」「自治体は誰の意見を優先して私立保育所の新設の許可を与えるのか」という3つのテーマに分かれ、課題研究の講座を母体としたグループを作り、「合意形成」を行った後に、自分の考えを小論文にまとめた。



誰がなぜゲーム(Who&WhyGame)を行う生徒



ステージでの合意形成の様子

ステージ では、「海洋プラスチックごみ対策について考える」を年次共通テーマに設定し、16人程度のグループを再編成し、「合意形成」を行った。全体発表会では、野波教授をファシリテーターにお迎えし、各グループでの合意から生まれた解決策を年次全体で共有し、全体の合意を目指した。ディベートと違い、他者の意見を受け入れること、それを踏まえて自分の考えを深める経験は、教員・生徒たちにも好評であった。

生徒からは「自分の意見を押し付けるだけでなく、相手の意見を聞きながら、自分の意思を伝えることが大事だ」「国際的な問題は価値観や考え方の異なる外国の人と合意形成する必要があるから、さらに難しいのだろう」「社会の問題に対し、自分で考え少しでも問題解決を行うことが、これから将来世代に責任を負わせないためにも大切なんだ」などの感想が出され、世界、そして未来を見据えた思考を促すことができた。

4 おわりに

平成30年度から始めた新しいプログラムは、毎年修正を加えながら実施している。上級学校への進学を希望する生徒が多い本校において、教科の学習と総合学科の学びとのバランスは非常に難しい。なぜなら、総合学科の学びの特徴を出しやすい「産社」や「総合的な探究の時間」に膨大な時間を割くことは困難を極めるからだ。さらに、大学入試が変革していく中で、それに対応できる力をつけるという視点も忘れてはならない。総合学科での学びの経験を上級学校への進学の道につなげる可能性を模索すること、進学後も総合学科での学びを継続できるようなプログラムに修正していく必要がある。総合学科としての本校の存在意義を問い続け、教員自身が考え続けることが総合学科に求められることなのかもしれない。

ICT を活用した英語指導改善と成果の伝達

兵庫県立宝塚西高等学校

教諭 上本 善之

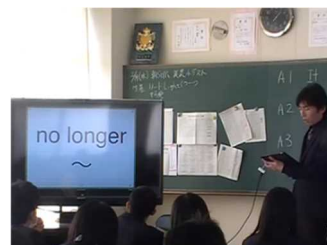
1 取組の内容・方法

(1) 教育の ICT 化

2012 年に第二世代型 iPad(iPad2)が発売されて以降、授業に各種 ICT 教材を取り入れてきた。上手くいったこともあれば、そうでないこともあるが、トータルで見れば ICT 教材の果たす役割はこれからの英語教育において不可欠であると考える。

(1) 1 iPad の活用

私が授業に iPad を導入した当初はまだ各県立高校に大型ディスプレイ(TV)が導入されておらず、授業での活用方法は限られていた。しかし、その約 1 年後に大型ディスプレイが導入されたことで、授業での活用の幅は驚くほど広がった。



- ・フラッシュカードアプリを活用した単語活動[Flashcards Deluxe]
- ・音声速度変換アプリを活用した様々な音読活動[Audipo]
- ・生徒の作品やパフォーマンスを撮影、画面に投影して共有[カメラアプリ]
- ・効果的な導入のためのプレゼンテーションスライド作成・投影[パワーポイント]
- ・授業のテーマを広げるための関連動画の紹介[Youtube・TED]

など、活用手段はアイデア次第で無限であり、他にも授業中に分からないことがあればその場でインターネットブラウザや辞書アプリで調べたものを画面に投影して生徒に見せる即応性もあり、授業には欠かすことのできないものになっている。しかし、教科書をノートアプリに取り込んでディスプレイに投影して授業をした時には、席が後ろの方の生徒から文字が小さくて見え辛いという指摘があったため止めた。教師の自己満足で ICT 教材を使うのではなく、あくまで生徒にとって効果的な場面でのみ ICT 教材を活用しなければならないことを学んだ。

(1) - 2 動画サービスの活用

言語習得には、自分の音声を自分で聞いて改善点を見出すことが有効である。魅力的な英語話者は、音声面だけでなく、表情や視線などの非言語的コミュニケーション能力も高い。各レッスンのまとめ活動として行ったポスタープレゼンテーションでは、生徒一人ひとりの動画を撮影し、Youtube の限定公開を利用して、各生徒が自分の



プレゼン動画を視聴できるようにした。各自がセルフリフレクションに取り組み、着実に音声・非音声、両方のコミュニケーション能力を着実に向上させた。

また、近年は動画による学習機会が増加し、各教育業者による動画サービスも充実している。私は2015年よりYoutubeを利用した反転授業に取り組んだ。授業での言語活動の時間を増やすためにYoutubeに文法解説動画をアップロードし、それを視聴してきた前提で音声活動をメインとした授業を実施した。その時にアップロードした文法解説動画は再利用可能なものなので、継続的に利用している。



(1) - 3 ライティング添削サービスの活用

令和元年度に卒業した本校41回生の指導では、1年次にエッセイライティング活動を行った。テーマを与え、書いたエッセイを添削し、グループで回し読みをして感想を書くというもので、一定の効果を得た。しかし、実施頻度を増やすと教員の手間が増えることが悩みであった。そこで2年次では、啓林館のスマートコレクションを導入した。生徒がパソコンでエッセイを書き、それを海外の採点者が添削、コメントをしてくれる。生徒に十分なライティングの機会を提供しつつ、教員の時間を削減できるという時間対効果の大きいサービスであり、また採点者のコメントが非常に丁寧で、一人ひとりに文法の間違いや文章校正のポイント、やる気を出させるようなポジティブなメッセージを返してくれる。したがって、単なるライティング活動ではなく、外国人と直接やりとりをする貴重なコミュニケーションの機会にもなる。指導をアウトソーシングすることに心理的抵抗のある先生方も少なくないと思うが、すべてを自分の手で行うことが必ずしも生徒にとって最良とならない。空いた時間を自らの指導力向上や授業準備に割り当てれば、生徒に対する教育効果を最大化することがで

コメント

That's a really nice paragraph! You have clearly stated your position on the matter with reasons to support your opinion. Urban areas as everyone knows offers services, entertainment, jobs, medical services and on and on in close proximity. It's well written. However, you made some grammatical mistakes in your paragraph. You made a spelling mistake in the third sentence of your paragraph. Be careful for the next time. You omitted a necessary preposition and a conjunction word in the same sentence. A problem of your paragraph is you didn't write any demerits of an urban area. It would have been great if you had written some necessary words in different sentences to express your thoughts properly. I think it's really important for you to focus on things such as spelling, punctuation, and grammar. No one's writing is free of error. Don't give up. Overall it's a super paragraph. You're really special.

ネイティブ添削者によるフィードバック。これほどのフィードバックを全員に行うのは物理的に難しい。

(2) 成果の伝達

上記 ITC を活用した取り組みや、私が蓄積した英語教育に関する知見や指導法については、校内外の教員と広く共有した。

(2) - 1 校内での情報共有

現任校に赴任した時点では、まだ ICT 教材が広く活用されていない状態であった。赴任後、まず大型ディスプレイの保管場所と設置台数を確認し、各フロアで自由に教員が使用できるように外国語科教員の協力を仰いで再配置した。翌年には、校内の先生方を対象に授業における ICT 教材活用講座を実施した。自由参加であったにも関わらず、多くの先生方が教科を問わず参加していただき、これを機に、ディスプレイや iPad 等の ICT 教材を授業で活用される先生方も増えた。



(2) - 2 校外での情報共有

平成 28 年に英語教育推進リーダー育成研修に参加し、翌年の各地区における伝達研修の講師を務めさせていただいたことを契機に、いくつかの講演会やワークショップで ICT 教材活用法や英語指導法を数多くの先生方にお話しさせていただく機会を得た。



- ・平成 30 年 6 月 「英語を活用した授業研究」講師 主催：兵庫教育大学大学院
- ・平成 30 年 9 月 「英語 4 技能指導研究会」講師 主催：ベネッセコーポレーション
- ・平成 30 年 10 月 「チャレンジ留学講演会」講師 主催：兵庫県高等学校教育振興会
- ・平成 31 年 1 1 月 「兵庫県高等学校教育研究会英語部会丹有支部研究大会」講師
主催：兵庫県高等学校教育研究会英語部会
- ・平成 31 年 1 月 「兵庫県高等学校教育研究会英語部会研究大会」講師
主催：兵庫県高等学校教育研究会英語部会

各講演会やワークショップでは、ICT と英語指導法以外にも、私の信念である「効果的な動機付け」についても言及し、アンケートでも数多くの好意的なフィードバックをいただくことができた。また、指導の中で特に大きな効果のあった 3 つの活動については、「兵庫教育 令和元年 5 月号」に掲載していただいた。

2 取組の成果

(1) ICT 活用について

ICT を活用した取り組みにより、生徒に効果的なフィードバックを行うことができた。右図は、2018 年 7 月に受験した GTEC と、半年後の 2019 年 1 月に受験した GTEC スピーキングスコアの比較である。劇的な伸びであるが、これは活動そのものの効果だけで

①校内平均スコア&グレード ②スピーキングスコア成績分布(人数)

実施回	今年		前年	
	18年度No. 3 A	18年度No. 1 A	18年度No. 3 A	18年度No. 1 A
人数	39	39		
スコア	150.1	118.2		
グレード	6	4		

グレード	スコア	今年		前年	
		人数	割合	人数	割合
7	170	5	5	0	0
6	150~	18	23	0	0
5	130~	11	34	3	3
4	110~	4	38	31	34
3	90~	0	38	5	39
2	70~	0	38	0	39
1	0~	0	38	0	39

はなく、活動を通して「動機付け」された生徒が、自ら努力を欠かさなかった結果であろう。生徒のスピーキングの伸びがよく分かる動画を右記の URL、または QR コードからご覧いただきたい。反復とセルフリフレクションの効果を実感していただけるだろう。(こうして指導の成果を直接確認していただくことができるのも、動画サービスの利点の一つである)



<https://youtu.be/ZhBXzkucXSg>

またライティングについても顕著な伸びを確認できた。以下は 2 年次の 3 学期に、英検準 1 級と 2 級を取得した生徒のそれぞれのスコアである。

準 1 級						2 級					
英検 CSEスコア	総合スコア	Reading	Listening	Writing	Speaking	英検 CSEスコア	総合スコア	Reading	Listening	Writing	Speaking
	2460 (3000)	566 (750)	570 (750)	750 (750)	574 (750)		2127 (2000)	490 (650)	476 (650)	650 (650)	511 (650)

両者ともライティングのスコアが突出して高い。日本人英語学習者の傾向としてエッセイライティングを苦手とする受験者が多いため、相対的にスコアが高くなっている可能性もあるが、他にも多くの生徒がライティングセクションで高得点を得て合格していた。

もちろん、スピーキングやライティングは ICT を活用した取り組み以外にも様々な活動を行ってきたため、一概に ICT 活用の成果であるとは言えないが、私の実感としては、間違いなく効果はあったと言える。

(2) 成果の伝達について

私が赴任した 5 年前、本校の英語科教員の iPad 等の ICT 機材の使用率はほぼ 0 % であったが、現在では 8 割以上の教員が iPad、またはそれに準ずる機材を利用して授業を行っている。令和 2 年度には各教室にプロジェクターが導入されたが、本校の教員はそれらの機材もスムーズに活用できているようである。

また、各地での講演会終了後には、本校にわざわざ電話をいただき、使用教材や指導法の質問をされることも多々あった。微力ではあるが、本校の ICT 化、および本県の英語教育の発展に寄与できたものと自負している。

3 課題及び今後の取組の方向

1 - (1) でも触れたが、ICT は必ずしも万能ではない。また、教師の指導力不足を補ってくれる存在でもない。英語力、指導力、求心力、人間力、そういったものが備わっていなければ、魅力的な教師になることはできないと思う。兵庫県高校生英語ディベートコンテスト運営委員会事務局を四年間務めさせていただいたが、大会に参加してくる高校生を見て思うことは、「学びに対して強く動機付けされている生徒が一番伸びる」ということである。教師として、これからも生徒の知的好奇心を刺激し、自立した学習者を育てていきたい。

「自然科学系部活動での実践事例を生かした課題研究指導法の開発とその普及」

兵庫県立宝塚北高等学校

教諭 木村 智志

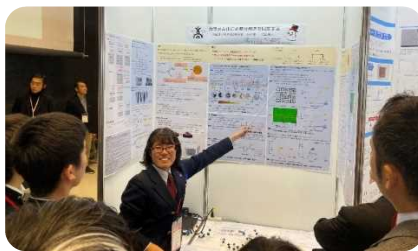
1. 取組の経緯・内容・方法・成果

私は大学の専門が分子生物学で、教員採用時の専門科目は生物であるが、現在勤務している学校では校内の事情もあり数年間は生物基礎と理数化学が中心で、生物(4単位)の指導から離れることも多かった。また、前任校(県立西宮香風高等学校)でも科学部を担当し、生物だけではなく化学や物理の研究も行っていた。このような経験から、赴任時には生物部ではなく新設された化学部を担当し、3年目の夏から主顧問を5年務めている。このように生物教員として採用されながらも理科全般の探究の指導を行うというなかで「どのように生徒の研究と関わるべきか」ということを考える機会が何度もあったことで探究活動の指導という領域に関わる機会が増えてきた。転機となったのは4年前で、グローバルサイエンス科(以下 GS 科)の担当教員となり、部活動だけでなく授業としても探究活動の指導に当たることになった。現在は SSH(1期2年目)の中で、学校設定科目の開発を中心とした業務を担っており、「課題研究」に向けた様々な探究的なトレーニング実習の指導案・教材・評価法の開発等を取り組んできている。また SSH に指定されたことを機に、3年前より本校が SSH 申請に向けた準備時期から実施している「(生徒主導の)課題研究のためのトレーニングのプログラム」の探究基礎実習の取組について、令和3年度から他校の教員でも実践しやすい形で公開を目標にしており、自主的研修等を通し、草の根方式で SSH ではない理数系の類型を持つ教員と共有し、改善改良を行ってきた。一方で課題研究の指導では前任校でも生物の研究を指導する機会はあまりなかったが、現在の勤務校ではその状況はより顕著になり部活や課題研究のどちらにおいても、生物系よりも化学系や数学情報系、地理系を担当するケースが多い。そのような中で、私は SSH 指定前から「生徒が自走した研究活動を行わせるにはどうすればいいか」ということについて取り組んできており、今回はその取り組みについて報告する。

(1) 化学部での取組と成果

化学部は私が着任した年に部に昇格した。当初は SSH に申請することもないような学校であったことから、グローバルサイエンス科の生徒はほとんど入部せず普通科の生徒が中心の小さなクラブであった。しかし、前任の顧問の力もあり、当初よりグローバルサイエンス科の課題研究や他の SSH 校の自然科学系部活動の活動にも引けを取らないような実績を残してきた。前任者から引き継いだ時には2名という状況であったが生徒達にも恵まれ、それ以降も同様の実績を残すことができた。これは、上級生や卒業生からのサポートが大きいと考えている。冒頭に述べた通り、私は化学専門ではないため卒業生を活用するような体制を構築してきた¹。そんな中、小人数の部活動では頻発する「空白の学年」ができたとき受験勉強の息抜きがてらに 10～15 分程度顔を出して部員の悩みや詰まっているところと一緒に考えてくれたりする上級生がおり、その生徒は進学後にも積極的に協力してくれるようになった。その結果、発表練習や論文チェック、文献の調査や(高校範囲を超える内容の)ミニ講義などを通して、顧問も新入生と一緒にしながらテーマについて学ぶことができ、教員の負担感が軽減できた。さらに、この体制を構築したことにより隔年で起こっている「空白の学年」も今のところあまり問題になっていない。これらのことは 2019 年度には令和元年度全国スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会において科学技術振興機構理事長賞(2,3位相当)

の受賞及び ISEF(国際科学技術フェア)2020 の日本代表を輩出することに繋がった。



JSEC2019 最終審査会にて発表する化学部の生徒

また、本年度のようなコロナ禍においては 2 年生が空白の学年となっていたにもかかわらず、オンラインでの発表練習やミニ講義などを積極的に行うことで、ほぼ引継ぎができなかった今年は大学 1~3 年生がフォローしてくれた。全国大会での受賞歴や日本代表であった卒業生がこれらの指導してくれたことは、コロナ禍で膨大な雑務に追われる教員にとってもかなりの負担軽減となり助かっただけでなく、一年生のみチームにもかかわらず、新規テーマで県総文祭最優秀賞、継続テーマでは高校生高専生科学技術チャレンジで入選という成果が出たことは、部の良き流れを踏襲することに繋がった。

¹日本化学会誌「化学と教育」第 68 巻(2020)「化学部ただいま実験中」にて発表



卒業生によるミニ講習会の様子

(2) 自然科学系部活動での取り組みを応用した課題研究の指導とその成果

先に述べた通り、私は SSH 指定前から「生徒が自走した研究活動を行わせるにはどうすればいいか」ということについて取り組んできており、前任校での取り組みや化学部での取り組みを教育課程上に設置される「課題研究」に導入することとした。しかし少人数の部活動と授業とでは大きく異なる。そこで、教材開発において部活動を活用することとした。例えば新たな探究実験の題材を思いついた場合、主に化学部の生徒に遊び感覚で課題を出し、それを解決する様子や終わった後の反省会の内容を踏まえ、授業の教材として成立するか、伸ばしたい力がどの程度伸びるかを検証することで、授業で実践する教材の選択、改良を行った。また、探究トレーニング実習²だけでなく、化学部での取り組みの成功例、失敗例を参考に「リサーチプランの作成」、「口頭発表のポイント」、「研究論文の書き方」といった研究の要点をまとめた教材を作成した。

これらの取組を受けた生徒は、課題研究だけでなく数学理科甲子園での好成績や科学系オリンピックの競技系と呼ばれる科学コンテスに挑戦する生徒の増加などにも繋がったと考えている。

また、化学部において顧問が変わっても、部員が少なくとも引き続き成果が出ているのは卒業生

のサポート体制によるものである、という仮説を検証するために課題研究についても卒業生による論文チェックや発表練習、研究相談等を一部導入した。その結果、3年間で日本学生科学賞の全国中央審査進出(2件)、高校生高専生科学技術チャレンジでの入賞(1件)、学会における高校生発表での受賞(3件)などに繋がったと考えている。

²日教弘兵庫支部 研究助成論文(2019)にて発表



探究基礎実習「BB弾の数を素早く正確に求める」の様子



探究基礎実習「地震データを読み解く」の様子

(3) 県高文連自然科学部での実践

前任校が定時制であったことから、探究活動を指導した経験を持つ教員がおらず、手探りの状態からの部活動の指導に直面した。幸いにも兵庫県の高等学校文化連盟に自然科学部門が発足した時期であり、先輩教員方の勧めもあり、黎明期に近い時期から役員を経験させていただいた。事務局員や委員長を担当するようになってからは「特に予算的に恵まれていない学校ではどうすべきか」「どう指導したらいいかわからない」といったことを当時の同年代の教員ではよく議論になり、生徒のリーダー研修だけでなく教員側の研修を求める声が大きくなった。そこで、京都府の合唱部門、佐賀県の美術部門や長崎県の放送部門での研修会を参考にして、ベテラン教員を講師とした研修や、受賞したチームの指導教員による実践報告、審査委員会担当役員を交えた協議という形の教員研修会と、過去の受賞した卒業生によるポスタープレゼンテーションの生徒向けリーダー研修会を企画・運営した。また他府県の生徒との交流の場として近畿総文祭の代替大会となる近畿地区高文連自然科学部合同発表会を行い、兵庫県で行っている生徒相互評価を中心とした交流と研鑽の場を他府県に広げることができた。



自然科学部リーダー研修会「ポスタープレゼンテーション講習会」での卒業生による実演

2 課題及び今後の取り組み方法

個々の生徒の課題研究や部活動の研究を丁寧に指導しようとするとしても教員への負担が大きくなる。この課題に対しては学校全体による組織的な支援体制の構築が必要になることは周知であるが、この負担改善策の一つが卒業生の活用であり、教材の共有であると考えている。そして私の取組を振り返ると、自身の経験から得た知見や開発した教材を他の教員と共有すること、SSHの開発課題の引継ぎという喫緊の課題も残している。

今回、本校の化学部での取組みをカリキュラムの活動である課題研究に導入したことで大きな成果が上がった。さらに卒業生の活用の活用は教員の負担軽減だけでなく、生徒の成果にもつながった。現在は課題研究だけではなく物理部や生物部にもこのサポート体制を導入しようとしており、先日行われた生物部の日本生態学会での受賞にも繋がった。一方参加してくれている卒業生はこの体制に参加することで自分自身にもメリットがあると答えてくれており、卒業後の教育としても効果があり、伝統校とは違った卒業生と高校の関係づくりにもつながるかもしれないと期待している。しかし現状はボランティアやそれに近い形で卒業生の活用であることから、組織的に活用するとなると限界がある。より効果的に活用するためにも今後は卒業生への情報公開や依頼体制、謝礼等の整備などを行っていく必要がある。

最後に、費用面については国立研究開発法人科学技術振興機構のスーパーサイエンスハイスクール事業だけでなく、日教弘兵庫支部や公益財団法人武田科学振興財団による研究助成、理科の散歩道の執筆料などにより、支援を受けることでこれらの取組を実施できました。また、今回の表彰は前任校も含め、恵まれた生徒と卒業後も在校生へサポートや研究支援、ヒヤリングに協力していただける卒業生、家庭よりも教育公務員としての立場を優先し平日だけでなく休日や夜に積極的に情報交換会や懇親会、研修会に自主的に参加することに理解を示してくれる家族あつてのことであり、厚く謝意を表します。

今後は私を取り巻く恵まれた環境に甘えることなく、引き続き自身が楽しみながら探究活動についての探究を楽しみながらも、今後も活動を続けていきたいと考えている。

第67回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会を通して

兵庫県立社高等学校
教諭 徳平 孝子

1 学校家庭クラブの概要

昭和23年にホームプロジェクトと同時に家庭科教育に取り入れられた学校家庭クラブの活動は、学校や地域の生活の中から課題を見出し、課題解決を目指して主体的に計画を立てて実践する課題解決的な学習活動です。家庭科で学習した知識と技術を学校生活や地域の生活の場に生かすことができ、問題解決能力と実践的態度はもとよりボランティア活動など社会参画や勤労への意欲を高めることができるもので、学習指導要領においても引き続き、重視し一層充実させるよう明記されています。

全国高等学校家庭クラブ連盟は、県ごとの活動やブロックごとの活動が全国的な組織へと発展したもので、学校家庭クラブ活動を推進する役割を果たしています。毎年、本部の主催するホームプロジェクトと学校家庭クラブの研究発表大会が行われ、同時に全国の家庭クラブ員が一堂に会して総会や交流会を行う大変意義のある場になっています。

この第67回大会が令和元年度、39年ぶりに兵庫県で開催され、県立社高等学校の生徒が事務局を務めました。私は、事務局長を務めるにあたり、平成27、28年に兵庫県学校家庭クラブ連盟の事務局を担当し、同時に平成27年県大会で発表、28年に近畿ブロック代表としてホームプロジェクト部門で第63回北海道大会の出場生徒の指導にあたりました。その後、3年間事務局としての仕事を行いました。

2 取組内容

(1) 専門部の業務分担と生徒の学び

業務分担は、すべての加盟校に協力を仰ぎ、家庭に関する学科が各専門部を担当しました。各専門部の生徒委員長が生徒実行委員会で方向性を決め、大会のスムーズな進行のために、十分な練習と準備を整えました。

業務分担	専門委員長校	業務内容
第1専門部	県立社高等学校	総務、庶務、渉外、会計、昼食、司会進行 役員会、総会、生徒実行委員会、交流会
第2専門部	県立山崎高等学校	会場設営、危機管理、救護、美化、交通
第3専門部	県立西脇高等学校	受付、案内、接待、アトラクション
第4専門部	県立小野工業高等学校	研究発表、発表者誘導、スカラシップ、 オープニング
第5専門部	県立佐用高等学校	審査、表彰、賞品、大会記念品、販売、宅配便
第6専門部	県立松陽高等学校	広報、記録、DVD、展示、掲示、インタビュー FHJ誌

平成30年度は、実行委員会の生徒とともに、東京大会を視察し、その後兵庫県の研究発表大会を次年度のプレ大会とし、本番に使用する会場で業務分担し、生徒が実際に運営してみました。初めての経験に戸惑いながらも、次年度にむけての課題を見つけ、改善にむけての話合いや準備が本格的に始まりました。

(2) 開催県の思い

「全国へ幸せ運ぶコウノトリ 笑顔と思いをつなげよう」のスローガンのもと、県下の加盟校の生徒が一丸となり、準備をすすめました。兵庫県は、阪神・淡路大震災の際に、全国の学校家庭クラブ加盟校から多大なご支援をいただきました。この時の全国の皆様からいただいたご支援に対する感謝の気持ちをこめました。当時を知らない教員や高校生に受け継いだものを伝え、その年がボランティア元年とされたように、ボランティアで人と人、人と地域がつながったようにそれぞれが協力し合い、笑顔を忘れずともに歩もうという前向きな思いをスローガンに込めました。そして、全国の皆様に復興した兵庫県を見ていただき、復興の過程で培った絆の深さや、高校生の社会参画力や無限の可能性を感じていただけるよう工夫をし、県下の生徒にも大会の意義とともに共有しました。



8月1日(木)		8月2日(金)
姫路市文化センター 小ホール	姫路市文化センター 大ホール	姫路市文化センター 大ホール
役員会	大会第1日	大会第2日
1 開会のあいさつ	1 オープニング	1 総会
2 大会実行委員長あいさつ	2 開会式	2 研究発表
3 議長団選出	開会のあいさつ	「学校家庭クラブ活動」
4 議長団あいさつ	国歌斉唱	3 アトラクション
5 議事	家庭クラブの歌斉唱	4 F H J スカラシップ
平成 30 年度会務報告	大会実行委員長あいさつ	留学生報告
平成 30 年度決算報告	主催者代表あいさつ	5 全国連盟事業報告
令和元年度新役員承認	共催者あいさつ	6 講評
令和元年度新役員代表	来賓祝辞	7 審査結果発表
あいさつ	来賓紹介	8 研究発表者表彰
令和元年度事業計画案	激励のこたば	9 閉会式
令和元年度予算案	祝電披露	連盟旗授受
令和 2・3・4 年度	連盟杯返還	次期開催地生徒代表
大会開催地について	3 研究発表	あいさつ
令和 2 年度大会開催地代	「ホームプロジェクト」	次期開催地紹介
表あいさつ	4 終了のこたば	閉会のあいさつ
6 感謝状贈呈	1 日目閉会	
7 閉会のあいさつ	生徒交流会(小ホール)	

(3) 家庭科教育の発展を目指して

学校家庭クラブの活動は生徒の活動ですが、全国連盟の主催する指導者養成講座などは文部科学省共催の教員の公式な研修の場でもあります。兵庫大会では、生徒だけでなく、全国の家庭科の先生方にも兵庫県の家庭科教育を見ていただきたいと思い、アトラクションと展示には、兵庫県の学校家庭クラブ活動の成果を披露しました。アトラクションは、平成16年度沖縄大会において学校家庭クラブ部門で文部科学大臣賞を受賞し、文部科学省「目指せ！スペシャリスト」や「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」の研究指定を受けた県立西脇高等学校生活情報科の「播州織ファッションショー」でした。展示室には、家庭に関する学科を中心として各校の取組の展示と商品販売を行い、家庭に関する学科が10年続けてきた東北ボランティアも紹介しました。生徒交流会の集会型と体験型ブースも県外の生徒と交流が深まるよう工夫しました。



ファッションショーでは、47都道府県のイメージでデザインされたシャツを含め、100着以上の作品が使用されました。中央の写真はコウノトリをイメージした、第27回全国産業教育フェア秋田大会全国高校生ファッションデザインコンテスト最優秀賞作品です。



展示室の商品販売、活動紹介の様子です。中央の写真は、県内クラブ員全員で制作した作品で、1つつまみグネットのつまみ細工を包装し、帰りに参加記念品として参加者に配布しました。



左の写真は全体の生徒交流会の様子です。生徒が趣向をこらして考えた兵庫県にまつわるクイズなどで交流しました。右の写真は、体験型交流のワークショップで5種類のブースを用意しました。

3 取組の成果

大会に参加した生徒は、この大会を交流の機会として他校の活動から学び、様々な情報交換をしています。ここで得た、研究への情熱や感動は、各校の生徒へと伝えられ、学校家庭クラブの原動力ともなっています。大会運営に関わった生徒は、大会に限らずあらゆる場面で成長が見られました。以下は代表生徒の学びです。

家族や友人のために自分にできることを考え、全員で意識を変えていく研究をするホームプロジェクトと学校全体で地域と関わりながら地域活性化などの研究をする学校家庭クラブ活動の発表があり、家族とのつながり、地域とのつながり、人と人とのつながりなどのたくさんのつながりを感じる事が出来ました。私自身は、学校内だけでなく兵庫県の多くの方々と関わり、自らが率先して動くことで、自分に自信が持てるようになりました。それと同時に、多方面に気を配る力やコミュニケーション力を伸ばすことができました。この力を大学生活でも生かし、もっと多くのことを学びたいと思っています。また、運営の中で兵庫県の家庭科の先生の姿を間近で見ることができ、自分がなりたい教師像について深く考えることができ、高校の家庭科教員を目指す気持ちがより強くなりました。この大会で学んだことを次は教師として生徒に伝えていきたいです。

(生徒実行委員長)

運営を通して私は二つのことを身につけることができました。1つ目は先を見て行動する力です。2つ目は協調性です。複数校の多くの生徒が動く中で、自分だけがわかって行動してもスムーズに進めることはできません。事前に担当校が集まり、役割分担された自分の仕事を完璧にするだけでなく、周りの人の手伝いもできるように支えあう気持ちをもってリハーサルを繰り返しました。それにより本番でも不測の事態にそれぞれの担当がしっかり対応することができました。これは、みんなの気持ちが一つの目標にむかった結果だと思っています。このような貴重な経験ができたことに感謝し、身についた力をこれから社会に出て、発揮できればと思っています。

(第1専門部生徒委員長)

4 今後の課題

学校家庭クラブの活動は、まさに、新学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」「課題解決に向けた能力の育成」「地域の実情等を踏まえた教育課題の実施・評価・改善を行うカリキュラム・マネジメント」等の理念が実践されています。

兵庫県では、家庭科の教員が在籍している学校すべてが家庭クラブ連盟に加盟しているわけではなく、すべての学校の家庭科の授業でホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動が扱われているわけではありません。教員養成の大学の授業で学ぶわけではなく、家庭クラブの本来の意義を認識できるような働きかけが必要だと感じます。また、部活動の大会と同じように連盟に加盟するには、加盟費などが必要になるとともに、校務が忙しくなかなか指導に時間が取れないような学校もあります。生徒の学びを支えるため、家庭科教員自身が、周囲に活動を理解していただけるようにPRする必要も感じます。

経験、体験を通して大きく成長するということは日々の活動で実感していましたが、それは生徒も教員も同じです。大会を経験したからこそ、今後も家庭科教員として家庭クラブ活動に力をいれ、少しでも、将来へつながる、地域から全国へつながるような活動に、生徒とともに取り組み、充実した高校3年間を少しでも支援できればと思います。

「福祉教育の発展と充実を目指して」

兵庫県立龍野北高等学校

教諭 上田 貴美

1 はじめに

「専門教科に関する教科『福祉』を新たに設ける必要がある。」と示されたのは、平成10年7月23日の理科教育及び産業教育審議会答申においてである。福祉関連業務に従事する者に必要な社会福祉に関する基礎的・基本的な知識と技術の習得、社会福祉の理念と意義の理解、社会福祉の増進に寄与する能力と態度の育成に関する教育体制を充実し、これらの人材育成を促進するために教科「福祉」が必要であるとされた。

これを受け、平成11年3月29日、高等学校学習指導要領に専門教育に関する教科「福祉」が新設されたのである。

その新設から20年を経て平成30年3月30日、高等学校学習指導要領が告示され、2回目の改訂がされた。高等学校における「福祉」の学びは、実に幅が広い。介護福祉士国家試験の受験が可能で専門的な職業人を養成する学校や介護職員初任者研修を実施し福祉の基礎的学習を行う学校、教養的な学びを通して福祉に興味・関心を持たせ、高等教育機関に進学を目指す学校等があり、それらの学校に応じた学びを網羅するカリキュラム編成が求められている。

2 取組の内容・方法

(1) 新学習指導要領及び解説の作成

今回の学習指導要領の改訂において、教科「福祉」は、第一に、職業人として必要な資質・能力の育成を目指すこと、第二に、社会の中で主体的に活用することができる知識や技術を身につけること、第三に、福祉に関する課題を発見し職業人に求められる倫理観を踏まえ合理的かつ創造的に解決する力を養うこと、第四に、職業人として必要な豊かな人間性を育み、より良い社会の構築を目指して自ら学び、主体的かつ協働的に取り組む態度を養うことを改善点としている。

作成にあたって、予測できない変化を前向きに受け止め、主体的に向き合い、関わり合い、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となるための力を育むことを念頭に置き、座学中心から実技や演習を中心とする学びや職業人に求められる倫理観を更に充実させ、地域産業を豊かにするような人材の育成を行うために、何を学ぶべきなのかを模索するところからスタートした。それと同時に、平成29年10月、社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会より示された今後「求められる介護福祉士像」の10項目(図1)に即した介護福祉士を養成する必要があることから、幅広い福祉の学びをどのように学ぶのか、検討チームで幾度も議論を重ねた。



写真1 県福祉部会での研修の様子

(2) 教科「福祉」の教科書検定

福祉科の科目は従前同様9科目で編成されているが、教科書としては「社会福祉基礎」「介護福祉基礎」「コミュニケーション技術」「生活支援技術」「介護過程」「こころとからだの理解」の6科目しかなく、全科目揃っていないのが現状である。また、先にも述べたように専門的な職業人を養成するレベルから国民的教養レベルまでの全ての生徒が使用するものであるため、どこまで内容的に示すべきなのか判断が難しいところである。ただ、これまで直接生徒に指導するうえで、人間の尊厳を重んじることやその人らしさを重視した生活と

1. 尊厳と自立を支えるケアを実践する
2. 専門職として自律的に介護過程の展開ができる
3. 身体的な支援だけでなく、心理的・社会的支援も展開できる
4. 介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応し、
本人や家族等のエンパワメントを重視した支援ができる
5. QOL(生活の質)の維持・向上の視点を持って、介護予防からリハビリテーション、看取りまで、対象者の状態の変化に対応できる
6. 地域の中で、施設・在宅にかかわらず、本人が望む生活を支えることができる
7. 関連領域の基本的なことを理解し、多職種協働によるチームケアを実践する
8. 本人や家族、チームに対するコミュニケーションや、的確な記録・記述ができる
9. 制度を理解しつつ、地域や社会のニーズに対応できる
10. 介護職の中で中核的な役割を担う
+
「高い倫理性の保持」

図1 求められる介護福祉士像

自立を支援することの重要性と必要性を強く伝え

てきたつもりである。そのため、それらの基本的な福祉の理念を理解し、豊かな福祉観を身に付けて自らの人生を考え進んでいく学びができる教科書でありたいと考えている。2021年、教科書は採択・供給され、2022年より使用が開始される予定である。福祉を初めて学ぶ様々な生徒が福祉を楽しく学び、将来の福祉社会の人材育成につながる教科書ができることを期待している。

(3) 福祉教員の育成

昭和60年、全国に福祉科が初めて設置され、昭和62年に介護福祉士国家試験の受験資格が取得できる高校福祉科の卒業生が誕生した。その後、平成19年に「社会福祉士及び介護福祉法」の改正があり、従来の34単位(1190時間)では介護福祉士の養成はできなくなってしまった。そして、文部科学省と厚生労働省の示す時間数や教員要件など様々な要件を満たした学校が指定を受け「福祉系高等学校」が新たに誕生した。履修期間3年以上、養成時間52単位(1820時間)が養成条件となった。しかし、その後、平成23年にもさらに改正され、養成条件は、履修期間3年以上、養成時間53単位(1855時間)となり、現在全国で112校の「福祉系高等学校」が指定を受け、介護福祉士養成を行っている。その指定条件の一つに、教員への厳しい要件が示されている。それは、福祉系高等学校の教員として3年以上の経験を有する者であること。介護福祉士又は看護師の資格取得後5年の実務経験を有するものであること。又は実務代替研修を受講した者であること。介護福祉士又は看護師の資格を有する者であって指定の研修を受けた者。又は、資格代替講習を受講した者であること。医療的ケア指導教員には、医療的ケア教員講習会修了者であって医師、保健師、助産師、看護師の資格取得後5年以上の実務経験を有する者であることといった厳しいものがある。他教科の



写真2 講習テキスト

ように、教員免許を有するだけでは福祉系高等学校での専門教育ができないのである。令和元年度、福祉系高等学校での指導要件を得るために講習会が数年ぶりに開催された。その講習会に向けて作成したテキスト（写真2）では、約400頁に渡って介護福祉士の養成にかかわる制度や法律、教員に求められる資格や養成9科目について示しており、時代に即した介護福祉士養成のための教育内容となっている。10日間にわたって多くの教員が受講し、教員の質の向上にもつながったと考えている。

一方、4年制大学での「福祉」の教員免許養成は95校（令和元年度）と非常に少なく、年間約200人程度の免許取得者しか誕生していないのが現状である。教員採用においても全国で35名（平成30年度）、本県では2名が採用されているが、全国的に福祉教員の慢性的な人材不足は続いている。今後の福祉教育の充実のために、福祉教員の人材育成は重要な要因の一つであると思われる。

（4）介護福祉士養成課程運営ハンドブックの作成

（3）でも述べたように、平成23年の「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正により、介護福祉士を養成するために指導者や施設・設備、実習施設などに渡って様々な要件が示されるとともに、申請や報告といった多くの手続きが求められている。そのため、変更がある度に膨大な資料作成や報告をしており、教員への負担は大きくなっているのが現状である。その一方で、これら多くの要件や運営上の規定など非常に複雑な内容を周知できている人材が乏しい。これは教員の異動や世代交代等に伴い十分に引き継いでいないことなどから人材が育っておらず、全国的に大きな問題となっている。そのため、全国福祉高等学校長会が主導となり、若い先生方をはじめ、多くの高等学校福祉教育に関係する方々に向けた『福祉系高等学校教員ハンドブック2021』を新たに作成した。（写真3）この作成にあたっては、申請や報告等の細かな資料の作成方法やルールについて具体的に説明したり、Q&Aを設けるなどの様々な工夫を加え、初めて関わる教員にもわかりやすいよう作成した。



写真3 ハンドブック

（5）スーパー・プロフェッショナル・ ハイスクール（SPH）事業

『ソリューションフォーカスの視点に立つスーパー・プロフェッショナル・ケアワーカーの育成』を研究開発課題として「福祉」では全国で初めて文部科学省の指定を受け、「利用者本位の介護観」を培いつつ、実践に即した高い介護能力を持ち、自らの仕事に誇りを持った介護福祉士養成の教育方法システムの構築と評価方法の確立に向けた実践的な研究に取り組んだ。主に「生活支援技術」「介護実習」「介護過程」の3科目を連動かつ関連付けた教材開



写真4 学校デイサービス

発や指導書の作成及び指導法の研究。ICTを活用した教材開発や活用方法についての研究。社会福祉施設と連携した人材育成である。「チーム・協働・コミュニケーション」の3つに焦点をあて、生徒の成長につながる様々な科行事を実施し、地域との連携・協力を更に強め深化させたことにより、生徒の自主性・主体性だけでなく傾聴力、コミュニケーション力、思考判断力、課題解決力の向上と利用者との関わりを通して満足感や達成感、社会的有用感を得ることができた。また、介護の質を高める医療的ケアの指導マニュアルの作成を行ったり、幾つかの科目と関連強化を行ったことで学習意欲が飛躍的に向上するとともに、教員間の連携と協力体制の確立につながった。

SPH事業の様々な研究を通して、これまで以上に福祉や介護への強い情熱と高い誇りを有すると同時に、自らの知識・技術・技能に自信を持って地域福祉に貢献できるケアワーカーを育成することができるなど、大きな成果を上げることができた。

3 取組の成果

教科「福祉」がスタートし、各地で幅広い福祉の学びができるようになり、全国で「福祉」を学んだ多くの生徒が誕生し卒業している。特に福祉系高等学校の卒業生たちの進路状況を見ると進学率の78.8%、就職率の88.1%が福祉・医療分野を選択しており、中でも就職者は地元定着率が最も高い。反面、離職率は高卒者全体で4割程度の中、福祉系高校の卒業生は1割に留まっている。この現状からも福祉教育を受けた生徒たちが地域社会で幅広く活躍・貢献できる人材に成長し、地域福祉を支えているといっても過言ではない。我々の日々の教育活動が将来の地域福祉の拡充につながっており、今後も福祉教育の発展と充実に努めていきたい。

4 課題及び今後の取組の方向

最後に、今後の課題と取組として、まずは人材不足の緩和と育成であると考えている。福祉教員の中には、福祉系高等学校卒業生もおり、福祉に強い興味と熱意を持って教育を志した先生方もいる。しかし、相対的に若く経験も浅い傾向にあるため、教育内容や教育実践の好事例や教材活用等の教育実践の検討を行ったり、効果的な教育方法を示すなど学校を越えた教員間の交流やスーパービジョンが必要であると考えている。そして将来、学校と社会が共有し、連携しながら新しい時代に求められる福祉の資質・能力を育み、よりよい福祉教育を通じて、よりよい社会を創るよう励んでいきたい。



写真5 タブレットを活用した授業



写真6 医療的ケアの様子

「生徒の成長と安全・安心で居心地の良い場所づくり」

兵庫県立香住高等学校

教諭 小林 晋輔

1 はじめに

本校は、兵庫県北部に位置し、日本海に面した自然豊かな環境のもと、兵庫県唯一の水産系学科を有する伝統ある高校である。普通科、海洋科学科の生徒たちは、ともに地域に支えられ、地域に育まれながら成長してきた。海洋科学科においては、近年8割以上の生徒が親元を離れての寮生活を行っており、時には情緒が不安定になることもあるが、お互いに支えあいながら成長する姿が印象的である。また、海洋科学科のオーシャンコースでは、大型実習船による1ヶ月以上の長期乗船実習があるなど、特色のある学校である。

生徒指導上の課題は、以前は粗暴な行動や不良行為が多発した時期もあり規範意識の向上を中心に指導を行ってきた。近年では比較的落ち着いた雰囲気ですべてを送ることができているが、当然のことながら生徒一人ひとりが抱えている課題は異なっており、生徒指導や支援も単一ではない。また、重点的な対応が必要な課題も日々変化している。高校生活は社会に出るための成長の場であると捉えると、指示を受け、行動するのではなく、自ら考え判断し、行動する力を身に付けさせたい。そこで大切にしたいことは、行動の基準は自分にとっての損得ではなく、善悪で判断することだ。

生徒の成長と安全・安心・居心地の良い場所づくりのために、何かあってからの事後指導ではなく、正しい判断ができるための事前指導に重点を置き取り組んでいる。

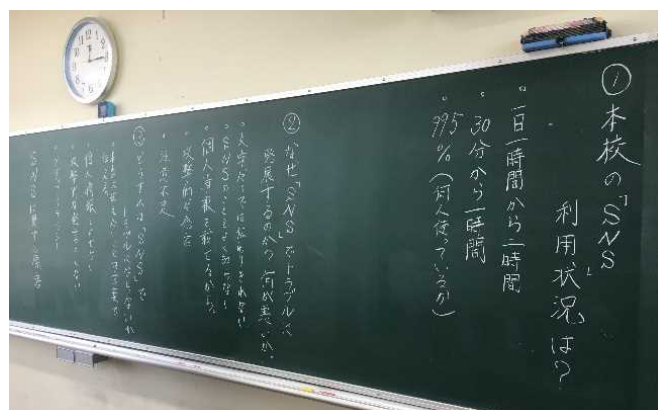
2 マナーアップ週間・集会の取組について

(1) 取組の内容・方法

地域に愛され地域に貢献する学校を目指すため、生徒会を中心に全生徒でマナー向上への取組を10年以上継続している。2週間実施するマナーアップ週間では、日々の活動に加え、マナーアップHRでのクラス討論、それぞれの委員会活動の成果等を発表するマナーアップ集会を実施している。マナー向上が必要だと感じるテーマを毎年設定しており、あいさつや服装、交通マナーなど様々である。「ネットトラブル防止とモラル・マナーの向上」をテーマに設定した年の取組内容を以下に紹介する。

標語の作成

『文字だけで 伝わらないよ その思い』この標語は、「ネットトラブル」についてクラス討議し、作成した標語の最優秀作品である。クラス討議は、自分たちが感じている違和感や改善点を見つめなおし、大人から言われて渋々行動するよりも、自らが感じ、自発的に考えて行動できるようなきっかけづくりの場にもなっている。



マナーアップクラス討議

校内アンケート

自分たちの実情を知ることがを目的に校内アンケート調査を実施している。過去のアンケート結果と比較でき、スマホの所持開始時期は年々若年化し、活用しているアプリ等も数年間で大きく変わっていた。特徴的なアンケート結果は以下の通りである。

- ・フィルタリング実施率：40%以下（実施しているかどうかわからない生徒も多数）
- ・アプリで知り合った人と実際に会った：10%程度
- ・自転車のスマホ操作運転やイヤホン運転でのヒヤリ、ハット経験：40%程度

など、大きな事件や事故に繋がる要素が内在していることが分かる。以前、新聞報道によればSNS上で知り合った複数の人に対する遺体遺棄事件が発生したことがあった。その中には高校生も含まれていた。相手の正体が分からないまま繋がってしまう危険性、SNSでしか助けを求めたり自分を出せない生徒がいること、希薄になりつつあると言われていくリアルな人間関係などの課題を理解し、家庭と連携しながらしっかりとサポートしていく必要性を感じた。

マナーアップ宣言

生徒一人ひとりに対して本校生としての自覚と誇りを持たせ、自分もこの活動の主役の一人であると感じて欲しい。そのため、以下のような「マナーアップ宣言」を集会にあわせて行っている。

香住高校マナーアップ宣言

私たち香住高校はマナーアップに対する取組を10年以上継続しています。今年もマナーアップ週間を通してさらにレベルアップしたマナーアップを目指しています。地域に信頼される香住高校生として、誇りと自覚、そして自信さらに責任を持って次のことを宣言します。

- 一つ、私たち香住高校生は、自信を持って香住高校の制服を着こなし、さわやかな服装・頭髪・身だしなみをします。
- 一つ、私たち香住高校生は、命を大切にするとともに、いつも友達や相手の気持ちを考え、いじめは絶対に許しません。
- 一つ、私たち香住高校生は、交通ルールを守り、自転車通学、列車通学のマナーアップに努めます。
- 一つ、私たち香住高校生は、誰にでも大きな声でさわやかに、元気よくあいさつをします。
- 一つ、私たち香住高校生は、香住高校の美化に取り組むだけでなく地域の美化にも積極的に取り組みます。

以上、ここに私たち香住高校全校生でマナーアップに取り組むことを宣言します。

香住高等学校全校生一同

(2) 取組の成果

自分自身を振り返るきっかけとしての取組を通して、規範意識を高めることにより、生徒にとって学校がより安心・安全・居心地のよい場所となると同時に地域に対するPRにも繋がっている。さらに、ややもすると「自分には関係ない」「自分だけは大丈夫」といった安易な考えに陥りがちである生徒のために、関係機関との連携を密にし、マナーアップ集会に合わせて外部講師を招いた情報教育講演会等を行うことにより、高校生を取り巻く危険性についてしっかりと向き合うことができるようになってきた。

また、自分達が行っている委員会活動の内容をしっかりと全校生に伝える場としての位置づけでもあり、自尊感情や自己有用感を育む場として活用している。

3 自転車免許制度の導入について

(1) 取組の内容・方法

近年、高校生以下に対する賠償責任を課す交通事故裁判の判例があり、高校生は「賠償能力」は無くとも「責任能力」はあるということを問われる時代になった。ところが、スマホ等を操作しながらの「ながら運転」や音楽を聴きながら危険状況に気がつきにくくなる「イヤホン運転」など、自転車の並進や飛び出しと同様に危険を感じる指摘や苦情がある。高校生が被害者にも加害者にもならないために「安全は全てに優先する」という意識を高め、自転車を運転することで発生する責任について考える機会を持ち、交通ルールの順守やマナーの向上が必要である。さらに、危険や事故に関する当事者意識の欠如を無くし、命の尊さや事故の責任について考えさせ、安全運転指導の充実を図るため「自転車免許」制度を導入した。

自転車運転免許制度の実施形態

自転車免許は、第1学年を対象とし、3つの要件（学科講習受講、実技講習受講、学科試験合格）をクリアしたのに対して学校として発行している。講習は例年6月頃に実施し、1学期中に全員が取得するように指導している。

ア．学科講習…美方警察交通課による50分間の安全講習

自転車を取り巻く環境、事故状況、道路交通法、乗り方、整備と積載物、事故判例と賠償、交差点や踏切の通行、事故時の対応等

イ．実技講習…香住自動車教習所による50分間の実技講習

実際の道路走行(坂道、交差点、駐車車両の側方通過等)
運転技術の確認(クランク、スラローム、片手運転の危険性等)

ウ．学科試験 50問(×問題)35問以上の正答で合格

不合格者は、合格するまで追考査の実施

エ．欠席等で受講できない生徒は、別途補習の実施



実技講習・学科講習

(2) 取組の成果

数値的な比較は難しいが、少なくとも生徒の安全に対する意識は高まっており、本校生徒の自転車による重大事故は、本制度の導入後は発生していない。現在では、二人乗りや傘さし運転をする生徒の姿はほとんど見られない。何かあってから取り組むのではなく、事故の未然防止の観点からも今後とも本制度は継続する。また、通学自転車及び寮生活に使用する全ての自転車は、年度当初に職員による点検(ライト、ブレーキ、雨合羽の所有)を行い、整備不良は危険であると認識させ修理させている。

4 担任以外の教員による生徒面談の実施について

(1) 取組の内容・方法

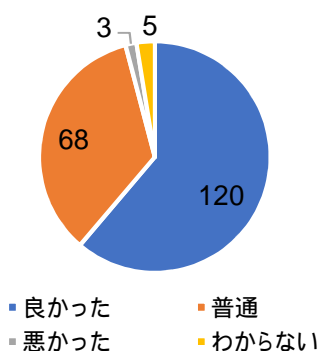
本校では、校内いじめアンケートに真剣に取り組む姿勢づくりを継続させ、いじめの兆候を未然に把握し、いじめに至る前の指導を重視している。本校のいじめ認知の大部分はいじめアンケートによるもので、対応が後手に回る可能性がある。そこで普段から生徒と教員間の信頼関係の構築を行い、些細なことでも相談しやすい環境づくりを進めるた

め、担任以外による生徒面談を実施した。

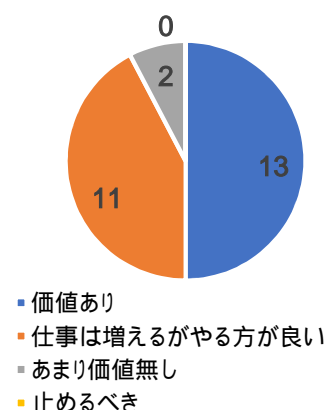
実施方法

事前に生徒から希望する面談教員や内容を調査し、1人10分程度で実施した。それらの面談結果をデータにまとめ、クラス担任や教科担当、部活動顧問を中心に情報共有した。また、生徒、教員からの事後アンケートをとり「面談の価値」「実施時間」「実施形態」等をまとめ、今後の効果的な実施についての検討を行った。

生徒の感想(実施について)



教員の感想(実施について)



(2) 取組の成果

事後アンケートの結果、生徒側は様々な相談ができたり、初めて話ができ良かったという感想が多かった。教員側も、授業や部活動で接しない生徒ともコミュニケーションをとることができ実施の有効性を感じている。

また継続的に CoCoLo-34 の全校生へのアンケートを実施しており、分析をしっかり行うことで各クラス・学年・科の特徴や課題等を生徒指導部でまとめ、それらを各学年やクラスへ報告し、クラス運営に役立てている。資質・能力の特徴には大きなクラス差が見られ、類似した集団として捉えることはできない。強みとして伸ばしたい資質・能力と課題となる資質・能力をそれぞれ適切に見極め、継続的に対応していく。年度ごとの変化を比較すると徐々にバランスが良くなり、資質や能力が育まれている様子が伺える。

面談やアンケート結果の情報を有効に活用し、多面的な生徒理解に努めている。

5 課題及び今後の取組の方向

これらの取組や成果は一朝一夕でのものではなく、多くの協力や助言、支えの中で実施することができたものである。また、時代とともに考え方や感覚も変化していることに敏感に対応していくことが必要である。「インスタ映え」という言葉が少し前に流行したが Instagramとは、画像共有サービスのアプリの名称である。高校生ともなれば、撮影した画像を手軽に加工して共有し、我々よりも詳しく、有意義に活用している。日々進化するスマホ・ITの世界に、教員や保護者がついていけなくなっていると懸念する。そのような世界でのトラブルは、理解と対策が後手にまわってしまいがちであるが、生徒指導の根本は生徒自身が正しく理解し、判断し、行動できるようになることである。新しいアプリが今後開発され、それが世間で広がったとしても、ルールやマナー、モラルを守る意識を持たせれば問題で困ることは多くないはずである。そのためにも規範意識を育て、正しい情報を提供していくことが学校の役割の1つであると考えます。

4 特別支援学校

「社会人として自立していくための就労支援」

一人一人の良さを伸ばし、共生社会で主体的に生きる力を育むキャリア教育

兵庫県立西はりま特別支援学校

主幹教諭 宍戸 成光

はじめに

子どもは、いずれ親から自立し、自らの力で生きていく時期が来る。自立していく上で、障害の有無に関係なく職業に就く等、何らかの形で社会に貢献する力が求められる。また、人と人との交わりの中で、積極的に生きていくために、コミュニケーション能力や基本的マナー等、社会人としての資質・能力を十分に引き出せるよう、小学部入学時点から意図的・計画的に取り組むことが必要である。本来、進路指導は進学や就職に焦点を絞らず、広く社会人として自立していくために必要な能力や態度を身につけることを重視し、子どもの「生きる力」を育てることを目的としている。従って、教育活動の中で、挨拶・返事・礼儀等を定着させ、ルールやマナーを意識しながら周りの人と円滑な人間関係を築くことができる力を育むことが大切である。

1 取組の内容・方法

(1) 作業学習

高等部では、卒業後に事業所等で必要となる働く意欲や態度を育成する目的で、7つの作業班（環境整備・農園・食品加工・革細工・手芸・紙すき・陶芸）に分かれ、週6時間作業学習に取り組んでいる。事業所等での仕事や作業に必要な体力を身につけるとともに、挨拶、報告、連絡、相談（質問）ができるように支援している。原則として3年間で3つの作業班を体験することで卒業後の進路先での必要な作業能力を身につけるよう取り組んでいる。

作業学習（陶芸班）



近隣施設での販売学習



(2) 販売学習

製作物の販売（県民局、総合リハビリテーションセンター等）を行うことで接客、お金の計算等の力も身につけている。

(3) 授業「職業」

授業「職業」では、「自ら挨拶ができ、言葉遣い等の接遇態度を身につけ、働くことの喜びや大切さを味わう」を目標に挨拶・返事・礼儀等を定着させ、ルールやマナーを意識しながら取り組んでいる。

(4) 技能検定に向けた取組県教委が実施しているビルクリーニング・喫茶サービス・物流・品出しを授業に取り入れ、卒業後の社会生活や就労を意識し、取り組んでいる。

技能検定（喫茶サービス部門）



ビルクリーニングや喫茶サービス部門では、練習の成果があり、技能検定に挑戦した生徒全員が認定証を取得することができた。

(5) 外部講師を招いて

地元の企業の方に清掃についての講話と実技講習（トイレ清掃、窓清掃）をしていただくことで、プロの清掃道具の使い方や手順を学び、卒業後の社会生活に生かせるようになってきている。また、プロの技を学ぶことで、掃除に対する意欲が高まり、家庭での掃除にも生かすことができるようになってきている。

清掃講習（トイレ清掃）



清掃講習（窓清掃）



外部講師によるメイク講習



(6) メイク講習

身だしなみの一環として就労をめざす女子生徒対象に本格的なメイク講習を行っている。

(7) 悪徳商法に対する心構えを学ぶ

近年の情報化時代でのネットやスマホ等のトラブルの対処方法についてロールプレイを取り入れるなど実践的に学べるよう取り組んだ。

ロールプレイをすることで、トラブルに、巻き込まれた時の対処方法をより具体的に学ぶことができた。

(8) 校内実習



校内実習では、60分間継続した作業（原則として立ち作業）を行うことにより、手先の巧緻性や集中力・持続力等を身につけるため取り組んでいる。

校内実習（タオルたたみ）

(9) 卒業後の進路を見据えた実習

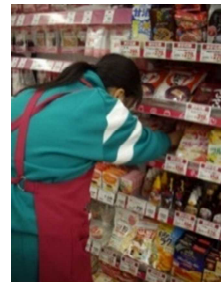
事業所見学（高等部1年生）

卒業生が利用している事業所に行き、先輩の案内のもと働く姿を見学し、自らも体験する取組を行っている。

体験実習（高等部2年生）

責任ややりがいを感じることで就労への意欲を喚起し、積極的に社会参加をしようとする意識を高めるため、生徒の実態把握をした上で生徒の特性に合った事業所を選び、体験実習を行っている。初めての企業実習に戸惑うことも多いが、職場での挨拶やコミュニケーションの大切さを学ぶことができた。

職場体験実習



職場結合実習（高等部3年生）高等部2年生の体験実習で学んだ社会性やマナー等を大切にし、更に実習の成果を十分に発揮し、実習先での就労・利用に結びつけるために結合実習を行っている。結合実習は進路を見据えた大切な実習ということもあり、緊張感の中で行われたが、やり遂げた充実感は生徒の自信となり、卒業後の進路につながる実りある実習となった。

職場結合実習



(10) 資格取得に向けて

漢字能力検定をはじめ特別教育講習（フォークリフト、油圧ショベル）、自動車運転免許の多業種資格取得に取り組むことで就労意欲の向上をめざしている。

特別教育講習（フォークリフト）



近隣の特別支援学校と連携し、フォークリフト等の資格取得に向け取り組んだ。受講（講義・実技・試験）した生徒全員合格することができた。

2 取組の成果

授業「職業」を充実し、高等部3年間で進路を見据えた系統立てた実習等を行うことにより、社会人としての資質・能力が向上し、進路に向けた意欲も高まってきた。販売学習では、外部販売を数多く経験することで、接客のマナー等についての認識が深まり、敬語や丁寧な言葉で接客ができるようになってきた。また、全ての授業の始まりでは「お願いします」、終わりには「ありがとうございました」とはっきり言うことや「礼」と言った後で教師の目を見て礼をすることが社会人としての基礎となることも、高等部教員全員が共通理解をして実践してきた。日常において挨拶を大事にすることにより、社会（職場や施設）で過ごす中においても、円滑な人間関係を築くことができるようになってきている。

3 課題及び今後の取組の方向

学校と家庭が協力し、望ましい職業観や職業に関する知識を身につけさせ、自己の個性や特性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てることが必要である。今後も産業界等関係機関と連携し、児童生徒の個性を大切に、個々のスキルアップをめざして、日々の教育活動に取り組んでいきたいと考えている。そして、日々の授業の中でコミュニケーション能力や基本的なマナー、作業能力等の力を身につけさせ、卒業後社会人として自立していきけるように支援していきたい。

特別支援学校における地域と連携した防災教育の推進

兵庫県立和田山特別支援学校

主幹教諭 柳本 真一

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

本校は但馬南部に位置し、天空の城で名高い竹田城の麓にある。知肢併置の特別支援学校で小学部から高等部の児童生徒 45 名が在籍している。

本校では防災についての取組改革を平成 26 年から行ってきた。朝来市は豪雨や洪水などの経験はあるものの地震被害の経験がなく、防災についてどこか他人事で形式的な状態であった。私が防災担当になり、小学部で車いすを使用している児童に「もし今地震が起きたらどうする？」と尋ねた。すると「机の下に隠れる」という答えが返ってきた。教わったとおりの言葉を繰り返しているだけで本当に必要な力がついていないことが分かった。これを機会に防災教育や防災体制の改革を始めた。また取組を進めるうちに自らの防災への意欲や関心も高まり平成 29 年には EARTH（震災・学校支援チーム）の委嘱を受けたり、防災士の資格も得た。

(2) 地域と連携した防災体験プログラム

本校では学校行事として年 2 回の防災学習を設定している。子どもたちは小学部から高等部までの子どもたちが在籍し、発達段階の幅が広いいため、体験的な学習内容を中心に企画した。体験的であれば楽しみながら学べるだけでなく、子どもたちから大人まで体験を通してそれぞれの発達段階に応じた学びがあり、そこからの広がりも期待できると考えた

からである。平成 27 年の初回は地域の 2 団体と PTA の協力を得て 8 ブース（防災ペーパークラフトや保護者が作ったアルファ化米の試食、水消火器や煙体験等）を設け、1 時間程度の行事であった。当初は「外部人材の活用」という点だけに着目していたが、取組を進めるうちに大きな可能性が分かり大きな広がり生まれた。保護者の防災への関心



防災体験プログラム

が高く、PTA として防災体制の構築や本事業に全面的な協力を得ることができた。更に本事業の充実を図るため、朝来防災の会（地域の防災士会）や防災関連企業、NPO とのつながりが広がり、協力団体が増加した。令和元年度の防災体験プログラムでは 12 団体と PTA の協力を得て、16 ブースを設けるまでに至った。

(3) 福祉避難所開設訓練

平成 30 年の西日本豪雨の際に私は EARTH 員として岡山県倉敷市真備町の小学校に被災地派遣された。避難所となった小学校に EARTH が入り、避難所の状況が次第に改善されていく様子を見て EARTH 員であることに誇りを感じると同時に先輩 EARTH 員の支援

の様子からその職責の重さを感じた。被災地支援をしたことで自らの専門性や地域、学校への課題意識が高まり、積極的に防災教育や福祉防災、心のケア等の研修に参加し、自らの力量を高めた。また、ひょうご防災リーダーと防災士の資格の取得をし、地域防災やコミュニティづくりに関わるなど活動の幅を広げている。

本校のある但馬地域は過疎化が進み、高齢化率が35%を超えている。高齢者に加え、子どもたちや障害者など多様な人が住んでいる。つまり災害時要援護者の割合が非常に高いということの意味している。障害のある子どもたちの防災を考える時、一人ひとりの防災教育をすることも大事であるが、発災した際に子どもたちを支える地域の避難所の状況や地域の方の理解が改善されることも大きな課題である。ある保護者の「我が子の障害を考えると避難所によろ連れていかんわ……。迷惑をかけることになる……。」という率直な言葉も追い風となった。そのため、本校はもとより、朝来市・養父市内の福祉避難所指定されている福祉事業所や行政、当事者である保護者などに福祉避難所のイメージを持ってもらうことの必要性を感じた。

まずは「福祉避難所」を理解し、学ぶ場を作ることを考えた。平成30年に福祉防災上級コーチ湯井恵美子氏の協力を得ながら福祉避難所開設シミュレーションゲームを開発した。本校を舞台に避難所開設や運営をするシミュレーションである。このシミュレーションには実際にあった避難所での出来事や私が被災地支援で見聞きしたことも盛り込んだ。行政関係者や福祉事業所、地域住民、保護者、本校職員で学びを深めた。

翌年、このシミュレーションゲームを元にして実際に福祉避難所開設訓練を行った。行政（朝来市・養父市の危機管理部局）と当日に向けて3回にわたる会議を行い、訓練の内容を検討するだけでなく、市の災害時要援護者の対応について考えていただく機会となった。令和元年度の防災体験プログラムの日には福祉避難所開設訓練を同日開催した。朝来市・養父市とも危機管理部局総出で社会福祉協議会などにも声をかけて参加いただいた。多数の福祉事業所職員や地域住民にも参加していただくことができた。



福祉避難所開設訓練

運営に携わった者は実際に避難所運営を行うことで情報共有等の課題や、被災者の困り感やその対応の困難さなどの課題を見つけることができた。避難所の体験を子どもたちや保護者、地域住民や職員等多くの方に体験してもらうことができた。

（４）令和元年度改訂版学校防災マニュアル改訂

私が学校における防災教育、EARTH 員としての活動、防災士として関わっている地域防災の活動などを行うことで防災の専門性が向上し、令和元年度改訂版学校防災マニュアル改訂作業部会の委員としてマニュアルの改訂に参画させていただいた。今後、高齢化に伴い、災害時要援護者が増えることを踏まえると「配慮することがあたりまえ」であるインクルーシブな避難所になるよう、有する知識を最大限生かして改訂作業を行った。このマニュアルは各学校の防災マニュアルの大元ともいえるマニュアルで、各学校の防災マニ

マニュアルの改訂等に役立てられる。避難所開設の際に「要配慮者支援班」「福祉班」「福祉避難スペース」などを最初から「しくみ」として入れていただけるように明記した。特に但馬地域の高齢化は顕著で災害時要援護者への支援は喫緊の課題になり、いずれ地域住民全員の課題になっていくものと考えたためである。県内の学校の防災マニュアルが全て改訂されるまで時間を



令和元年度改訂版
学校防災マニュアル

少し要するかもしれないが、災害時に活かしてもらえるようになれば、少しでも避難所における災害時要援護者の困り感を減らすことができるようになることを期待している。

2 取組の成果

本校での防災の取組を進めるプロセスの中で、学校が発信することで「人や地域育つこと」がわかった。地域人材を活用した防災体験プログラムや福祉避難所開設訓練は参加者（学習者）と協力企業や団体の双方にとって学びとなり、地域や家庭等での防災力の向上に寄与することができた。さらにこの場を通して、参加者どうしや地域との「つながり」が生まれ、新たな研修の機会の創出や地域の防災備品等の整備にもつながった。また、保護者の中にもひょうご防災リーダーや防災士の資格取得する方が生まれた。意識が高くなり家庭でいざという時のために備えをしたり、主体的に学びの場に出て行かれる方も出てきた。本校の防災体験プログラムを始めた当初から支援いただいている防災士の方々にも変化があった。付き合いを重ねているうちに子どもたちへの接し方も変化してきている。子どもたちが活動しやすいように工夫したり、分かりやすいよう話すなどしていただける

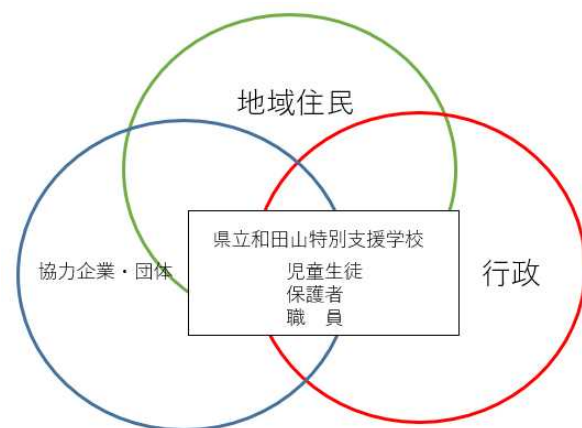
ようになった。平成 30 年 7 月豪雨（西日本豪雨）の際には「困っていることはないですか？」と学校に温かい声をかけていただいた。さらに地域の防災を考える会合や防災訓練等でも地域に住む障害のある方々の避難等にも配慮して下さるようになった。

協力いただいた企業や団体の方々は「アウトプットすることで力量が上がった。」「今まで防災という観点でしたことがなかったけれど、新しいことをやってみて意識が高まった。」「新しい出会いがあった。」「といった声をいただいた。

学びの場やつながりは人を育て、人が育てば地域が育つ。また、地域に公開することで本校の子どもたちのことを地域や行政の方などに知ってもらう機会にもなった。地域の方々にとって特別支援学校は「おらが学校」ではないため、広報啓発のみでは、なかなか足を運んでいただくことができず、本校教育や障害児者への理解が進まない。広い意味で地域の学校となりにくい側面があり、訪れる機会も少なく、地域の方々にとっても敷居が高いのが実情である。そのため、多くの地域の方々が本校を訪れていただけた意義は大きいと考えている。本校の子どもたちのことを知っていただくことは、日頃の障害児者の理解はもとより、災害時の支援や周囲の理解も大きく直結する。理解が進むこと、つながりができることで、子どもたちが将来地域で生きていくのに支援の輪が広がったり、就労等のチャンスも広がるかもしれないといったことにも期待している。

学校をオープンにして学びの場を創出することは新学習指導要領の理念である「社会に開かれた教育課程」にも合致すると考えている。令和 2 年度のぼうさい甲子園では UR レジリエンス賞を受賞することができた。目指していたレジリエンス（縮災）という考え方に対して授与される賞であるため大きな励みとなった。災害は必ずやってくる。本校での

取組が校内だけで完結する学びに留まらず、地域の多くの人々やレジリエンスに寄与できたことには大きなやりがいを感じた。学校の内部だけで完結するのではなく、地域の専門家の協力を得ることで、より質の高い学びが可能である。そして、地域にとってもベネフィット(利益)がないと持続可能な活動となりえない。地域とつながり地域を育てるということは、子どもたちが地域住民として生きていく環境を整えることにもつながり、より良い「まちづくり」につながっていくと考えている。



3 課題及び今後の取組の方向

「防災」を通して、地域とつながっていくと学校の取組が地域の方に理解してもらえ、学校への理解や支援の輪が広がってきた。学校が地域へ「防災」を発信することで地域が変わってきた。

しかし、コロナ禍によりコロナ以前と一変してしまった。コロナのせいにしたくはないがこれまでのように多くの人が集まって行う行事はしにくくなってしまった。したいことがしにくい状況は世界中が同じ状況である。本校では基礎疾患を有する子どもたちも在籍するため慎重にならざるを得ない。そこで、本校では子どもたちはもとより、保護者や職員、本校に関わる方々の健康と安全を守るために「新型コロナウイルス感染症ガイドライン」を作成し、感染症予防に努めている。このことは当面の間、最優先にしていかなければならない課題であると考えている。これもある意味では、災害時とよく似た状況であ

る。ウイズコロナの状況下では、これまでのように大きな前進を望むことは困難であるが、十分でない部分を見直したり、今の状況下で「できること」を考え積み上げるとともに、アフターコロナにつながる取組を考えていきたい。私自身、コロナによりオンラインによる研修を受ける機会が増え、コロナ前ではつながることのなかった全国の人たちとのつながりが増えている。集まれなくても「つながり」(ネットワーク)を作って人とつながっておくことで、アフターコロナには、その「つながり」やそこから得た知見を最大限生かせるチャンスでもあると捉えている。今は積極的につながりを広げたり、自己研鑽に励み、力を蓄えたい。

最後に、コロナの問題を考える時、感染しないように物理的に3密を避けて予防していくことは大切である。しかし、集まれなくても人どうしの「心」や「つながり」はもっと密にしていかなければならないと考えている。多様性や異なる価値観を認め、排除せずお互いを思いやったり、助け合っていく社会にしていくのに不可欠であるからである。辛い思いをしている人や支援からこぼれてしまう人を救うのも「人」で、全て他者を思いやる「心」や人と人の「つながり」から生まれる。平時により良い社会が実現できれば、災害時もきっと乗り越えることができるだろう。

最後に本校での取組にはたくさんの方々の協力を得て実現することができた。また、防災を通して、多くの方とのつながりから多大なるご協力と支援をいただいたことをこの場を借りてお世話になった皆様に謝辞を申し上げたい。